

# 市内埋蔵文化財発掘調査報告書3

平成19・22～26年度  
基地内遺跡ほか発掘調査事業

野 嵩 上 後 原 古 墓 群  
野 嵩 真 境 名 家 古 墓  
真 志 喜 グ ス ク ヌ ハ ナ 古 墓 群  
真志喜グスクヌハナ古墓群第11-1号墓  
嘉数比屋良川流域古墓群第07-1号墓  
喜 友 名 前 知 花 家 之 墓  
大謝名久永地原第一古墓群第13-1号墓

# 市内埋蔵文化財発掘調査報告書3

平成19・22～26年度  
基地内遺跡ほか発掘調査事業

野 嵩 上 後 原 古 墓 群  
野 嵩 真 境 名 家 古 墓  
真 志 喜 グ ス ク ヌ ハ ナ 古 墓 群  
真志喜グスクヌハナ古墓群第11-1号墓  
嘉 数 比 屋 良 川 流 域 古 墓 群 第 07-1 号 墓  
喜 友 名 前 知 花 家 之 墓  
大 謝 名 久 永 地 原 第 一 古 墓 群 第 13-1 号 墓

2017年(平成29年)3月

沖縄県 宜野湾市教育委員会

## 序

本報告書は平成 19・22～26 年度にかけて宜野湾市教育委員会が実施した、市内古墓群における埋蔵文化財発掘調査、分布調査等の成果をまとめたものであります。

宜野湾市には 42 の古墓群が存在しており、今回の報告書は野嵩上後原古墓群、真志喜グスクヌハナ古墓群、嘉数比屋良川流域古墓群、喜友名後原丘陵古墓群、大謝名久永地原第一古墓群の 5 つの古墓群で行われた調査を対象としています。

今回の調査では、掘込墓を中心とした古墓の分布状況、外観や内観の型式、遺物の様相などを窺い知ることができました。中でも蔵骨器は、石製や陶製の厨子、嘉数比屋良川流域古墓群第 07-1 号墓で見つかった宮古式土器を使用したものなど様々なものが見られ、銘書などから多くの情報を得ることができます。

これらは宜野湾市の古墓の型式や編年などを研究する上で重要であるとともに、宜野湾市の歴史を語る上でも重要な文化遺産であります。

今回の調査成果を歴史的教材や文化財保護、学術研究資料等に広く活用して頂ければ幸いです。

末尾になりましたが、調査の場を提供して頂きました施主様をはじめ、調査を実施するにあたり、多大なご指導を賜りました文化庁文化財部と沖縄県教育庁文化財課、並びに貴重なご指導・ご助言を賜りました市文化財保護審議会の先生方、その他関係各位に対しまして心から感謝申し上げます。

2017（平成 29）年 3 月

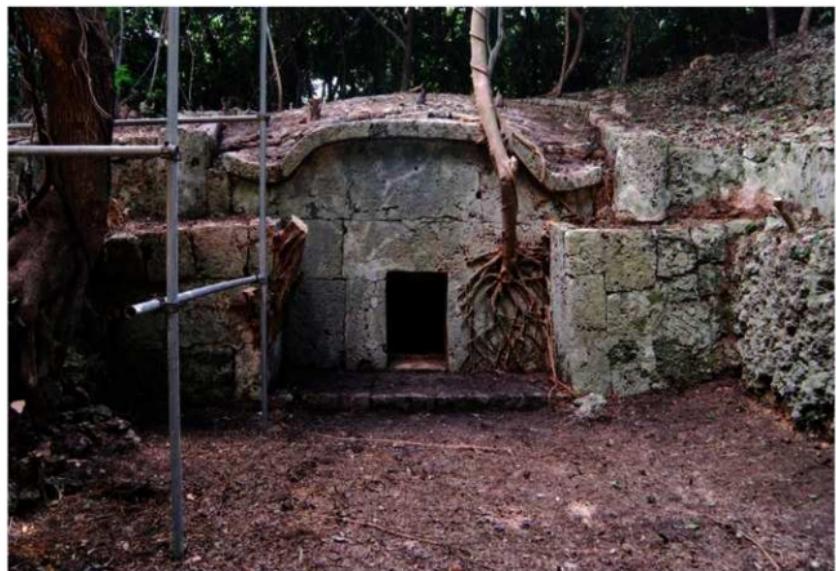
沖縄県 宜野湾市教育委員会  
教育長 知念 春美



卷頭図版1 報告書所収遺跡位置



卷頭図版 2 野嵩上後原古墓群：19号墓室内 厨子配置状況



卷頭図版 3 野嵩真境名家古墓：墓正面〔西南西より〕



卷頭図版4 真志喜グスクヌハナ古墓群：22号墓（奥間大親之墓）



卷頭図版5 嘉数比屋良川流域古墓群：第07-1号墓



卷頭圖版 6 喜友名前知花家之墓：作業狀況



卷頭圖版 7 大謝名久永地原第一古墓群：第 13 - 1 号墓 墓口正面

## 例　言

1. 本報告書は、いずれも宜野湾市教育委員会が国・県の補助を受け、平成 19 年度に行った比屋良川公園造成工事に係る記録調査、平成 22 年度に行った野嵩公園造成工事に係る記録調査および喜友名個人墓新設工事に係る記録調査、平成 23 ~ 24 年度に行った真志喜グスクヌハナ丘陵古墓群の記録調査、平成 26 年度に行った野嵩公園造成工事に係る試掘調査の成果を収録したものである。
2. 本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図(1:2,500)を使用しており、他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営している GIS データを主に使用している。
3. 発掘調査並びに本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系（旧座標系）第 XV 座標系の座標北を用い、層位・遺構は海拔高（那覇）を基準とした高さである。
4. 本書で使用した土色は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。
5. 本書の執筆分担は下記の通りで、編集は翁長・杉村の協力を得て、伊藤・長濱・仲村・来間が行った。

第 I 章、第 II 章、第 VII 章、第 IX 章	伊藤　圭
第 III 章	長濱　健起
第 IV 章	仲村　毅
第 V 章、第 VI 章	来間　千明
第 VII 章	山田　浩久

6. 現地調査で得られた実測図・写真・画像デジタルデータ・地形測量図等の各種調査記録は、全て宜野湾市教育委員会文化課に保管している。

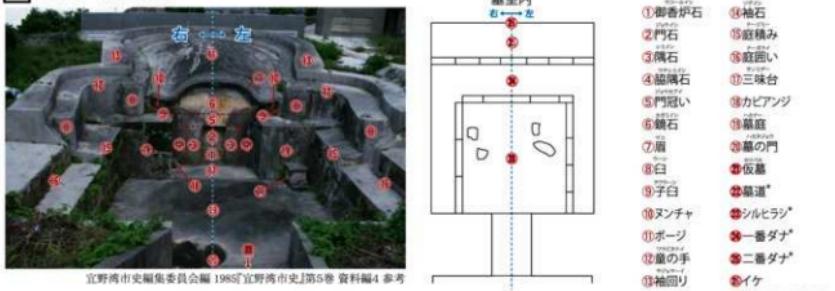
# 凡例 1

## 1 墓型式

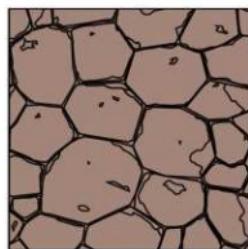
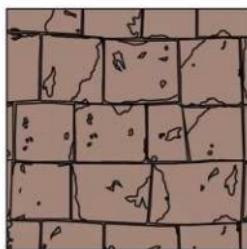
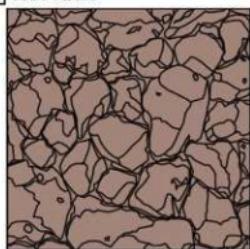
分類	墓型式	特徴	代表例／市内例	模式図
I	a ガマバカ 潜穴墓	自然洞穴を利用する墓。 洞穴開口部を石積みによって塞ぐものを「潜穴埋込墓」と呼ぶ。	・久米島町ヤチのガマ ・宜野湾市喜友名山川原丘陵古墓群 フクヤブア演窟	
	b 岩陰墓	自然の岩陰を利用する墓。 岩陰前面を石積みによって塞ぐものを「岩陰埋込墓」と呼ぶ。	・浦添市伊祖の高御墓 ・宜野湾市喜友名前原第一古墓群 岩陰A-D	
II	a フィンジャー 埋込墓 (正面装飾なし)	斜面や岩盤を削り込んだ墓。 概ね、石積みや塗壁で入口が塞がれるのみで、正面は装飾されない。ただし、屋根を構築するものや、例外的に正面のみを亀甲墓状に飾るものもある。	・宜野湾市小禄墓 ・宜野湾市美間ノロ墓	
	b フラーバー 破風墓	正面を装飾した埋込墓で、屋根が破風形(切妻形)になる墓。 墓の背面が露出するものもある。	・那覇市玉陵 ・糸満市幸地腹門中墓	
III	c ヒラチバカ 平葺墓	正面を装飾した埋込墓で、平屋根を構築するもの。 屋石は直線状。	・浦添市伊祖の入り御拌飯墓 ・浦添市内間原近世墓群1号墓	
	d ヨーナーババ 亀甲墓	正面を装飾した埋込墓で、屋根が亀甲形になるもの。平地に建てられるものもある。 袖回りが省略されて、亀甲の盛り上がりが強調されるものを「ボージャーババ」と呼ぶ。	・那覇市悠古古墓群 「伊是名御殿内の墓」 ・宜野湾市大山東方第V丘陵古墓群 「大山上江家古墓」	
IV	a サーチバカ 家形墓	平地に建られた墓で、外觀が家の形を呈するもの。 屋根は概ね破風形(切妻形)であるが、中には亀甲形のものや塔を建てるものがある。	—	
	b カリハカ 仮墓	平地に建られた簡易的な墓。 概ね小型で、市販のものと構築されたものがある。中にはやや大きなものもあり、「箱形墓」と呼称されるものもある。	—	

『宇地泊西原丘陵古墓群』（宜野湾市教育委員会編 2008）より転載

## 2 亀甲墓の部位名称

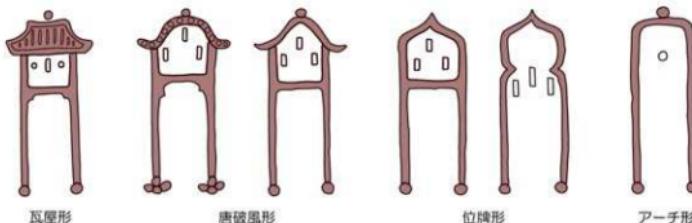
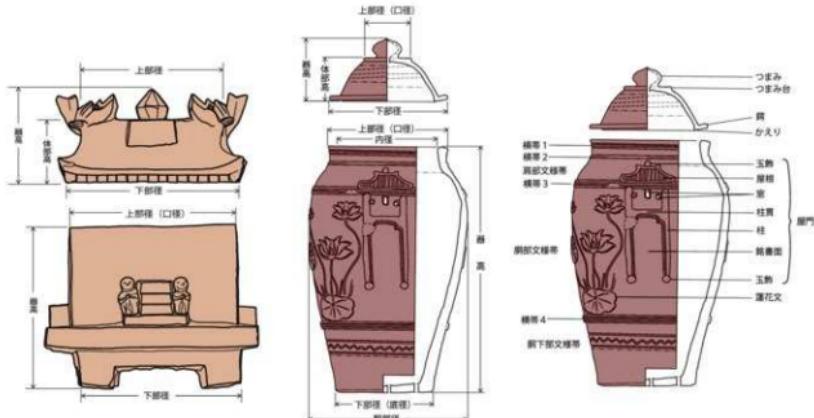


## 3 石積み技法



## 凡例 2

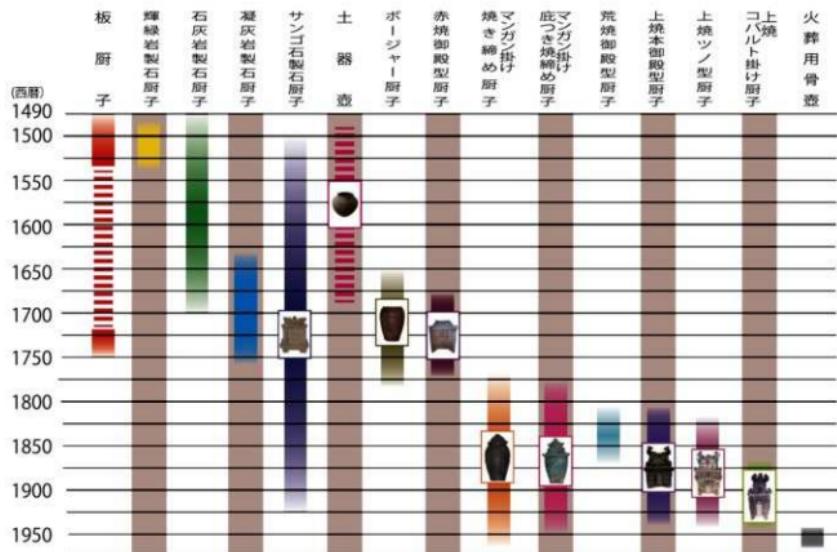
- 沖縄では、洗骨後の骨を納めておく壺のことを一般にジーシガーミ（厨子壺）というため（上江洲 1980）、本書でも蔵骨器に「厨子」の表記を用いている。
- 厨子の分類は、基本的に上江洲均（上江洲 1980）・浦添市教育委員会（浦添市教育委員会 1999、2006）に倣った。
- 厨子番号は墓室内に安置されている状況において、墓口左側より時計回りに任意の番号を付すのを基本とした。
- 諸般の事情により、実測が出来なかった遺物などに関しては、オルソ画像や写真を用いている。
- 遺物の集計表や実測図などは紙幅の都合上、割愛したものもある。
- 各厨子の計測位置および部位名称は以下のとおりである。



屋門の分類

『伊祖の入め御葬領墓の厨子壺と被葬者』  
(浦添市教育委員会 1999) より抜粋の上、一部加筆

### 凡 例 3



沖縄県立博物館・美術館「博物館企画展すしがめの世界」を基に作成。  
※原表は、上江洲均「沖縄の暮らしと民具」掲載の表を一部加筆修正。

## 目 次

序  
卷頭図版  
例言  
凡例

第Ⅰ章 宜野湾市の位置と環境 .....	1
第1節 地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	3
第Ⅱ章 事業概要 .....	6
第1節 調査体制 .....	6
第2節 調査協力 .....	8
第Ⅲ章 野嵩上後原古墓群の調査成果 .....	9
第1節 はじめに .....	9
1. 位置と環境 .....	9
2. 野嵩区の歴史的環境と遺跡の概要 .....	11
3. 調査の経緯と経過 .....	12
第2節 遺構 .....	14
1. 墓の型式 .....	14
2. 墓の構造 .....	14
第3節 まとめ .....	20
第Ⅳ章 野嵩真境家古墓（野嵩上後原古墓群）の調査成果 .....	21
第1節 はじめに .....	21
1. 位置と環境 .....	21
2. 遺跡の概要 .....	21
3. 調査経過 .....	22
第2節 墓の構造 .....	23
1. 外観について .....	23
2. 墓庭（ハカナー）について .....	24
3. 墓室について .....	25
第3節 遺物 .....	26
1. 蔵骨器の配置 .....	27
2. 蔵骨器の觀察 .....	28
第4節 まとめ .....	44
第Ⅴ章 真志喜グスクヌハナ古墓群の調査成果 .....	45
第1節 はじめに .....	45

1. 位置と環境	45
2. 遺跡の概要	47
3. 調査経過	47
<b>第2節 遺構</b>	<b>48</b>
1. 墓の構造	48
<b>第VI章 真志喜グスクヌハナ古墓群第11-1号墓の調査成果</b>	<b>59</b>
<b>第1節 調査経過</b>	<b>59</b>
<b>第2節 遺構</b>	<b>59</b>
<b>第VII章 嘉数比屋良川流域古墓群第07-1号墓の調査成果</b>	<b>63</b>
<b>第1節 はじめに</b>	<b>63</b>
1. 位置と環境	63
2. 立地と調査に至る経緯	64
3. 古墓群の概要	64
4. 調査経過	65
<b>第2節 古墓の概要</b>	<b>65</b>
<b>第3節 遺構</b>	<b>65</b>
1. 墓の構造	65
<b>第4節 遺物</b>	<b>69</b>
1. 蔵骨器	69
2. 墓室内出土蔵骨器配置	72
<b>第5節 まとめ</b>	<b>72</b>
<b>第VIII章 喜友名前知花家之墓（喜友名後原丘陵古墓群）の調査成果</b>	<b>73</b>
<b>第1節 はじめに</b>	<b>73</b>
1. 位置と環境	73
2. 調査経過	75
<b>第2節 墓の構造</b>	<b>76</b>
<b>第3節 遺物</b>	<b>78</b>
1. 蔵骨器	78
2. その他の遺物	78
<b>第IX章 大謝名久永地原第一古墓群第13-1号墓の調査成果</b>	<b>87</b>
<b>第1節 はじめに</b>	<b>87</b>
1. 位置と環境	87
2. 調査経過	89
<b>第2節 墓の構造</b>	<b>90</b>
<b>第3節 遺物</b>	<b>92</b>
<b>参考・引用文献</b>	<b>97</b>
<b>報告書抄録</b>	

## 卷頭図版

卷頭図版1 報告書所収跡位置

卷頭図版2 野嵩上後原古墓群：19号墓室内 扉子配置状況

卷頭図版3 野嵩真境名家古墓：墓正面〔西南西より〕

卷頭図版4 真志喜グスクヌハナ古墓群：22号墓（奥間大觀之墓）

卷頭図版5 嘉数比屋良川流域古墓群：第07-1号墓

卷頭図版6 喜友名前知花家之墓：作業状況

卷頭図版7 大謝名久永地原第一古墓群：第13-1号墓 墓口正面

## 挿図目次

第I - 1 図 宜野湾市の位置	1	第VI - 2 図 正面図・平面図・断面見通し図	60
第I - 2 図 宜野湾市地形分布図	2	第VII - 1 図 嘉数比屋良川流域古墓群第07-1号墓の位置図	63
第I - 3 図 宜野湾市全体空中写真（昭和20年）	2	第VII - 2 図 嘉数比屋良川流域古墓群第07-1号墓の位置と周辺の文化財	63
第III - 1 図 野嵩上後原古墓群の位置図	9	第VII - 3 図 昭和20年航空写真と地形図	64
第III - 2 図 野嵩上後原古墓群の位置と周辺の文化財	9	第VII - 4 図 墓室内（平面図・断面図・墓口断面見通し図）	66
第III - 3 図 昭和20年航空写真と地形図	10	第VII - 5 図 蓋：笠形、身：土器壺	70
第III - 4 図 地形測量図（白抜きは改変部）	13	第VII - 6 図 喜友名前知花家之墓の位置図	73
第IV - 1 図 野嵩真境名家古墓の位置図	21	第VII - 7 図 喜友名前知花家之墓の位置と周辺の文化財	73
第IV - 2 図 平面図・正面図・墓室内平面図・断面図	26	第VII - 8 図 昭和20年航空写真と地形図	74
第IV - 3 図 墓室内扉子配置略図	27	第VII - 9 図 墓室平面図・墓断面図	76
第IV - 4 図 上焼本御殿型扉子・サンゴ石製石扉子	30	第VII - 10 図 沖縄産施釉陶器：鉢（ワンブー）	79
第IV - 5 図 サンゴ石製石扉子	32	第VII - 11 図 マンガン掛け	80
第IV - 6 図 身：ボージャー扉子 蓋：マンガン掛け 焼締め扉子、ボージャー扉子	34	燒締め扉子・1：蓋・身	82
第IV - 7 図 ボージャー扉子	36	第VII - 12 国 葵型扉子・2：蓋・身	84
第IV - 8 図 マンガン掛け焼締め扉子	38	第IX - 1 国 大謝名久永地原第一古墓群第13-1号墓 の位置図	87
第IV - 9 国 マンガン掛け焼締め扉子	39	第IX - 2 国 大謝名久永地原第一古墓群第13-1号墓の 位置と周辺の文化財	87
第IV - 10 国 マンガン掛け焼締め扉子	40	第IX - 3 国 昭和20年航空写真と地形図	88
第IV - 11 国 マンガン掛け焼締め扉子	41	第IX - 4 国 地形測量図	90
第V - 1 国 真志喜グスクヌハナ古墓群の位置図	45	第IX - 5 国 平面図・墓室平面図・断面図・立面図	91
第V - 2 国 真志喜グスクヌハナ古墓群の位置と周辺 の文化財	45	第IX - 6 国 沖縄産無釉陶器：壺／甕、本土産磁器： 碗・湯呑	93
第V - 3 国 昭和20年航空写真と地形図	46	第IX - 7 国 家型石扉子：蓋、身、家型陶製石扉子： 身、蓋	94
第V - 4 国 古墓の分布状況	49	第IX - 8 国 扉子甕：蓋	96
第V - 5 国 12-22号墓 石階段平面図	54		
第V - 6 国 12-22号墓 墓口正面図	55		
第V - 7 国 12-28号墓 墓口正面図	56		
第V - 8 国 12-29号墓 墓口正面図	57		
第VI - 1 国 真志喜グスクヌハナ古墓群第11-1号墓の位置図	59		

## 図版目次

図版I - 1 沖縄の古墓	4	図版IV - 3 屋根（ボージ）	23
図版I - 2 沖縄の古墓	5	図版IV - 4 屋根（ボージ）拡大	23
図版III - 1 野嵩区南方を横切る丘陵地（野嵩上後原 古墓群 北西より）	10	図版IV - 5 墓から右側の白（ウーシ）〔南西より〕	23
図版III - 2 スディバニビラ（野嵩石疊道）	11	図版IV - 6 墓から左側の白（ウーシ）〔南西より〕	23
図版III - 3 野嵩上後原古墓群遠景〔南西より〕	11	図版IV - 7 庭園（ナーガケイ）右側の空洞	24
図版III - 4 作業風景	12	図版IV - 8 墓の門（ハカヌジョー）	24
図版III - 5 古墓の構造状況	14	図版IV - 9 御香炉石（ウコールイシ）	24
図版III - 6 古墓確認状況	19	図版IV - 10 三味台（サンミデー）	24
図版III - 7 庭園を持たない古墓が連なる	20	図版IV - 11 門石（ジョウイシ）	25
図版IV - 1 作業状況	22	図版IV - 12 通路の上	25
図版IV - 2 野嵩真境名家古墓全景〔南西より〕	22	図版IV - 13 シルヒラシ	25
		図版IV - 14 タナ	25

図版IV-15	蔵骨器配置状況	27
図版IV-16	ボージャー厨子：窯印	28
図版IV-17	ボージャー厨子：蓋・銘書	28
図版IV-18	屋門（蔵骨器Na⑨・⑩）	29
図版IV-19	屋門（蔵骨器Na⑤・⑥）	29
図版IV-20	上焼本御殿型厨子・サンゴ石製石厨子	31
図版IV-21	サンゴ石製石厨子	33
図版IV-22	身：ボージャー厨子 蓋：マンガン掛け 焼締め厨子、ボージャー厨子	35
図版IV-23	ボージャー厨子	37
図版IV-24	マンガン掛け焼締め厨子	38
図版IV-25	マンガン掛け焼締め厨子	39
図版IV-26	マンガン掛け焼締め厨子	40
図版IV-27	マンガン掛け焼締め厨子	41
図版V-1	森の川	46
図版V-2	真志喜森川原第一遺跡	46
図版V-3	作業風景	47
図版V-4	1号墓・2号墓	58
図版V-5	53号墓・54号墓・55号墓・56号墓	58
図版VI-1	真志喜グスクヌハナ古墓群第11-1号墓	61
図版VI-2	真志喜グスクヌハナ古墓群第11-1号墓	62
図版VII-1	作業風景	65
図版VII-2	上：墓室内蔵骨器検出状況、下：蔵骨 器内部状況	67
図版VII-3	墓室内	68
図版VII-4	蔵骨器（左：蓋、右：身）	70
図版VII-5	蔵骨器	71
図版VII-6	嘉数比屋良川流域古墓群（左：遠景右：近景）	72
図版VII-1	喜友名泉	74
図版VII-2	喜友名西原石切場跡	74
図版VII-3	喜友名後原丘陵古墓群周辺の古墓	75
図版VII-4	調査経過状況	75
図版VII-5	墓の取り壊し状況	75
図版VII-6	喜友名前知花家之墓	77
図版VII-7	蔵骨器の安置状況	78
図版VII-8	沖縄産施釉陶器：鉢（ワンブー）	79
図版VII-9	マンガン掛け底付き焼き締め厨子：蓋・身	81
図版VII-10	陶製家型厨子-1：蓋・身	83
図版VII-11	陶製家型厨子-2：蓋・身	85
図版VII-12	陶製家型厨子-1：銘書	86
図版IX-1	普天間飛行場内の大謝名久永地原古墓群 (左写真：1980年代撮影)	88
図版IX-2	民間地の大謝名久永地原第一古墓群（平 成28年撮影）	89
図版IX-3	調査経過状況	89
図版IX-4	サンミーダー検出状況	90
図版IX-5	遺物散布状況	92
図版IX-6	沖縄産無釉陶器：壺/甕、本土産磁器：碗・湯呑	93
図版IX-7	家型石厨子：蓋・身、家型陶製石厨子：身・蓋	95
図版IX-8	厨子蓋：蓋	96

## 挿表目次

第三III-1表	古墓一覧-1	15
第三III-2表	古墓一覧-2	16
第三III-3表	古墓一覧-3	17
第三III-4表	古墓一覧-4	18
第五V-1表	古墓一覧-1	50
第五V-2表	古墓一覧-2	51
第五V-3表	古墓一覧-3	52
第五V-4表	古墓一覧-4	53
第七VII-1表	蔵骨器観察一覧-1	69
第七VII-2表	蔵骨器観察一覧-2	70
第七VII-1表	墓計測一覧	77
第七VII-2表	遺物観察一覧	79
第九IX-1表	遺物集計一覧	92
第九IX-2表	遺物観察一覧	93

# 第Ⅰ章 宜野湾市の位置と環境

## 第1節 地理的環境

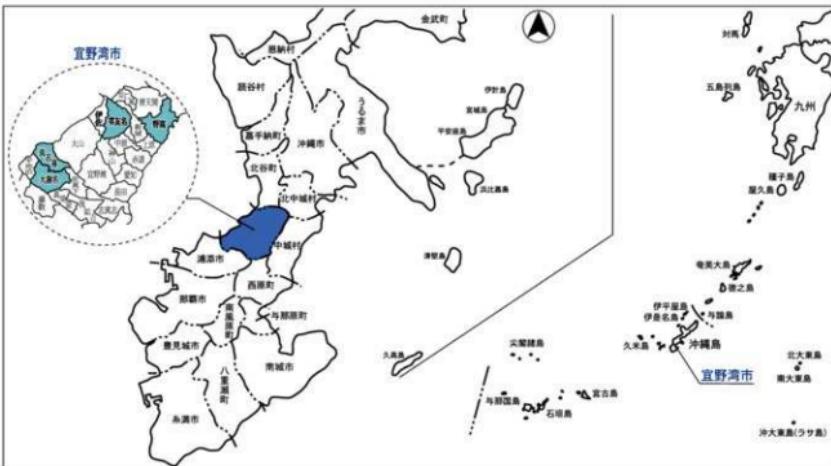
宜野湾市は、沖縄本島の中部西海岸にあって、東シナ海に面し、北谷町・北中城村・中城村・西原町・浦添市に隣接する。総面積は19.37 km<sup>2</sup>を測り、略東西6.1 km・略南北5.2 kmの略長方形を成す。市域北西にはキャンプ瑞慶覧、中央には普天間飛行場基地が占有し、市民は飛行場基地を廻る外縁を居住域とする。基地は、本市における地目の33.3%を占める（1992年現在）。これは、本市地目の36.3%にあたる民間の宅地に次ぐ広さである。

本市の地形は、起伏の小さい丘陵と琉球石灰岩で構成される台地や低地から成り、台地にはカルスト地形が発達する。特に、平地面を形成する台地が最も発達しており、埋立地を除く市域面積の3分の2を占める。市域の台地は海岸段丘であり、海岸から内陸に向かって雛壇状を呈する4つの段丘から成るが、市域西側と東側で様相が異なり、西側は西海岸へと穏やかに傾斜する3つの段丘面から成り立つ海岸段丘と、それに連続する海岸低地が広がり、東側はこれとは対照的に開拓の進んだ丘陵地が展開する（第1-2図）。

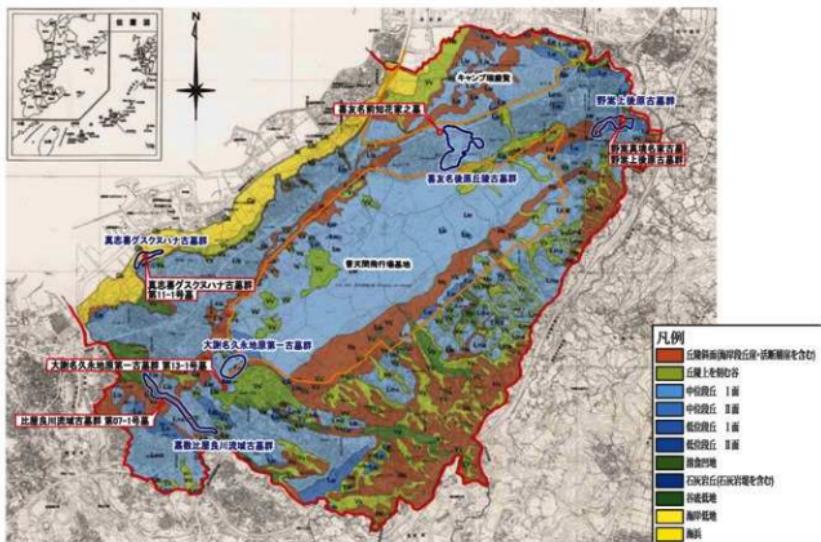
沖縄県の海岸段丘は、高位段丘・中位段丘・低位段丘に区分されており（河名 1988）、市域の段丘は中位段丘と低位段丘で構成される。『宜野湾市史』第9巻では、さらにこれらを下位面と上位面で区別している。

低位段丘下位面（第1面）は、比屋良川の河口右岸から宇地泊・大山・伊佐に連なる標高3～30 mの海岸低地である。低位段丘上位面（第2面）は、標高30～40 mの石灰岩段丘で、大山・真志喜・宇地泊・伊佐の住宅地が密集する。中位段丘下位面（第3面）は、キャンプ瑞慶覧から普天間飛行場基地へと延びる標高50～90 mの石灰岩段丘である。中位段丘上位面（第4面）は、標高90 m以上の高位置にあり、我如古から野嵩に至る国道330号線より西側から東へ分布する。赤道から宜野湾にかけて展開する緑地帯がその代表である。

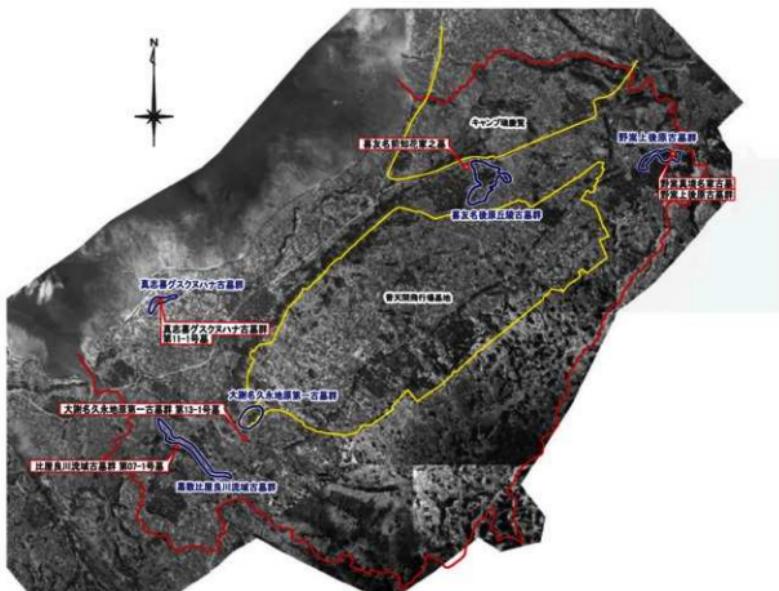
内陸側の3つの段丘面（第2面～第4面）は、大半が琉球石灰岩層で成り立つ。この琉球石灰岩層の段丘面には洞穴と湧水が点在し、本来の自然及び人文的景観の特徴となっている。河川は、浦添市・西原町との境に比屋良川、北谷町・北中城・中城村との境に普天間川が流れる。



第1-1図 宜野湾市の位置



第I-2図 宜野湾市地形分布図



第I-3図 宜野湾市全体空中写真（昭和 20 年）

## 第2節 歴史的環境

沖縄諸島に人類が住み着いたのは、現在から約3万年前とされる。本市大山洞穴からは、20歳前後の男性の下顎骨片が発見されており、付近で採取された炭化物の放射性炭素年代測定では約18,000年前の年代が得られた（高宮ほか1975、鈴木1975）。この他にも市内では、普天満宮洞穴遺跡（市指定名勝）などにおいてリュウキュウムカシキヨンやリュウキュウジカなどの更新世に比定される化石動物が発見されている。この時期は長い間明確な人工遺物や遺構が見付かっていなかったが、南城市サキタリ洞遺跡で約2万年前の貝器等が出土し（山崎2015）、当時の人々の生活文化の一端を知る発見となった。

沖縄諸島において、土器などの使用が明確に確認されている時期は、約6,000～7,000年前（貝塚時代早期）からである<sup>6</sup>。新城下原第二遺跡のIX層は、当該期の文化層であり、ヤブチ式土器など様々な種類の遺物が出土している（沖縄県立埋蔵文化財センター編2006）。近年、この時期の遺跡は増えつつあるが、明確な遺構が検出された例は極めて少ない。竪穴住居などの生活址が増え始めるのは貝塚時代前期（縄文時代後期並行）からである。貝塚時代中期の喜友名東原ヌバタキ遺跡では、大型の竪穴建物跡も検出されており、この時期から定住化が顕著にあらわれる。そして、真志喜安座間原第一遺跡では墓域が確認されるなど埋葬遺構が検出されるのも概ねこの時期からである。当該遺跡では、土壙墓や配石を伴う埋葬墓などが44基検出されている（宜野湾市史編集委員会編1994）。また、市指定史跡である大山マヤーガマ第二洞穴遺跡では、貝塚時代前期～中期の埋葬墓が検出されているように、岩陰の利用もこの時期を特徴付ける墓制である。

貝塚時代後期（弥生時代～平安時代）に入ると人々は概ね海岸砂丘に生活の場を移す。真志喜安座間原第一・第二遺跡では竪穴建物跡など多様な遺構が検出されており、平地住居跡（掘立柱建物跡）も僅かに確認されている。これは、ナガラ原西貝塚やアカジャンガー貝塚、古座間味貝塚などでも検出されており、当該期の住居は竪穴式と平地式が共存することが知られる。なお、当該期の集落址からは稻作や農耕の痕跡は確認されておらず、この時期もまだ採取社会であった可能性が指摘されている（高宮2005など）。そのため、当時の人々が本土の弥生文化を享受したとは言い切れず、読谷村木綿原遺跡において検出された箱式石棺墓についても、南島独自の特徴を有しているとする見解もある（時津2000）。なお、同様の埋設遺構は古座間味貝塚でも検出されているという（嵩元・当間1981）。本市では、真志喜安座間原第二遺跡において、集落に伴って当該期の土壙墓や覆石墓が検出されている。

グスク時代に入ると、農耕を基盤とする社会が形成される。各地に按司が割拠して、九州（博多）・中国との貿易が行われ、滑石製石鍋やカムィヤキ、中国産陶磁器の輸入が始まる。真志喜石川第一遺跡では、石鍋模倣土器やカムィヤキを伴う9本柱造りの掘立柱建物跡が検出されたほか、同遺跡西域からは、滑石製石鍋やカムィヤキ、白磁玉縁碗などが共伴する建物跡も検出されている（宜野湾市教育委員会編1989）。13世紀になると、有力な按司がグスクを築き、武力によってそれぞれの地域を支配するようになる。そして、英祖王の頃には浦添に陵墓が築かれ、極楽山（後の浦添ようどれ）と呼称された。

14世紀末には首長の根拠地としてのグスクが築かれ、これを後背にして集落が形成されるようになる。真志喜森川原第一遺跡や伊佐前原第一遺跡は、当該期の掘立柱建物跡などが確認されている集落址である。中でも、真志喜森川原第一遺跡には、察度ゆかりの奥間家が所在する。奥間家後背地の調査では、14世紀後半～15世紀前半頃の掘立柱建物跡が検出された（宜野湾市教育委員会編1994）。なお、宇地泊ハンタヌシチャ古墓群に所在する奥間ノロ墓は、当該奥間家の古墓である（宜野湾市教育委員会編1996）。

伊佐前原第一遺跡では、集落に近接して土壙墓が4基（うち2基は木棺を伴う）検出されている（沖縄県立埋蔵文化財センター編2001）。同様の事例は北谷町後兼久原遺跡でも確認されており（北谷町教育委員会編2003）、その様相から本土の屋敷墓との関係が考慮される（瀬戸2002など、前川

2003)。当該期の墓制は、このような土塚墓の他に岩陰を利用した、いわゆる「崖葬」がある(西銘2004)。

15世紀に入ると、佐敷按司尚巴志が中山・南山・北山を破って三山を統一する。そして、その治世中に首里城が創建され、海外交易も展開した。尚泰久の治世になると、多くの寺が建立されて仏教徒との関わりが色濃くなり、琉球臨済宗が最盛する。現在、県内最古の厨子銘は、那覇市立壺屋焼物博物館所蔵の輝緑岩製の石厨子で、「弘治五年(1492年)」の銘書が認められる(那覇市立壺屋焼物博物館2014)。このような15世紀末頃から用いられた家型の石厨子が、元々は臨濟寺を模ったものとの指摘もある(平敷1989)。なお、市内では小禄墓(本市嘉数比屋良川流域古墓群に所在)に収められた輝緑岩製の石厨子(小禄墓内石厨子;県指定有形文化財)が最も古く、「弘治七年 おろく大やくもい六月吉日」の浮き彫りが施される。

15世紀の終わりになると尚円が実権を握り、第二尚氏王統が成立する。そして、3代目の尚真の時に国力が増大して、古琉球期の最盛期となった。尚真是中央集権化を推し進めて、各地の有力按司を首里に住ませ、首里城および城下を整備するとともに、王国の版図を定めて地方の行政区画の整備も行った。また、真珠道などの幹線道路や真玉橋を建造するなど、大規模な土木工事も営まれ、王家の墳墓である玉陵の造営も行った。玉陵は最初の破風墓で、尚円の遺骨を改葬するために1501年に築造された。

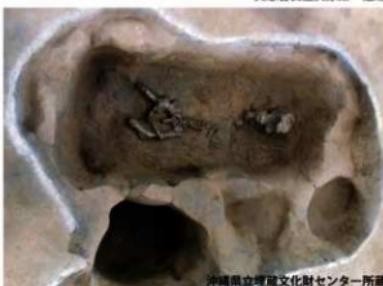
17世紀になると、島津氏の侵攻を境に王府の財政は逼迫する。琉球は奄美諸島を割譲され、中国貿易の利潤も握られることになる。これに加えて多額な米・砂糖・布などの貢租が課せられるようになった。そのため、田畠の面積を増やして生産量を促進させる必要があったことから、17世紀末~18世紀になると集落を海辺の砂地地帯に移動して、その跡地を耕地として利用するなどした。墓地も同様で、墓を耕地に適さない場所に移動して、その墓跡地を耕地として活用したという。この移動には、風水見と呼ばれる風水地理学師が関わり、地相の判定が行われ



大山マヤーガマ洞穴遺跡



真志喜安座真原第一遺跡



沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵

伊佐前原第一遺跡



小禄墓

図版 I - 1 沖縄の古墓



小禄墓内石厨子



護佐丸の墓



我如古本部御殿



大山上江家古墓

た。なお、この風水見が亀甲墓の普及に関与したことと指摘されている（平敷 1988）。

現在、造墓年代が明らかな亀甲墓で最も古いものは、中城村にある護佐丸の墓、あるいは那覇市にある伊江御殿墓が知られる。伊江御殿墓は、本市の県指定名勝である森の川や西森御嶽の石積み工事を行ったとされる尚氏伊江の門中墓で、康熙二十六年（1687）に造営された。なお、市内で最も古い亀甲墓は、現在のところ我如古にある本部御殿旧本墓である。本部御殿は、尚質王の六男である本部王子朝平（尚弘信）を始祖とする第二尚氏の分家である。当該墓は、『王代記』や安置されている石厨子に記された銘書から、朝平を葬った際に造営されたものと考えられる。なお、朝平を安置したと思われる石厨子の年代は康熙二十六年（1687年）である。本市から王族の墓が発見されたことはこれが初めてで、今後指定に向けて整備していく予定である。本市における古式の亀甲墓にはこの他に、大山東方丘陵古墓群の西側に所在する上江家古墓がある（宜野湾市教育委員会編 2011）。当該古墓は、墓室内に安置された石碑から康熙三十八年（1699年）に造営されたと考えられる。

このような亀甲墓は、近代以降になると農村にも普及する。明治期の琉球処分を境に、一般庶民も亀甲墓などの築造が許されるようになるため、本市にみられる亀甲墓は明治中期から大正期にかけて造営されたものが多い（宜野湾市史編集委員会編 1985）。なお、破風墓が民間で造られ始めるのは、大正末期からであるといふ。

近代になると、火葬場の建設に伴って徐々に風葬から火葬へと移行していく。戦後を迎てもしばらく洗骨の習慣が残る地域もあったが、現在では火葬が一般的となり、厨子は小型の骨壺に変わって、墓の規模も縮小し、平地式でコンクリート造りの家型墓が一般的となる。

※サキタリ洞遺跡で出土した押引文土器は、共伴した炭化物などから約9,000年前の放射性炭素測定年代の値が得られている（山崎 2015）。

図版 I - 2 沖縄の古墓

## 第Ⅱ章 事業概要

### 第1節 調査体制

本書は、平成 19 年度に行った嘉数比屋良川流域古墓群における堀込墓の測量成果、平成 22 年度に行つた野嵩上後原丘陵古墓群における真境名家古墓および喜友名後原丘陵古墓群における前知花家古墓、平成 23～24 年度に行つた真志喜ヶスクヌハナ丘陵古墓群の測量成果、平成 25 年度に行つた大謝名久永地原古墓群、平成 26 年度に行つた野嵩上後原丘陵古墓群の調査成果を収録している。なお、資料整理および報告書作成業務は、平成 22～24 年度および 27・28 年度にかけて行った。調査体制は以下の通りである。

事業主体	沖縄県宜野湾市教育委員会	
事業責任者	教育長	普天間朝光（平成 19 年度） 宮城 茂雄（平成 22～24 年度） 玉城 勝秀（平成 26～27 年度） 知念 春美（平成 28 年度）
事業総括	教育部 教育部長	新田 和夫（平成 19 年度） 宮平 良和（平成 22 年度） 宮里 幸子（平成 23・24 年度） 玉那覇 清（平成 25 年度） 宮城 光徳（平成 26 年度） 島袋 清松（平成 27、28 年度）
	教育次長	伊佐 友孝（平成 19 年度） 新城 正一、宮里 幸子（平成 22 年度） 宮城 光徳（平成 23 年度） 玉那覇 清（平成 24 年度） 伊佐 徳光（平成 25 年度） 島袋 清松（平成 26 年度） 伊佐 英明（平成 27、28 年度） 和田 敬悟（平成 19 年度）
	文化課長	吳屋 義勝（平成 22～25 年度） 與那原 類（平成 26～27 年度） 比嘉 洋（平成 28 年度） 豊里 友哉（平成 19・22～23 年度） 森田 直哉（平成 24～26 年度） 吉村 純（平成 27～28 年度） 仲村 健（平成 19 年度） 森田 直哉（平成 22～23 年度） 伊藤 圭（平成 27 年度） 長濱 健起、仲村 賢（平成 28 年度） 城間 肇、森田 直哉（平成 19 年度）
事業事務	文化課 文化財保護係長	
	文化財保護係主任主事	
	文化財保護係主事	

		伊藤 圭 (平成 22 ~ 26 年度)
		松元 典子 (平成 24 年度)
		山内 健作 (平成 24 ~ 25 年度)
		長濱 健起 (平成 25 ~ 27 年度)
		仲村 毅 (平成 26 ~ 27 年度)
		来間 千明 (平成 27・28 年度)
	文化財保護係嘱託職員	西銘 五月 (平成 26 年度)
調査業務	文化財保護係臨時職員	崎濱比力理 (平成 28 年度)
	文化財保護係長	西銘 五月 (平成 19 年度)
	文化財保護係主任主事	森田 直哉 (平成 24 ~ 26 年度)
	文化財保護係主事	森田 直哉 (平成 22 ~ 23 年度)
整理業務	文化財保護係嘱託職員	城間 肇、森田 直哉 (平成 19 年度)
	文化財保護係主任主事	伊藤 圭 (平成 22 年度)
	文化財整備係主任主事	長濱 健起 (平成 26 年度)
	文化財保護係主事	伊藤 圭 (平成 19 年度)
	文化財保護係嘱託職員	長濱 健起、山田 浩久 (平成 22 ~ 23 年度)
	文化財整備係主任主事	長濱 健起、仲村 毅 (平成 28 年度)
	文化財保護係主事	伊藤 圭 (平成 22 ~ 24・26 年度)
	文化財保護係臨時職員	長濱 健起、仲村 毅 (平成 27 年度)
		来間 千明 (平成 28 年度)
		長濱 健起、山田 浩久 (平成 22 ~ 24 年度)
		杉村千重美 (平成 22 ~ 24、27 ~ 28 年度)
		古謝 和美 (平成 22 ~ 24 年度)
		宮城 初枝 (平成 24・27 年度)
		比嘉 大樹、福田 詩織 (平成 24 年度)
		伊波 晴美 (平成 26 ~ 28 年度)
		翁長和佳子 (平成 27・28 年度)
	文化財保護係臨時職員	青山 直弘、安里 真栄、安里さやか、 新垣 良雄、池田 一美、伊佐 美樹、 伊佐 美幸、石川 正人、伊波 晴美、 浦添 淳一、大城 武政、奥間 陽子、 翁長しのぶ、翁長和佳子、我如古みどり、 岸本 静子、喜納 幸男、喜屋武長毅、 金城 鮎美、呉我フジ子、米須 恵、 佐喜眞千弥、佐久原千春、砂辺 恒志、 砂辺 光義、高橋繪梨香、武島 朋美、 武部 拓磨、田盛 謙代、知念 和伸、 桃原 隆信、當山 豊和、友利久美子、

西平 陽子、野甫かおり、比嘉 美香、  
前川 敦子、前田 和枝、松本 義光、  
宮城 明子、宮城 圭子、宮城 常正、  
宮國さおり、諸見里和子、安村 重保、  
山城 裕美、吉田 正志、与那嶺春樹  
(平成 22 ~ 24、27 ~ 28 年度)

#### 委託業務

平成 19 年度	比屋良川流域古墓群測量業務委託	㈱埋蔵文化財サポータシステム沖縄支店
平成 22 年度	野嵩古墓測量業務	㈱アーキジオ 沖縄
	真境名家厨子彌オルソ写真作成業務委託	㈱アーキジオ 沖縄
平成 23 年度	現況記録作業業務委託 (真志喜古墓)	㈱アーキジオ 沖縄
	市内遺跡出土遺物の実測・デジタルレース作業業務委託	㈱バスク 沖縄支店
平成 24 年度	真志喜グスクノハナ丘陵古墓群分布調査支援業務委託	㈱バスク 沖縄支店
平成 25 年度	大謝名土地造成に係る古墓測量業務委託	㈱バスク 沖縄支店
平成 26 年度	野嵩上原・下後原古墓群発掘調査支援業務委託	㈱文化財サービス 沖縄営業所
平成 28 年度	報告書作成に係る図面作成業務委託	㈱バスク 沖縄支店
	報告書作成に係る遺物の撮影業務委託	㈱バスク 沖縄支店
	報告書作成に係る 2D モデルデータ作成業務委託	(合) T.R.F

#### 第 2 節 調査協力

鈴木 悠 (那覇市歴史博物館)  
宮城 淳一 (沖縄県立埋蔵文化財センター)  
宮城 良真 (豊見城市教育委員会)  
山田 浩久 (西原町教育委員会)  
横尾 昌樹 (うるま市教育委員会)

宜野湾市文化財保護審議会委員  
赤嶺 政信 (琉球大学教授)  
新垣 義夫 (普天満宮宮司)  
池田 榮史 (琉球大学教授)  
大城 逸郎 (沖縄石の会会长)  
恩河 尚 (当時沖縄市役所総務部)  
崎浜 靖 (沖縄国際大学教授)  
高元 政秀 (元沖縄考古学会会長)  
比嘉 悅子 (宜野湾市文化財保護審議会会長)  
福島 駿介 (琉球大学名誉教授)  
宮城 邦治 (元沖縄国際大学教授)

### 第Ⅲ章 野嵩上後原古墓群の調査成果

第1節 はじめに

## 1. 位置と環境

野嵩上後原古墓群が所在する野嵩地域は、宜野湾市の北東側に位置し、北側に普天間、西側に新城、南側に上原の各区及び、東側に北中城村字安谷屋や中城村字登又と隣接する。現在の野嵩は、市役所や市民会館などの施設が立地する本市の行政上の中心地である。旧集落は、北側に位置する丘陵を背にして、野嵩原、西門原、上後原に形成される。当該古墓群は主に上後原に形成されるが、一部は西門原や安里畠原にも及ぶ。

第Ⅰ章でも述べたように、本市の地形は4つの海岸段丘が離壇状に展開する（第Ⅰ-2図）。野嵩地域は、主に段丘第3面に位置しており、当該古墓群は同面上の琉球石灰岩丘陵上に形成され、その標高は約80～100mを測る。



第III-1図 野嵩上後原古墓群の位置図



第III-2図 野嶌上後原古墓群の位置と周辺の文化財

野嵩地域の南西側には、市域の中央を占有する普天間飛行場の東縁から丘陵地が延びており、ここに野嵩上後原古墓群が立地する。現在では公園整備が進められ、土地造成工事などが行われている。この丘陵地の北縁辺部には崖面が形成されており、特に北東側の崖縁は「ヒージャーガーバンタ」と称される。また、ヒージャーガーバンタ南側の丘陵上面は、標高98mほどの平場を形成しており、「チチナガミモー（ジュウゴヤモー）」と称される。ここは、旧暦8月15日に行われる「ウチチウマチ（月祭り）」という祭事に月の出を待つ場所であった。ヒージャーガーバンタの崖縁は、県道35号線拡幅工事により掘削され、旧状を留めていないが、工事前の崖縁は県道側に岩が突出しており、標高は97mを測ったという（宜野湾市教育委員会編 1996、2012）。

丘陵地東側の崖面下には普天間川が流れる。ヒージャーガーバンタの崖縁下には琉球石灰岩と島尻層群の不整合面がみられ、「ヒージャーガー」と称される湧泉が形成される。ヒージャーガーは、普天間集落では「イヌカー」と称され、集落のムラガードであり、拝所にもなっていた（宜野湾市教育委員会編 1996）。なお、西門原には市指定史跡の野嵩クシヌカーがあり、その南側に位置するメヌカーと同様に石積みで整備されたウブガードで、集落の祭祀や生活用水として利用された（宜野湾市教育委員会編 2012）。



図版III - 1 野嵩区南方を横切る丘陵地（野嵩上後原古墓群 北西より）



第III - 3図 昭和 20 年航空写真と地形図

## 2. 野嵩区の歴史的環境と遺跡の概要

野嵩は、1671年の宜野湾間切新設の際に、中城間切から編入された村で、それ以前は「前ふてま」の村名で記されている。旧集落の中心は野嵩原に位置し、この東側に位置するチチナガミモ—南麓には、集落の中央を東西に走るナカミチが通る。この道の東側は比高約34mの急坂となり、ここに石畳が敷設され、現在でも生活道として地域の方に利用されている。この石畳道は、1458年の護佐丸・阿麻和利の乱に敗れた護佐丸の妻子が首里へと逃げる際の逸話の舞台にもなっており、その逸話から「スディバナビラ」と称される。石畳道は保存状態が良好だったこともあり、現在の県道29号線東側部分は1989年3月31日に「野嵩石畳道」として市指定の史跡となった。

ヒージャーガーバンタ西側の丘陵緩斜面地には、ウガンヌカタと呼ばれる旧集落の拝所が所在する。この周辺では、1993年から始まった街路建設に伴う発掘調査によって、縄文時代晚期相当期の竪穴住居と思われる遺構が2基確認されている（宜野湾市教育委員会編 1996）。

野嵩上後原古墓群は、ヒージャーガーバンタを形成する丘陵と、野嵩西表原古墓群が立地する丘陵に挟まれた標高約96mの3つの連なる丘陵上に形成される遺跡である。現在では、東側の丘陵から中央の丘陵にかけて家形墓を中心に新しい墓が建ち並ぶが、丘陵北側の斜面地には亀甲墓や掘込墓などが残る。また、宅地開発によって分断された西側の丘陵でも丘陵裾の斜面に多くの掘込墓が残っている。



図版III-2 スディバナビラ（野嵩石畳道）



図版III-3 野嵩上後原古墓群遠景〔南西より〕

### 3. 調査の経緯と経過

野嵩上後原古墓群は「周知の埋蔵文化財包蔵地」であり、主に近世期以降に造られた掘込墓が多く残る遺跡であるとともに野嵩地域の墓域でもあった。

平成 25 年度に用地課より野嵩第一公園整備の工事に伴い、計画地に所在する墓域が埋蔵文化財に該当するか照会があった。計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地となっていることに加え、後の現地確認により掘込墓が主体となる古墓群であったこと、中には厨子が墓室内に安置された状態の古墓も見られたことから、古墓が管理されていたころに近い状態で残存している可能性が考えられた。そのため、都市計画課と埋蔵文化財の取扱いについて協議を行ったところ、工事計画の変更が困難とのことにより、工事に先立ち都市計画課より予備調査実施の依頼を受け、教育委員会文化課が当該古墓群の調査を行うこととなった。今回の調査では、詳細分布調査及び古墓等の位置を把握するための周辺地形測量等による古墓等の状況確認等を目的とした。

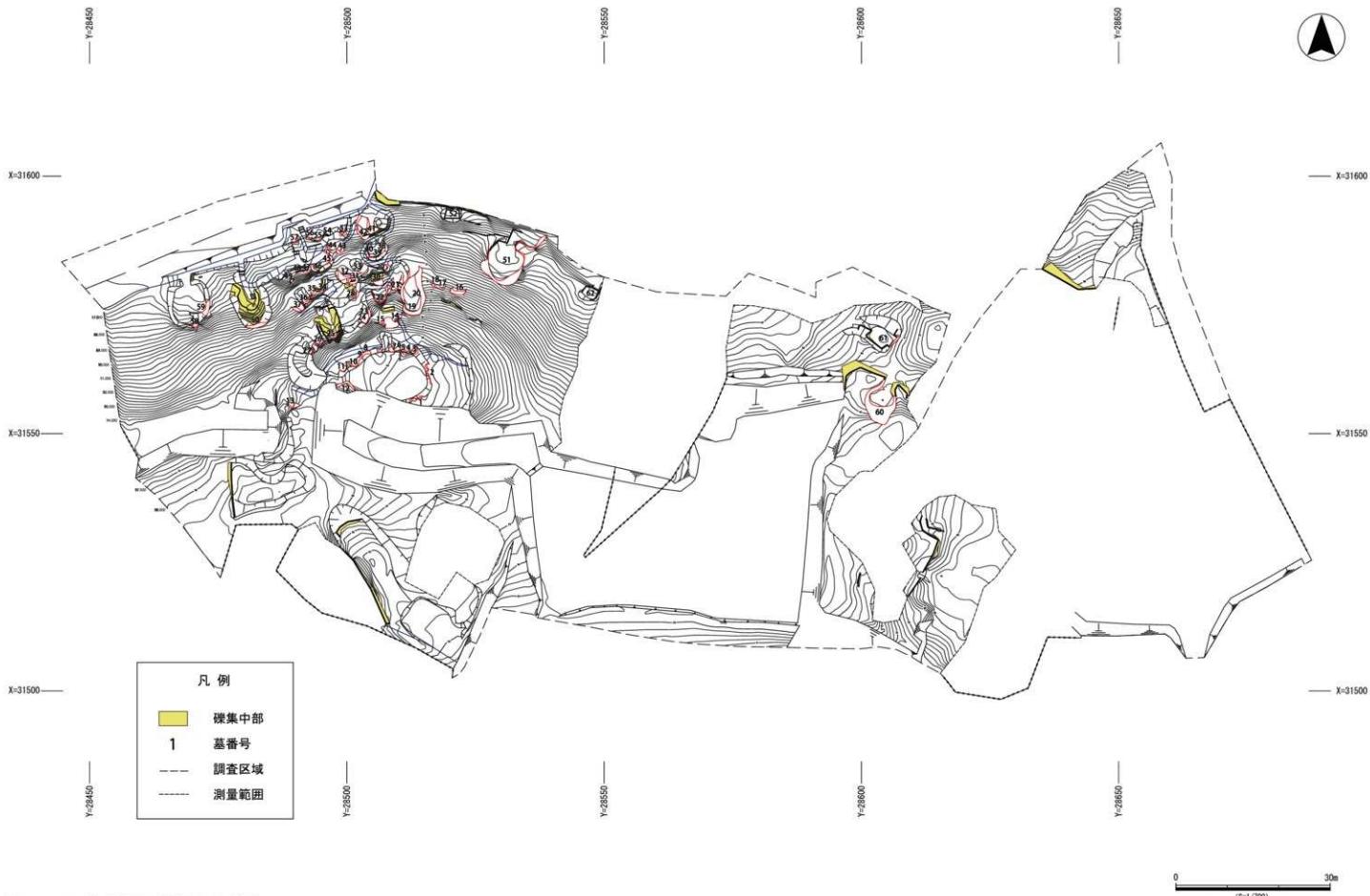
平成 26 年 7 月 1 日から伐開作業を開始し、測量及び古墓等の遺構清掃を進めた。しかし、台風の影響による倒木もあり、その処理や清掃を改めて行った。

7 月 14 日以降は伐開や清掃も進み、随時古墓の撮影等を行いつつ、並行して地形測量も進めた。しかし、再び台風の影響を受けながらも各種作業を随時進め、8 月 20 日には地形測量も含めて全工程が終了し、今回の予備調査が完了した。

調査の結果、工事計画地内に約 50 基の古墓が残存することから、調査後に再度埋蔵文化財の取扱いに係る協議を行うこととなった。



図版III-4 作業風景



第III-4図 地形測量図(白抜きは改変部)

## 第2節 遺構

### 1. 墓の型式

今回の調査において確認された古墓は全部で 62 基であった。そのうち、墓型式として掘込墓は 46 基（約 74.2%）、掘込墓の可能性がある古墓が 14 基（約 22.6%）、型式不明の古墓が 2 基（約 3.2%）であり、亀甲墓や破風墓などは確認されなかった。今回の調査では 74%以上の古墓が掘込墓であったことが認められたが、あくまでも最低個体数での基数であり、掘込墓の可能性がある古墓や不明墓も今後の詳細調査により、掘込墓の可否等が判明すれば上記割合は更新されることになるものと思われる。そのことを前提にしたとしても、当該地における掘込墓の割合は圧倒的であり、近世及び近代の名残が垣間見える地点である。ただし、調査中においては現代に設置及び廃棄されたと思われる複数基のコンクリート製脇墓なども見受けられたことから、当該地が近世・近代だけでなく戦後になっても墓地として管理されてきたことが窺える。また、今回は北向きの丘陵斜面地が調査の主体となったが、南側の緩やかな地形に造られた古墓などは亀甲墓や破風墓などに意匠される墓も少なからず存在する。このように、現在も管理されながら使われている墓もあることから、調査地との型式変遷に係る差異が見られた。

### 2. 墓の構造

古墓の墓口については、土砂などによって不明確な点もあるが、一部の古墓で石積みにより墓口を完全に塞ぐものと、上部に隙間を設けて完全には塞がないものなどが見受けられた。古墓自体が崩落しているものもあったが、墓口周辺に礫が多く散乱している場合は、墓口を塞いでいた石積みの可能性も考えられる。また、後世にコンクリート製の板石やブロックを利用したと思われる古墓も見られた。

墓庭については、比較的大きい古墓においては約 50cm の高さの盛土や石積みなどで庭を囲う遺構が見られたが、規模の小さい多くの古墓は、庭を囲まずに隣接する古墓まで比較的平坦な面に造成されていることが確認された。



石積みによる墓口閉塞状況



丘陵斜面に形成された掘込墓

図版III-5 古墓の構造状況

第III - 1表 古墓一覧-1

No.	方 向	立地	型式	外觀					備考	
				墓頭		墓口		寸法 (m)		
				平面形	造り・状況	寸法 (m)	造り・状況	寸法		
1	南	琉球石灰岩丘陵の最高所に位置する平坦部の段差部分を利用。	掘込墓?	不明確	明確な区画はなし。	幅	—	石積みなど蓋石と思われる構造物はない。	幅 0.8	墓?
						奥行	—	高さ 0.25		
2	南東	1号墓と同様に琉球石灰岩丘陵の最高所に位置する平坦部の段差部分を利用。	掘込墓?	不明確	明確な区画はなし。	幅	—	石積みなど蓋石と思われる構造物はない。	幅 0.9	墓?
						奥行	—	高さ 0.45		
3	北	1、2号墓と同様に琉球石灰岩丘陵の最高所に位置する平坦部の段差部分を利用。北側の斜面に墓室が展開する。	掘込墓	横長の方形	西側は土質で区画する。東側は斜面となる。墓底は3~7号墓で共有する。	幅	8.0	蓋石は見られない。周辺に石灰岩が散乱している。蓋石として利用されていたものか。土砂で埋まる。	幅 1.0	空き墓。
						奥行	3.9	高さ 0.45		
4	北	1、2号墓と同様に琉球石灰岩丘陵の最高所に位置する平坦部の段差部分を利用。北側の斜面に墓室が展開する。	掘込墓	横長の方形	3~7号墓で共有。	幅	—	蓋石は見られない。周辺に石灰岩が散乱している。蓋石として利用されていたものか。	幅 0.6	空き墓。
						奥行	—	高さ 0.3		
5	北	1、2号墓と同様に琉球石灰岩丘陵の最高所に位置する平坦部の段差部分を利用。北側の斜面に墓室が展開する。	掘込墓	横長の方形	3~7号墓で共有。	幅	—	蓋石は見られない。周辺に石灰岩が散乱している。蓋石として利用されていたものか。土砂で埋まる。	幅 0.7	空き墓。墓口の前に石が置かれる。
						奥行	—	高さ 0.25		
6	北	1、2号墓と同様に琉球石灰岩丘陵の最高所に位置する平坦部の段差部分を利用。北側の斜面に墓室が展開する。	掘込墓	横長の方形	3~7号墓で共有。	幅	—	一部、蓋石と思われる石灰岩あり。土砂で埋まる。	幅 1.1	空き墓。
						奥行	—	高さ 0.65		
7	北	1、2号墓と同様に琉球石灰岩丘陵の最高所に位置する平坦部の段差部分を利用。北側の斜面に墓室が展開する。	掘込墓	横長の方形	3~7号墓で共有。	幅	—	土壌によって半分以上が埋まる。	幅 0.45	空き墓。
						奥行	—	高さ 0.2		
8	西北	3~7号墓とは土壌を挟んで隣接する。	掘込墓	横長の方形	東側は土質で区画する。西側は斜面となる。墓底は8~11号墓で共有する。	幅	8.8	野面の石積みで墓口の最上部まで埋ぐ。一部、崩れる。	幅 0.95	崩子あり。
						奥行	2.7	高さ 0.65		
9	北西	3~7号墓とは土壌を挟んで隣接する。	掘込墓	横長の方形	8~11号墓で共有。	幅	—	布積みの石積みで墓口の最上部まで埋ぐ。一部、崩れる。	幅 1.25	崩子あり。
						奥行	—	高さ 0.5		
10	北西	3~7号墓とは土壌を挟んで隣接する。	掘込墓	横長の方形	8~11号墓で共有。	幅	—	蓋石は見られない。周辺に石灰岩が散乱している。蓋石として利用されていたものか。土砂で埋まる。	幅 1.3	空き墓。
						奥行	—	高さ 0.5		
11	北西	3~7号墓とは土壌を挟んで隣接する。	掘込墓	横長の方形	8~11号墓で共有。	幅	—	蓋石は見られない。周辺に石灰岩が散乱している。蓋石として利用されていたものか。土砂で埋まる。	幅 1.25	空き墓。
						奥行	—	高さ 0.6		
12	—	琉球石灰岩丘陵の最高所に位置する平坦部の段差部分を利用。切り通しによってほぼ破壊される。	不明	—	切り通しにより破壊。	幅	—	破壊され残存しない。	幅 —	ほぼ破壊される。
						奥行	—	高さ —		
13	北	1~12号墓とは谷状の地形をはさみ独立する。	掘込墓	不定形	明確な区画はなし。	幅	2.3	一部、蓋石と思われる野面積みが残る。土砂で埋まる。	幅 0.75	崩子あり。内部で墓室は二つに分かれる。
						奥行	2.5	高さ 0.4		
14	北	石灰岩丘陵の斜面中に形成されたテラス状の部分。	掘込墓	横長の方形	東、西、北側は斜面となる。墓底は15号墓と共有する。	幅	4.9	野面の石積みで墓口のはば最上部まで埋ぐ。土砂により埋まる。	幅 0.65	空き墓。
						奥行	2.5	高さ 0.65		
15	北	石灰岩丘陵の斜面中に形成されたテラス状の部分。	掘込墓	横長の方形	14号墓と共有する。	幅	—	野面の石積みで墓口のはば最上部まで埋ぐ。	幅 0.9	崩子あり。
						奥行	—	高さ 0.3		
16	北	石灰岩丘陵の斜面中の中腹。	掘込墓?	なし	なし。	幅	—	ほぼ埋まる。	幅 0.8	空き墓。
						奥行	—	高さ 不明		

第三 - 2 表 古墓一覧-2

No.	方向	立地	型式	外観				備考	
				墓庭		墓口			
				平面形	造り・状況	寸法 (m)	造り・状況	寸法	
17	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。	掘込墓?	なし	なし。	幅 奥行	— —	幅 高さ	空き墓。
						幅 奥行	— —	0.9 0.2	
18	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。	掘込墓?	なし	なし。	幅 奥行	— —	幅 高さ	空き墓。
						幅 奥行	— —	0.8 0.2	
19	北	硫球石灰岩の斜面を割り、掘り込んで墓を形成する。	掘込墓	縱長の方形	東西面は掘り込まれた石灰岩の壁。北側は斜面となる。	幅 奥行	3.4 10.4	幅 高さ	野面の石積みで半分ほど塞ぐ。周囲には石灰岩が散乱しているためもと上部まで塞いだいた可能性がある。土砂により埋まる。 仔あり。
						幅 奥行	— —	1.1 1.0	
20	西	19号墓の東側の袖に造られた袖墓。	掘込墓	縱長の方形	19号墓と共有する。	幅 奥行	— —	幅 高さ	野面の石積みで塞ぐ。上部は崩れている。 仔あり。
						幅 奥行	— —	1.6 0.55	
21	北	硫球石灰岩の斜面を割り、掘り込んで墓を形成する。	掘込墓	縱長の方形	東西面は石灰岩を掘り込み土壌状の壁とする。北側は斜面となる。	幅 奥行	1.5 4.2	幅 高さ	野面の石積みで塞ぐ。墓口周辺は崩落する。 空き墓。
						幅 奥行	— —	1.4 0.6	
22	北	硫球石灰岩の斜面を割り、掘り込んで墓を形成する。	掘込墓	方形	東西面は石灰岩を掘り込み土壌状の壁とする。北側は斜面となる。	幅 奥行	2.7 2.1	幅 高さ	野面の石積み。一部崩れる。 仔あり。
						幅 奥行	— —	2.4 0.5	
23	西	24号墓の袖墓か。	掘込墓	不明確	24号墓と共有。	幅 奥行	— —	幅 高さ	野面の石積みで塞ぐ。 袖墓か。
						幅 奥行	— —	0.85 0.5	
24	—	石灰岩の斜面を掘り込んで成形したと思われる。崩落のため全形は不明。	掘込墓?	不明確	境界は不明確。	幅 奥行	— —	幅 高さ	崩落により原形を留めない。
						幅 奥行	— —	— —	
25	北	石灰岩丘陵の屋下。斜面の小規模な平場を利用して造られたと思われる。	掘込墓	縱長の方形	東西面は石積みにより石灰岩で塞がれていたと思われるが崩れ。北側には門跡が残る。	幅 奥行	3.6 5.6	幅 高さ	崩落により原形を留めない。
						幅 奥行	— —	— —	
26	北	石灰岩丘陵の屋下。斜面の小規模な平場を利用して造られたと思われる。	掘込墓	縱長の方形	東側は25号墓と接する。西側は不明瞭。北側は斜面となる。	幅 奥行	1.8 4.2	幅 高さ	墓口周辺は崩落する。墓の内部には石灰岩が散乱する。蓋石の石積みと考えられる。 空き墓。内部には石灰岩と削られた仔子焼片が散乱する。
						幅 奥行	— —	1.3 0.5	
27	北 西	石灰岩丘陵の屋下。斜面の小規模な平場を利用して造られたと思われる。	掘込墓	不定形	崖地状の地形となる。	幅 奥行	2.9 1.9	幅 高さ	墓口の周辺は切り石で固め石はないが、墓の内部に蓋石として使用されたと思われる石が見られる。 空き墓。内部には石灰岩と削られた仔子焼片が散乱する。
						幅 奥行	— —	0.55 0.45	
28	西	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用すること。	掘込墓	縱長の方形	南北は斜面。西側は直となる。	幅 奥行	2.4 3.5	幅 高さ	下部はコクリートブロックで積む。 空き墓。
						幅 奥行	— —	1.3 0.5	
29	北 西	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用すること。	掘込墓?	不明確	境界は不明確。	幅 奥行	— —	幅 高さ	空き墓。空の仔子焼が2基置かれる。
						幅 奥行	— —	0.8 0.3	
30	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用すること。	掘込墓?	不明確	境界は不明確。	幅 奥行	— —	幅 高さ	詳細は不明。
						幅 奥行	— —	— —	
31	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用すること。	掘込墓?	不明確	境界は不明確。	幅 奥行	— —	幅 高さ	詳細は不明。
						幅 奥行	— —	— —	
32	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用すること。	掘込墓	不明確	境界は不明確。	幅 奥行	— —	幅 高さ	詳細は不明。
						幅 奥行	— —	— —	

第三 - 3表 古墓一覧- 3

No.	方 向	立地	型式	外観				備考	
				墓庭		墓口			
				平面形	造り・状況	寸法 (m)	造り・状況	寸法	
33	北 西	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓?	不定形	境界は不明瞭。	幅 2.0	崩落により不明。	幅 —	崩落により原形を留めない。
						奥行 2.0		高さ —	
34	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓?	横長の方形	東西面は土壁により区画する。北側は斜面となる。35号墓と共有。	幅 3.0	崩落により不明。	幅 —	崩落により原形を留めない。
						奥行 1.9		高さ —	
35	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓	横長の方形	34号墓と共有。	幅 —	石積みはほとんど崩れる。一部に野面の石積みらしき部分が残る。	幅 1.0	空き墓。
						奥行 —		高さ 0.7	
36	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓	横長の方形	周囲より一段下がった様み状の地形。	幅 1.6	墓口周辺は崩落する。	幅 1.6	空き墓。
						奥行 2.8		高さ 0.6	
37	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓	不明確	境界は不明瞭。	幅 1.7	崩落により不明。	幅 —	空き墓。
						奥行 3.3		高さ —	
38	北 北 西	球根石灰岩の斜面を削り、掘り込んで墓を形成する。	掘込墓	方形	39号墓と共有。	幅 —	野面の石積み、最高部は盤面、空隙が崩落によるものか。土砂により埋まる。	幅 1.3	附子あり。
						奥行 —		高さ 0.3	
39	北	球根石灰岩の斜面を削り、掘り込んで墓を形成する。	掘込墓	方形	東西面には38、40号墓がある。北側には小規模な土壌で入口を形成。	幅 2.7	野面の石積み。最高部は盤面、空隙が崩落によるものか。土砂により埋まる。	幅 1.4	附子あり。
						奥行 2.4		高さ 0.3	
40	北 北 東	球根石灰岩の斜面を削り、掘り込んで墓を形成する。	掘込墓	方形	39号墓と共有。	幅 —	野面の石積みと思われる。土砂により埋まる。	幅 1.6	附子あり。
						奥行 —		高さ 0.3	
41	北 北 西	石灰岩丘陵の最下部。小規模な段差を用いて墓を造る。	掘込墓	不定形	明確な区画はない。42号墓と共有。	幅 6.1	一部、石積みらしきものが見られる。土砂により埋まる。	幅 1.3	空き墓。
						奥行 3.8		高さ 0.2	
42	北 北 西	石灰岩丘陵の最下部。小規模な段差を用いて墓を造る。	掘込墓	不定形	41号墓と共有。	幅 —	一部、野面の石積みらしきものが見られる。土砂により埋まる。	幅 1.2	空き墓。
						奥行 —		高さ 0.3	
43	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓	不定形	東側は土壁で区画する。西側は明確な区画はない。北側は斜面となる。44号墓と共有する。	幅 3.3	土砂により埋まる。	幅 0.5	詳細は不明。
						奥行 2.0		高さ 0.1	
44	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓	不定形	43号墓と共有。	幅 —	野面の石積みと思われる。土砂により埋まる。	幅 0.7	詳細は不明。
						奥行 —		高さ 0.2	
45	北 西	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓	横長の方形	東西を土壁で区画する。北側は斜面となる。45~49号墓で共有。	幅 12.0	一部、野面の石積みらしきものが見られる。土砂により埋まる。	幅 0.9	空き墓。
						奥行 4.3		高さ 0.3	
46	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓?	横長の方形	45~49号墓で共有。	幅 —	崩落により不明。	幅 —	詳細は不明。
						奥行 —		高さ —	
47	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓	横長の方形	45~50号墓で共有。	幅 —	一部、野面の石積みらしきものが見られる。上部は崩落により倒れ、下部は土砂により埋まる。	幅 1.1	附子あり。
						奥行 —		高さ 不明	
48	北 東	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓	横長の方形	45~51号墓で共有。	幅 —	野面の石積みで閉じる。	幅 0.8	附子あり。
						奥行 —		高さ 0.4	

第三 - 4 表 古墓一覧-4

No.	方向	立地	型式	外観				備考	
				墓庭		墓口			
				平面形	造り・状況	寸法 (m)	造り・状況	寸法	
49	北	石灰岩丘陵の斜面の中腹。小規模な段差を利用する。	掘込墓?	横長の方形	45～52号墓で共有。 崩落により不明。	幅 奥行	— —	幅 高さ	詳細は不明。
						—	—	—	
50	北	琉球石灰岩の斜面を削り、掘り込んで墓を形成する。	掘込墓?	不明確	方形と思われる。全体が崩落により形状は不明瞭。	幅 奥行	5.2 5.6	幅 高さ	詳細は不明。
						—	—	—	
51	北 東	琉球石灰岩の斜面を削り、掘り込んで墓を形成する。	掘込墓	方形	墓口側は石灰岩を削りそとする。門門は石積みを造り区画する。	幅 奥行	7.0 7.6	幅 高さ	空き墓。
						—	—	—	
52	北	石灰岩丘陵の最下部。斜面を削り周囲を石積みで護る。	掘込墓	横長の方形	3方向を石積みで囲う。	幅 奥行	3.5 2.1	幅 高さ	詳細は不明。
						—	—	—	
53	北	石灰岩丘陵の最下部。小規模な段差を利用する。	掘込墓	不明確	明確な区画はなし。	幅 奥行	1.7 2.6	幅 高さ	詳細は不明。
						—	—	—	
54	北	石灰岩丘陵の最下部。小規模な段差を利用する。	掘込墓	不明確	明確な区画はなし。	幅 奥行	2.7 2.1	幅 高さ	詳細は不明。
						—	—	—	
55	北	石灰岩丘陵の最下部。小規模な段差を利用する。	掘込墓	不明確	明確な区画はなし。56号墓と共有。	幅 奥行	3.4 1.7	幅 高さ	空き墓。
						—	—	—	
56	北 東	石灰岩丘陵の最下部。小規模な段差を利用する。	掘込墓	不明確	55号墓と共有。	幅 奥行	— —	幅 高さ	空き墓。
						—	—	—	
57	北	石灰岩丘陵の最下部。小規模な段差を利用する。	掘込墓	不明確	明確に墓庭と判断できる部分は無し。墓の前面にコンクリートの破片が散在する。	幅 奥行	— —	幅 高さ	空き墓。
						—	—	—	
58	北	石灰岩丘陵の最下部。丘陵の斜面を掘り込み墓を造る。	掘込墓	方形	掘り込んだ土壁と土壇に上って区画される。59号墓と共有。	幅 奥行	8.0 8.6	幅 高さ	附子あり。
						—	—	—	
59	西	石灰岩丘陵の最下部。丘陵の斜面を掘り込み墓を造る。	掘込墓	方形	58号墓と共有。	幅 奥行	— —	幅 高さ	空き墓。
						—	—	—	
60	北 東	琉球石灰岩の緩やかな斜面を削り、掘り込んで墓を形成する。	掘込墓?	方形?	周囲は石積みに上り区画される。内部は崩落により詳細不明。	幅 奥行	5.4 不明	幅 高さ	空き墓。
						—	—	—	
61	北 西	琉球石灰岩の緩やかな斜面を削り、掘り込んで墓を形成する。	掘込墓	方形	南側は岩盤を削った石壁。北側は土壇に上り区画される。西側(門側)は一部石積みが見られる。	幅 奥行	4.2 4.2	幅 高さ	空き墓。
						—	—	—	
62	—	削平によってほぼ崩壊する。門部分が残る。	不明	—	削平により破壊される。	幅 奥行	— —	幅 高さ	空き墓。
						—	—	—	



図版III-6 古墓確認状況

### 第3節まとめ

今回は、野嵩上原古墓群において計画された公園造成工事に伴う文化財調査を実施した。調査に際しては、詳細分布調査及び古墓などの遺構の位置を把握するための地形測量を行った。なお、工事については約2,000m<sup>2</sup>の範囲で計画されていたが、計画地のほかに今後の開発計画に備えて、事前協議の際の資料として全体的な情報を有することを目的として、北側丘陵斜面を中心に地形測量を実施した。

地形測量の範囲は約16,300m<sup>2</sup>であり、その半分程度の範囲が公園整備等による改変を受けており、中には墓の移転及び撤去までをすでに済ませている地点も見られた。なお、個別の墓における移転・撤去に際しては、過年度において事前に緊急発掘調査を随時実施し、記録保存を行っている（宜野湾市教育委員会編2011）。

今回の調査に伴う地形測量を行ったところ、測量範囲における東側にはほとんど古墓が見られず、西側に古墓が集中している状況が確認され、その中でも一部の範囲に約50基もの古墓が形成されていることが把握された。この古墓が集中する地形は、周囲に比べて緩やかな状況が見られ、古墓の造りやすさ、あるいは管理のしやすさなどを念頭に形成した可能性が考えられる。しかし、古墓集中部の地形が緩やかであることについては、造墓の際に墓周辺の地形も一部で往来しやすいように改変したことと考えられる。また、古墓の集中部から若干外れる古墓のいくつかは、集中部に造られた古墓に比して規模が大きく、平面形が丸みを帯びた掘込墓（50、51、58、60号墓等）が目立つ。そして、それらの大きい規模の古墓は丘陵下段部において立地していることが分かる。一方で、丘陵中位段には、中規模程度で平面形が概ね方形状を呈する古墓（19、25、26号墓等）が造られる。中規模の古墓の上位段及び下位段には小規模の古墓が点在する。規模の大きい古墓や中規模の古墓は墓庭などが見られるが、小規模の古墓は個別に墓庭の開いを有さず、複数基の古墓が隣接するように連なる（8～11、47～49号墓等）ものと、弧状に墓を造って連ならせ、袋状に墓庭を開うようにする（38～40号墓等）ものがあり、限られたスペースを有効に活用する状況が窺えた。また、複数の墓が隣接することから、墓口前面の空間は墓庭の性格を持つとともに隣接する墓に至る墓道でもあったため、それぞれの墓が庭開いを有しなかった所以であることが考えられる。これを前提に考えた場合、墓庭を有する規模の大きい古墓や中規模の古墓などは比較的早い時期に墓を造ることで、スペース的な制約をあまり気にしなかったことが想定されるが、当該地における本調査により墓室内等の確認がなされることで、少しでも古墓群の詳しい状況が把握されるものと思われる。

なお、今回は分布調査ということで表土等の掘削を行っておらず、場合によっては未だに埋没している古墓がある可能性も考えられるため、現時点において確認できた古墓の数量については、最低基數ということにしておきたい。



図版III-7 庭開いを持たない古墓が連なる

## 第IV章 野嵩真境名家古墓（野嵩上後原古墓群）の調査成果

### 第1節 はじめに

#### 1. 位置と環境

野嵩真境名家古墓が所在する字野嵩は、宜野湾市の北東端に位置する集落で、国道330号と県道29号線・35号線に囲まれ、東側には沖縄自動車道の北中城インターチェンジがある。野嵩は一区から三区まで行政区があり、野嵩一区内には、閑静な住宅街と市役所・教育委員会・消防本部、水道局などの行政機能が集中している。当集落は、1671年宜野湾間切が創設されたときに中城間切から編入された集落で、集落東側に市指定文化財である野嵩石疊道が現在も残っており、琉球王朝時代から現在に至るまで、交通の要所となっている地域である。

当古墓は、集落北東側、標高96m程の丘陵上に形成される野嵩上後原古墓群内に所在する古墓の1つである。丘陵裾一帯には、亀甲墓や掘込墓などが多く残っている。

#### 2. 遺跡の概要

遺跡名：野嵩上後原古墓群（旧称：野嵩上後原・下後原古墓群）

所在地：宜野湾市野嵩3丁目1467-4番地

調査対象：古墓1基（野嵩真境名家古墓）

調査経緯：野嵩第一公園整備事業に伴う事前調査

調査期間：2010（平成22）年8月20日～24日

記録方法：写真撮影、実測図作成

調査業務：宜野湾市教育委員会文化課

調査協力：嶋袋正弘氏・他関係者、株式会社アーキジオ沖縄（古墓の実測図作成に関する協力等）

調査面積：約150m<sup>2</sup>

墓形式：亀甲墓（カーミナクーバカ）

墓口方向：北東

藏骨器：12基（サンゴ製石厨子2基、上焼本御殿型厨子1基、ボージャー厨子5基、マンガン掛け焼締め厨子4基）

副葬品：なし

使用年代\*：少なくとも約150年前の19世紀中頃（1851～1861年）には使用されていた

\*上記の年代は、当該古墓内に安置されていた藏骨器に記載されている銘書から推測した年代



第IV-1図 野嵩真境名家古墓の位置図

(3=1/5000)

— 21 —

### 3. 調査経過

真境名家古墓（以下、「古墓」）の調査は、平成22年8月20日から同年8月24日までの間で、22日を除く4日間作業を行った。以下、時系列で概要を記す。

8月20日、古墓周辺の雑木等の伐採。現況状況の撮影を実施。

8月21日、引き続き、古墓周辺の雑木を伐採。墓室内の状況撮影（墓室内正面、左右壁面、墓室入口、シリヒラシ）を実施。

8月23日、古墓周辺の雑木伐採及び清掃。古墓の平面図、縦横断図の測量、正面のオルソ撮影を実施した。

8月24日、古墓周辺の清掃。古墓概観平面図、墓室内平面図を作成し調査を終了した。



図版IV-1 作業状況



図版IV-2 野嵩真境名家古墓全景〔南西より〕

## 第2節 墓の構造

### 1. 外観について

野嵩真境名家古墓は、隅石（シミイシ）、門冠り（ジョウカブイ）、鏡石（カガミイシ）、袖石（ソデイシ）が布積みで、庭園い（ナーガクイ）は野面積みでそれぞれ築かれてる。

屋根（ボージ）〔図版IV-2〕のまわりには、眉（マユ）、白（ウーシ）、袖回り（ヤジョマーメ）が配されていて、上面觀が亀甲形に見える。このことから、野嵩真境名家古墓のタイプは、亀甲墓（カーミナクバカ）に属すると言える。

屋根（ボージ）には15～20cm大の石灰岩礫が敷き詰められており、これらの石灰岩礫の一部に、モルタルが付着していたことや、モルタル片が散乱していた状況から、当古墓が使用されなくなる直前の外觀は、屋根（ボージ）の表面が全体的にモルタルによって覆われていたと想定される。図版IV-3は、屋根（ボージ）中央部の拡大写真であり、モルタルが付着している石灰岩礫や、モルタル片が散乱している状況が確認できる。

白（ウーシ）と眉（マユ）〔図版IV-5・図版IV-6〕の間には隙間が空いていたことから、水はけ口（ミジハイ）を設けていたと考えられる。また、この古墓の白（ウーシ）は、カマボコ形状を呈していた。



図版IV-3 屋根（ボージ）



図版IV-4 屋根（ボージ）拡大



図版IV-5 墓から右側の白（ウーシ）〔南西より〕



図版IV-6 墓から左側の白（ウーシ）〔南西より〕

## 2. 墓庭（ハカナー）について

墓庭（ハカナー）の上面觀は長方形状で、大きさは奥行約6m×幅約5mを測る。主に琉球石灰岩盤を削平、利用している。その墓庭を囲っている庭廻い（ナーガクイ）〔図版IV-7〕の左袖は石灰岩を段状に削平しているが、右袖は石積みで形成している。地形的に左袖側は石灰岩が大きく露出しており、右袖側へ傾斜する地形のため、左袖側を石積みで追加補強したと推測される。また、右袖側には、納骨状態の蔵骨器が安置された空洞が確認され、墓の門（ハカヌジョー）〔図版IV-8〕は、墓庭（ハカナー）の入口に設けられている。

墓の門（ハカヌジョー）には、1列の石灰岩礫を敷いており、両側には15～20cmほどの石灰岩礫が野面積みされている。御香炉石（ウコールイシ）〔図版IV-9〕は石灰岩製であり、高さ35cm×幅59cm×奥行20cm。調査時には墓口の左側に置かれていた。

線香を置くところは煤けており、中央には7cm×4cmの窪みが設けられている。三味台（サンミデー）〔図版IV-10〕（お供え物を置く場所）は石灰岩を使用し、上面を平坦に加工された様々な形状の石を組み合わせて全体的に配置している。墓庭より一段高くなるように構成され、墓口はさらに低い段を持つ。三味台（サンミデー）の規模は、高さ15～20cm、奥行90cm、幅230cmを測る。



図版IV-7 庭廻い（ナーガクイ）右側の空洞



図版IV-8 墓の門（ハカヌジョー）



図版IV-9 御香炉石（ウコールイシ）



図版IV-10 三味台（サンミデー）

### 3. 墓室について

墓室は基本的に石灰岩岩盤を掘削加工し形成されている。墓口には、門石（ジョウイシ）〔図版IV-11〕が用いられ、ニーピ（細粒砂岩）製の板状の一枚岩を使用している。通路（羨道）の中ほどには、この門石（ジョウイシ）を固定するために上下に段状の加工が設けられていた。

墓室内平面形は略方形状を呈し、天井部は蒲鉾状に成形されている。墓室内の壁や天井には掘削時のノミの痕跡を確認することが出来た。図版IV-13はシリヒラシと呼ばれている空間で、幅約180cm、奥行き90cmの長方形状を呈している。この場所は、遺体を一時的に安置し、白骨化させる場所である。一定期間安置された遺体は洗骨を行い、きれいに白骨化した遺骨は、藏骨器の中に足先の骨から順に納めていく。墓室内には扇子甕を安置するタナがあり、このタナ〔図版IV-14〕は1段目が「コ」の字状に作られており、正面にはさらに4段のタナが設けられていた。タナの縁石には石灰岩が用いられ、裏込めに石灰岩砂礫を入れて固めている。



図版IV-11 門石（ジョウイシ）



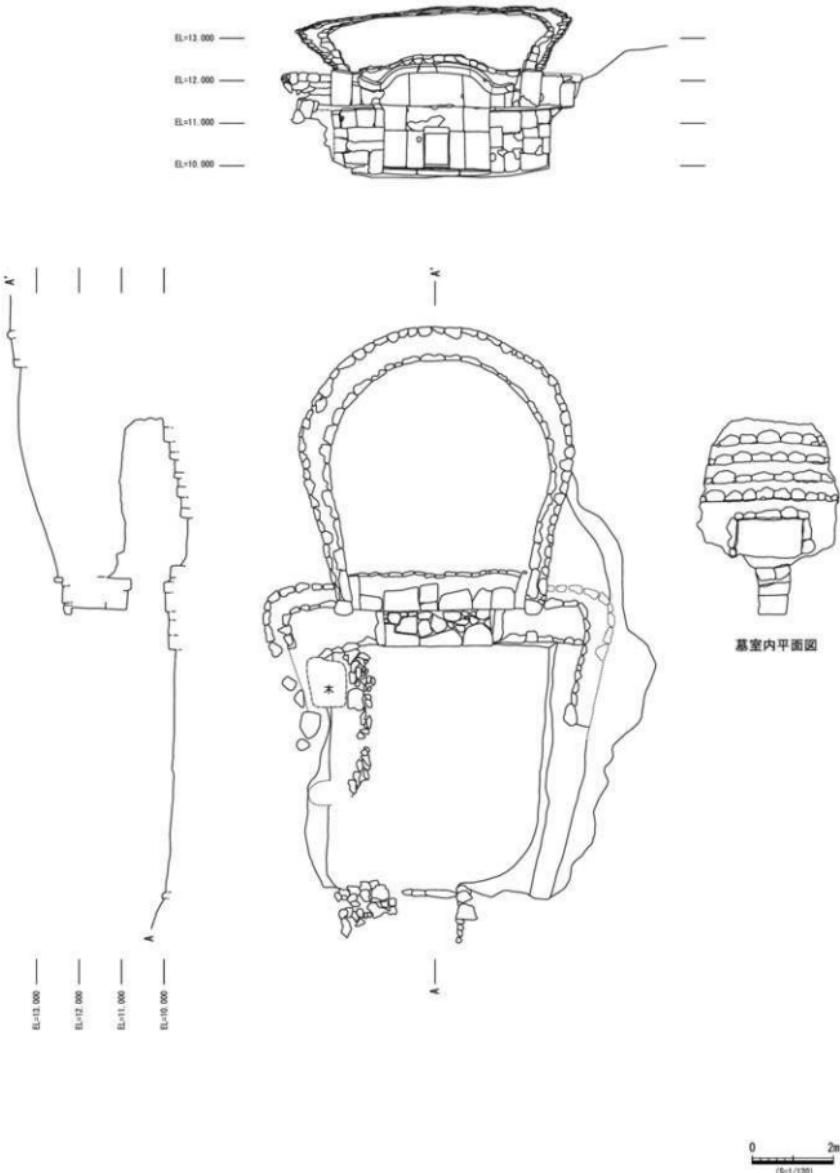
図版IV-12 通路の上



図版IV-13 シリヒラシ



図版IV-14 タナ



第IV - 2図 平面図・正面図・墓室内平面図・断面図

### 第3節 遺物

#### 1. 蔵骨器の配置

今回の調査で確認された蔵骨器は12基あり、そのうちの11基は墓室内に安置され、もう1基は墓庭で確認された。

蔵骨器の種類としては、サンゴ石製石厨子（2基）、上焼本御殿型厨子（1基）、ボージャー厨子（5基）、マンガン掛け焼締め厨子（4基）など4種類が見られた。

各蔵骨器の配置については、正面のタナ最上段に家型厨子3基が置かれ、墓庭に向かって左側タナ各段にボージャー厨子、右側タナ（1段・2段・4段）にマンガン掛け焼締め厨子が安置されていた。今回は便宜的に各厨子に番号を付けて整理している。



図版IV-15 蔵骨器配置状況

#### 墓室内

蔵骨器 No. ①：上焼本御殿型厨子

蔵骨器 No. ②：サンゴ石製石厨子

蔵骨器 No. ③：サンゴ石製石厨子

蔵骨器 No. ④：ボージャー厨子

※蓋はマンガン掛け焼締め厨子

蔵骨器 No. ⑤：ボージャー厨子

蔵骨器 No. ⑥：ボージャー厨子

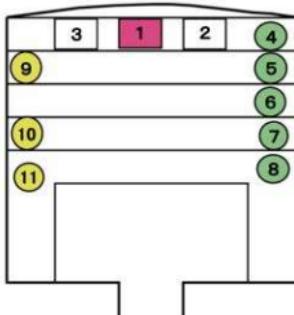
蔵骨器 No. ⑦：ボージャー厨子

蔵骨器 No. ⑧：ボージャー厨子

蔵骨器 No. ⑨：マンガン掛け焼締め厨子

蔵骨器 No. ⑩：マンガン掛け焼締め厨子

蔵骨器 No. ⑪：マンガン掛け焼締め厨子



第IV-3図 墓室内厨子配置略図

#### 墓室外

蔵骨器 No. ⑫：マンガン掛け焼締め厨子

## 2. 藏骨器の観察

確認できた4種類の藏骨器について、それぞれの特徴を以下に記述する。

**上焼本御殿型厨子**：墓室内正面タナの最上段中央に安置されている藏骨器。この藏骨器は“家型厨子”とも呼ばれているもので、1800年代前半～1900年代半ばごろに多く造られている。(藏骨器No.①)

**サンゴ石製石厨子**：この藏骨器は“石厨子”と呼ばれているもので、サンゴ石灰岩などを削って造られた藏骨器。この藏骨器も最上段のタナに安置されており、藏骨器No.①の両脇に置かれていたことから、藏骨器No.①に納められた方よりも後に亡くなった方の可能性がある。(藏骨器No.②・③)

**ボージャー厨子**：墓室から墓庭に向かって左側のタナにある藏骨器。飾り付けが少なく、「禿坊主」を思わせることから“ボージャー”と呼ばれるようになったと考えられている。この藏骨器は1600年代後半から長い期間にわたって造られ続けたもので、中には窯印（かまじるし）\*という刻印が見られる。(藏骨器No.④～⑧)

\*窯印：厨子を造った職人のサイン的な意味合いがある刻印。



藏骨器No.⑧



藏骨器No.⑦

図版IV - 16 ボージャー厨子：窯印



藏骨器No.④



図版IV - 17 ボージャー厨子：蓋・銘書

**マンガン掛け焼締め厨子**：墓庭に向かって右側にあるタナに安置されていた藏骨器。ほぼ全体にマンガン軸を掛けたもので、ボージャー厨子に比べると飾り付けが多いのが特徴。この藏骨器は1700年代後半ごろから造られ始めたもので、戦後にも作られていたとのこと。(藏骨器No.⑨～⑫)

それぞれの蔵骨器を見てみると、若干の違いが窺えた。まず、ボージャー厨子やマンガン掛け焼締め厨子などの身の正面に“窓（方言で屋門（ヤジョー）とも呼ばれる）”と呼ばれる文様にいくつかの違いが見られた。以下にそれぞれの特徴を報告する。

#### 屋門（ヤジョー）

屋門とは、蔵骨器の身の正面に見られる文様のことと、一般に“窓”と呼ばれる3つの孔とその周りの飾り付けのことを言う。マンガン掛け焼締め厨子（⑨・⑩）は、屋門が縦長になるのが一般的だが、それに対して、ボージャー厨子（⑤・⑥）は若干幅広になる。また、2種類の蔵骨器に言えるが、



蔵骨器No.⑨



蔵骨器No.⑩

図版IV - 18 屋門（蔵骨器No.⑨・⑩）

〔図版IV - 19〕（写真左側）の屋門は屋根の形をモチーフにしている。しかし、〔図版IV - 19〕（写真右側）では形が簡略化されて、屋根のイメージは無くなっている。そのことから、蔵骨器No.⑤（左の写真）は蔵骨器No.⑥（右側の写真）に比べて古い時期のものである可能性が考えられる。

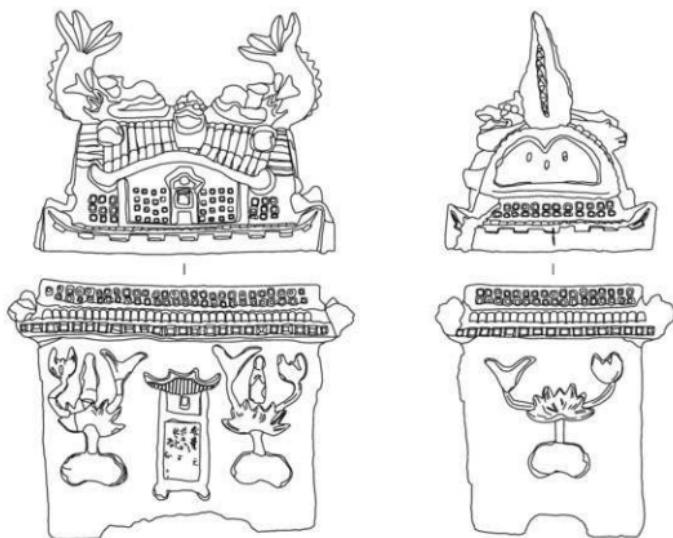


蔵骨器No.⑤

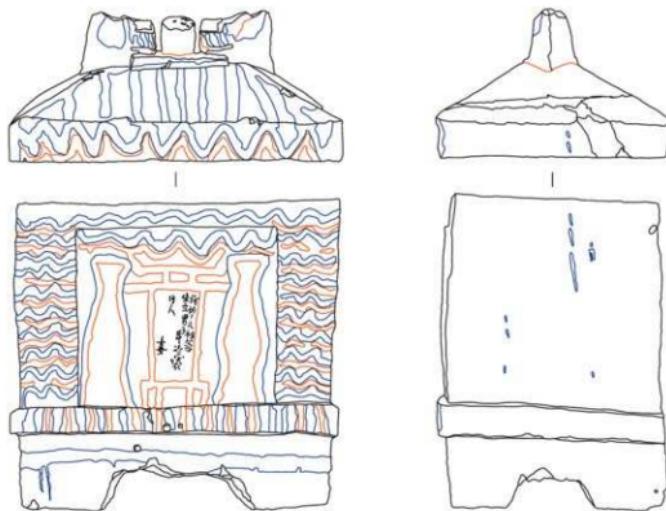


蔵骨器No.⑥

図版IV - 19 屋門（蔵骨器No.⑤・⑥）



藏骨器No.①



藏骨器No.②

0  
(3-1/8) 20cm

第IV - 4図 上焼本御殿型厨子 (No.①)・サンゴ石製石厨子 (No.②)

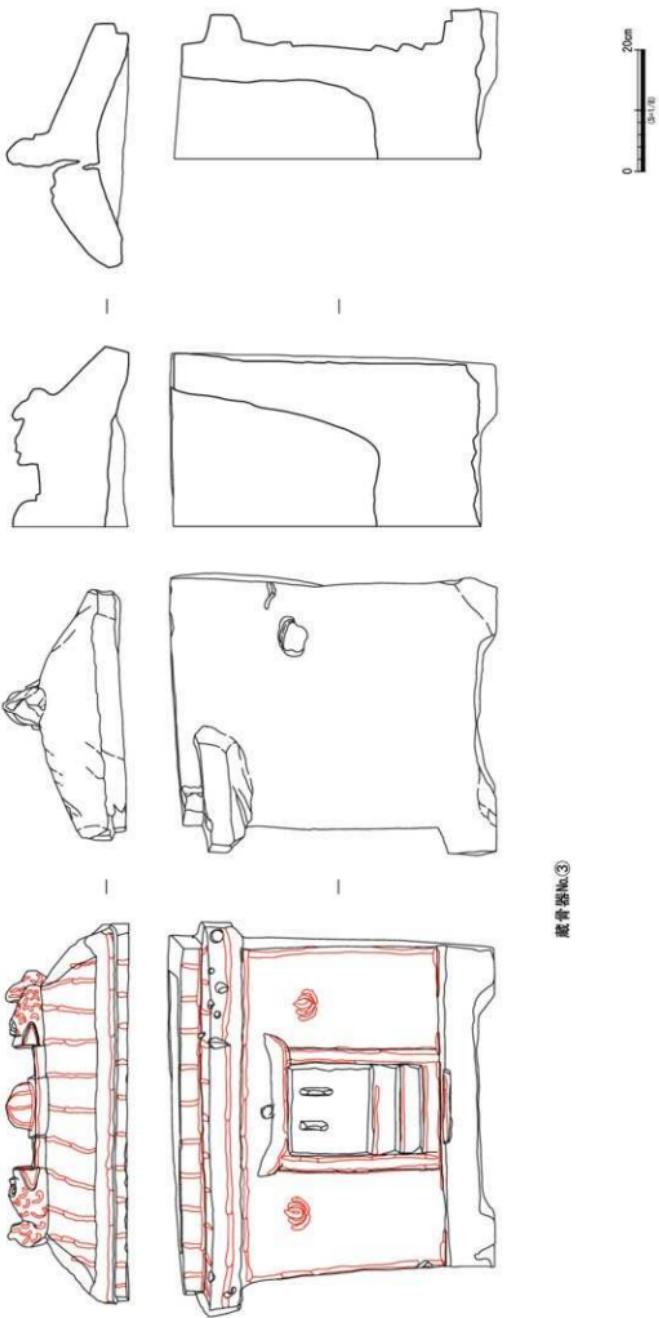


霞骨器No.①



霞骨器No.②

図版IV - 20 上焼本御殿型厨子 (No.①)・サンゴ石製石厨子 (No.②)



第IV-5図 サンゴ石製石厨子 (No.3)

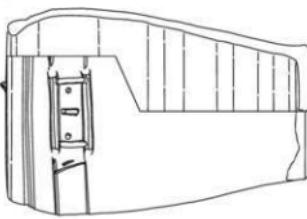
前骨圖No.3



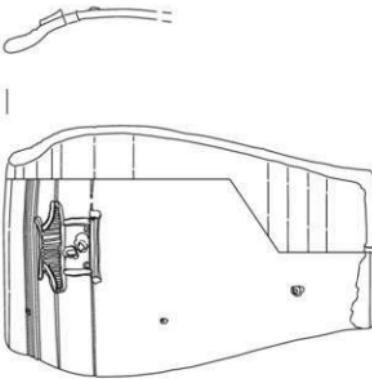
図版IV - 21 サンゴ石製石廟子 (No.3)

20cm  
(5+10)

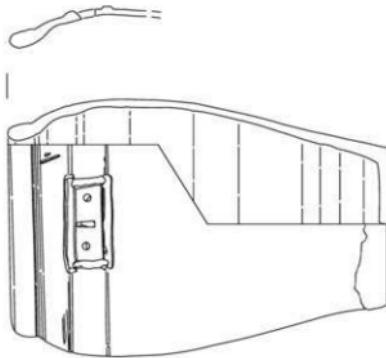
図骨器No.⑥



図骨器No.⑤



図骨器No.④



第IV - 6 図 身：ボージャー椅子 蓋：マンガン掛け焼締め椅子 (No.④)、ボージャー椅子 (No.⑤、⑥)

藏骨器No.⑤



藏骨器No.④



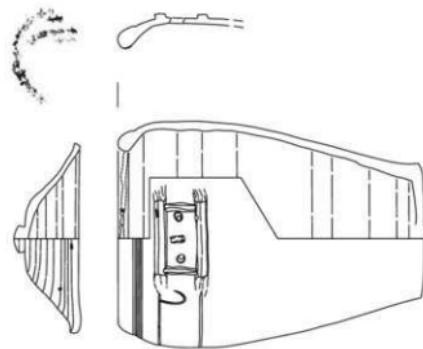
藏骨器No.④



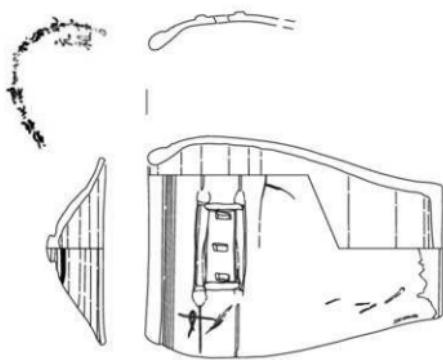
図版IV - 22 身：ボージャー厨子 蓋：マンガン掛け焼締め厨子 (No.④)、ボージャー厨子 (No.⑤)、(⑥)

20cm  
0

脛骨器No.⑧



第IV - 7 図 ボージャー脛子 (No.⑦、⑧)



鐵骨器No.③



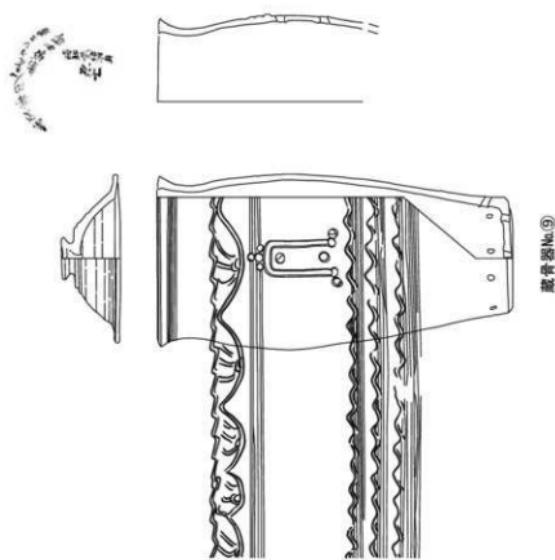
鐵骨器No.⑦





底骨器No.⑨

0 20cm  
(5cm)

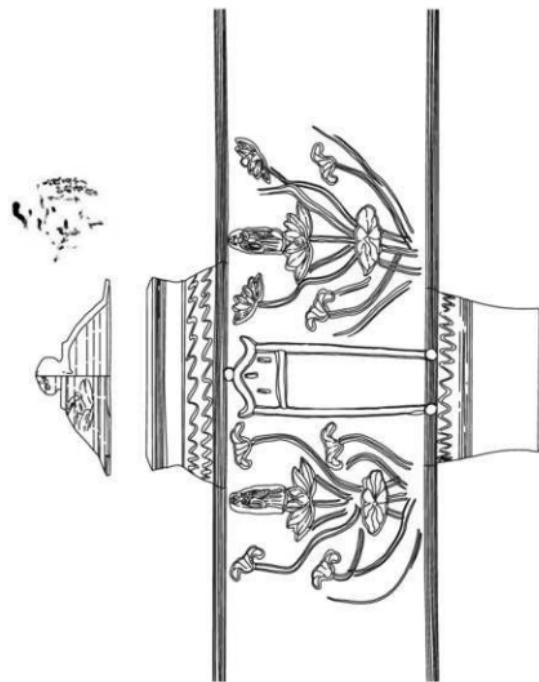
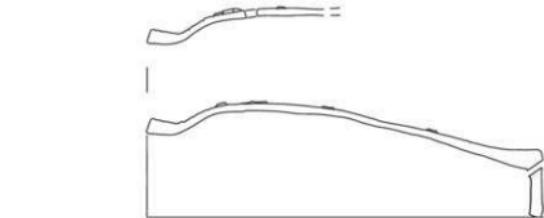


第IV - 8 図 マンガン掛け焼締め扇子 (No.⑨)



藏骨器No.⑩

図版IV-25 マンガン掛け焼締め厨子 (No.10)



藏骨器No.⑪

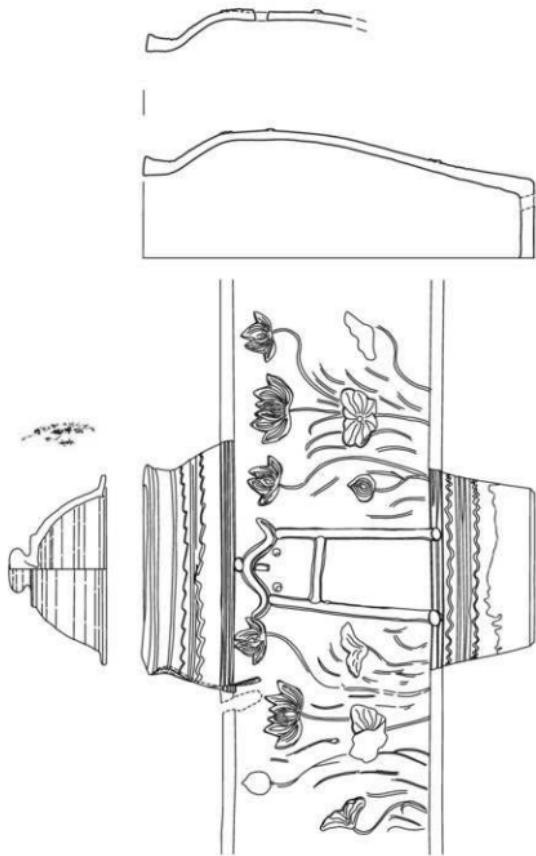
図版IV-9図 マンガン掛け焼締め厨子 (No.11)



底盤  
20cm  
(5/18)

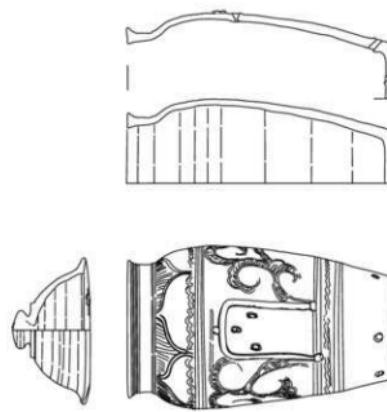
底盤器No.⑪

底盤器No.⑪





第IV-11図 マンガン掛け焼締め厨子 (No.⑫)

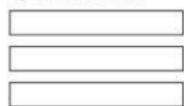


【野高真境名冢古墓の銘書】

藏骨器 No.①

身(正面)

咸豐□□□□



咸豐(中國の年号。一八五一年)

藏骨器 No.②

身(正面)

新垣ノ元祖父母

生立男子牛嶋袋

同人

妻

藏骨器 No.③

鎔音なし

藏骨器 No.④

蓋(内面)

新垣元祖義子

嶋袋筑登之

藏骨器 No.⑤

蓋(内面)

新垣元祖<sup>ニ</sup>義子嶋袋筑登之妻方

父母

藏骨器 No.⑥

蓋(内面)

新垣元祖口口義子嶋袋筑登之妻方

元祖

藏骨器 No.⑦

蓋(内面)

新垣元祖生立嶋袋筑登之妻方  
元祖

藏骨器 No.⑧

蓋(内面)

新垣元祖<sup>三</sup>養子嶋袋筑登之  
父母妻子  
女子

藏骨器 No.⑨

蓋(内面)

島袋蒲同人妻ウシ三男  
島袋加那  
昭和貳拾弐年  
死亡

昭和二十二年一九四七年

藏骨器 No.⑩

蓋(内面)

真境名小ノ  
島袋加那  
同人妻

藏骨器 No.⑪

蓋(内面)

うし島袋男子東真境名ノ  
島袋  
同人妻

藏骨器 No.⑫

鎧著なし

#### 第4節　まとめ

本調査は、野嵩第一公園の整備事業に伴い、周知の埋蔵文化財包蔵地である野嵩上後原古墓群内に所在する真境名家古墓の現況を記録するために実施したものである。墓の形態としては、亀甲墓であり、内部には 12 基の藏骨器（厨子甕ほか）が安置されていた。安置されていた藏骨器の一部に、「咸豐」（西暦 1851~1861 年）の銘書が記された厨子があり、このことから古墓の使用年代は、少なくとも約 150 年前に 19 世紀中頃（1851~1861 年）と推測される。

古墓が形成されている位置は、本来は墓正面から左に石灰岩岩盤が傾斜する所であり、古墓は岩盤を掘り込んで形成されている。したがって、袖垣は掘り込まれた石灰岩岩盤を利用している。また、墓正面左の袖垣には、袖墓（墓口 65cm × 60cm、奥行き 70cm）が造られており、墓内にはマンガン掛け厨子が納められていた。

# 第V章 真志喜グスクヌハナ古墓群の調査成果

## 第1節 はじめに

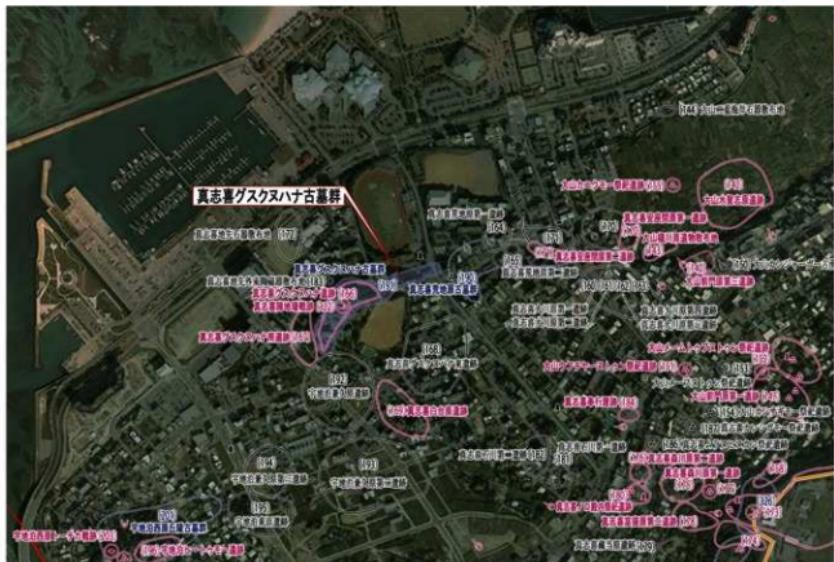
### 1. 位置と環境

真志喜グスクヌハナ古墓群の所在する宜野湾市真志喜は、宜野湾市の西側、第1面上（低位段丘下位面）から第2面上（低位段丘上位面）に位置する。旧集落は現在の真志喜の東側、パイプライン周辺の第2面上にあり、一帯にはウガンヌカタ、ウンサクモー、ヌンドゥンチなどの拝所が存在している。

また、宜野湾市の西海岸は湧水が豊富な地域であり、真志喜ではシャチャヌカーやマーチヌカー、県指定文化財である森の川などが見られる。森の川には羽衣伝説が存在し、沖縄で初めて中国と進貢貿易を始めたことで知られる中山王察度ゆかりの地でもある。ウガンヌカタに存在する市指定文化財である西森碑記には、森の川で天女が水浴びをした際に奥間大親と出会い結ばれ、娘を1人、



第V-1図 真志喜グスクヌハナ古墓群の位置図

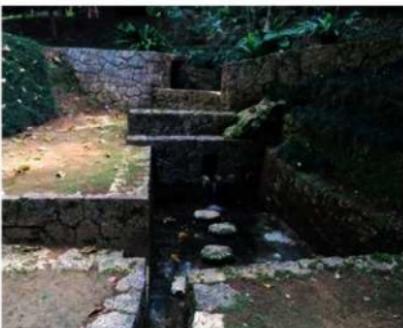


第V-2図 真志喜グスクヌハナ古墓群の位置と周辺の文化財

息子を1人授かった。この息子が察度であるというようなことが記される。さらに、西森碑記を建立した伊江家は奥間大親とつながりがあるため森の川を整備したとあり、森の川の石積みは西森碑記が建立された1725年頃に造成されたものであることが分かる。

森の川の西側には「真志喜森川原第一遺跡」が存在しており、奥間大親の屋敷があったと言われている。平成4年に行われた個人住宅建設に伴う発掘調査では、グスク時代に相当する大型の建物跡や祭祀の道具など多くの遺物が出土した（宜野湾市教育委員会編 1994）。

戦後、現在の国道58号線の西側はキャンプマーシーとして米軍による土地接収が行われ、東側は外人向賃住宅として開発が行われていた。昭和51年にキャンプマーシーが全面返還されてからは、住宅や公共施設等が建設された。近年では国道58号線沿いを中心に商業施設などの開発や埋め立てが進んでおり、旧地形を残している部分はわずかにみられるのみである。



図版V-1 森の川



図版V-2 真志喜森川原第一遺跡



第V-3図 昭和20年航空写真と地形図

## 2. 遺跡の概要

真志喜グスクヌハナ古墓群は、キャンプマーシー跡地に設立された宜野湾市立真志喜中学校のあるグスクヌハナと呼ばれる丘陵一帯に位置する。崖面には、石灰岩の岩陰を利用した岩陰墓や石灰岩を掘り込んでつくられた掘込墓。丘陵の裾には亀甲墓など多くの墓が確認されている。周辺は戦前、田畠が広がっており、丘陵を背にした状態で田畠や海に面して古墓が並んでいたが、現在は住宅や公共施設等に囲まれた状態になっている。

古墓群の中には、真志喜・大山・大謝名・宇地泊集落の成立に関わる旧家の門中墓が存在する。1985年に行われた丘陵下手側に位置する掘込墓の調査では、12基の蔵骨器が確認され、雍正7(1729)年や乾隆26(1761)年の銘書が見られた。また、墓床からは鳩目錢貨やガラス白玉が検出された。1986年に行われた安仁屋家古墓の調査では、康熙10(1671)年の銘書がある陶製蔵骨器を含む、多数の蔵骨器が確認されている（宜野湾市教育委員会編 1989）。

真志喜グスクヌハナ古墓群に所在するこれらの古墓は、型式の変移などを知ることができるだけでなく、集落の歴史などを知ることができる重要な遺跡である。

## 3. 調査経過

真志喜グスクヌハナ古墓群には掘込墓が多く存在しているが、石灰岩の風化により崩落し、改葬、改築がなされているものも多い。また、宅地の建設や墓の新設に伴う造成も行われており、古墓が消失する恐れがあった。そこで、遺跡の現状保存を目的として、平成24年度に地形測量を含む詳細分布調査を行うこととなった。

平成25年3月7日より現地での作業を開始し、測量作業と伐採作業を並行して行った。調査区域に分布する古墓の位置、特徴を把握することを目的とし、古墓の座標の確認、型式や造りの観察、写真等による古墓の記録を行った。その後伐採ガラの搬出を行い、平成25年3月28日に調査に係る作業を終了した。



図版V-3 作業風景

## 第2節 遺構

今回の分布調査で確認された墓は70基あり、その内訳は掘込墓49基、岩陰墓6基、洞穴墓1基、平葺墓2基、亀甲墓3基、家形墓5基、仮墓4基となっている。掘込墓が多いが、中には土砂の流入や崩落などによって判然としないものも存在する。

これら70基の位置座標、型式、コンベックス等を使用した外観、墓室内の簡易的な計測値や所見などを整理し、表にまとめた（第V-1表）。外観は墓庭、墓口などの観察を行い、墓室内はタナや藏骨器、人骨の有無などの観察を行っている。また、墓室内に関しては墓口が開いており、観察が可能な37基が対象となっており、調査にあたって墓口を開けることはしなかった。

### 1. 墓の構造

グスクヌハナ古墓群には集落の成立に関わる旧家の墓が存在し、集落の成り立ちなどの伝承に準じるかのように、墓が作られている場所の高さがそれぞれ異なっている。その中でも丘陵の最高所に位置するのが真志喜の奥間、与那廟、大謝名の又吉の墓である。

#### 12-22号墓

12-22号墓は墓正面に石灰岩を積み、セメントで目地を埋めているが、掘込墓と思われる。掘り込み部分は幅290cm、高さ210cmを測り、幅58cm、高さ94cmの墓口が造られている。崖の中腹に存在し、墓庭はなく、墓の前まで石灰岩とセメントで造成された階段が続いている。墓口の前には三味台が作られ、香炉が1つとその両脇に花瓶が1つずつ置かれている。調査時には花が飾られており、時々拝んでいる方がいるようであった。墓の手前にはコンクリート製の低い台が作られ、その上にも香炉が1つ置かれている。また、墓口むかって右側に「一九五一年□奥間氏」と線刻されており、三味台の側には「奥間大親之墓 一九八八年八月八日 旧六月二十七日」と書かれた碑が建てられている。古者の言い伝えでは、羽衣伝説に出てくる奥間大親の墓であるとされているが、今回は中の様子をうかがい知ることができなかったため、奥間大親に関係があるのかは不明である。

#### 12-28号墓

12-22号墓南側に位置する与那廟家の墓である。直接の道ではなく、12-22号墓から壁を伝って行かなければならぬ。真志喜製立原古墓群に所在する後与那廟家の亀甲墓に書かれていた「同人 与那廟筑登之親雲上 雍正六年戊申三月三日洗骨 □□墓処者城之□奈也」から、1728年ごろまで利用されていたと思われる（宜野湾市教育委員会編 1989）。

墓正面に石灰岩を積み、コンクリートブロックで墓口を閉じた掘込墓と思われる。いずれもセメントで目地を埋めている。掘り込み部分は幅310cm、高さ130cm、墓口は幅55cm、高さ132cmである。墓口には香をたくためと思われる凸型の台がついており、その台の脇にはカビアンジと思われる石で四角に囲われた部分が存在する。墓口の手前には三味台の代わりにコンクリートブロックが1つ置かれている。

#### 12-29号墓

12-28号墓の南側に位置する又吉家の墓である。こちらも直接の道ではなく、12-28号墓から壁を伝い、墓の正面へと行かなければならぬ。墓正面には石灰岩が積まれ、一部セメントが塗られている。墓口はコンクリートブロックで閉じられ、香炉はなく墓口で直接香をたいているようである。三味台などは見当たらない。墓口むかって右側のセメントで塗られた部分には「一九五六年四月二日 又吉門中」と線刻されている。



第V-4図 古墓の分布状況

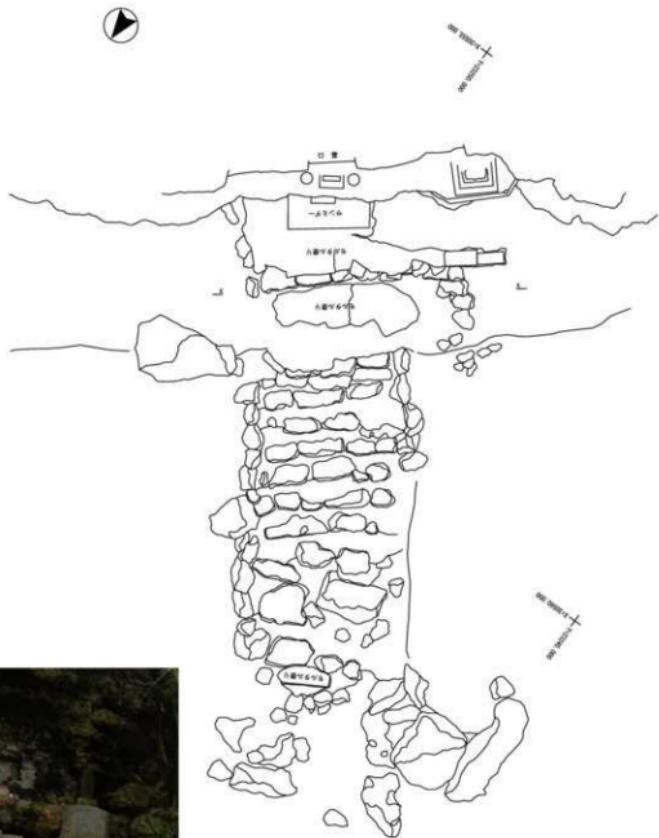
表V-1 古墓一覧 - 1

No.	墓番号	座標	分類	古墳		墓内 直方・原状	墓内 現状	1.1m×1.1m	計内・通り	寸法(cm)	幅	穴井の形状	構造部	人骨	備考
				基底	頂上										
1	12-1	X 30125.009 Y 23480.009	廻込塀	コンクリートによって構築。 現行 100	表面は石灰岩の切面に上って構築。墓口は石灰 岩を盛り立てる。現行をセメントで埋める。	幅 140 高さ 76 奥行き 25 高さ 97	不明	—	不明	—	不明	不明	不明	不明	「宇大山、門子山」墓の墓標あり。墓正 面裏口右に隠く又昔之墓。
2	12-2	X 23482.251 Y 9.438	廻込塀	無し	—	—	磯子墳子墓の城 片等が散在。	幅 330 高さ 136	不明	—	平坦	御子塚墓(磯根) 石野子墓(磯根)	—	—	—
3	12-3	X 23475.141 Y 9.584	廻込塀	コンクリートによって構築。 現行 375	コンクリートによって構築。	幅 200 高さ 65	不明	—	不明	—	不明	不明	不明	日などではなく、簡化された造り。	—
4	12-4	X 23476.046 Y 12.111	廻込塀	無し	—	—	横円形	幅 290 奥行き 120 高さ 115	無し	—	平坦	無し	無し	—	—
5	12-5	X 23471.828 Y 10.102	廻込塀	無し	—	—	幅 227 奥行き 220 高さ 62	無し	—	平坦	無し	無し	無し	—	—
6	12-6	X 23471.10 Y 8.561	廻込塀	無し	—	—	磯根形。 土砂が流入。	幅 200 奥行き 44 高さ 41	不明	—	平坦	御子塚墓 (磯根主で埋没、蓋なし)	無し	—	—
7	12-7	X 23476.444 Y 9.152	不明確	—	—	—	磯子墳子墓の城 片等が散在。	幅 110 奥行き 87 高さ 50	無し	—	ゾーム形	御子塚墓(磯根)	無し	—	6号墓の仮置として施設していた可能性あり。
8	12-8	X 23471.763 Y 8.686	廻込塀	現行 360	—	幅 92 奥行き 362 高さ 110	有り	幅 1 高さ 1 幅 1 高さ 1	ゾーム形	—	—	—	—	—	—
9	12-9	X 23471.357 Y 6.687	廻込塀	無し	—	—	土砂が流入。	幅 113 奥行き 164 高さ 50	無し	—	平坦	無し	無し	—	—
10	12-10	X 23471.360 Y 5.576	廻込塀	無し	—	—	土砂が流入。	幅 110 奥行き 90 高さ 50	—	—	—	御子塚墓(磯根主で埋没)	無し	—	—
11	12-11	X 23461.771 Y 9.343	廻込塀	無し	—	墓口上部の石灰岩が崩落。ほぼふきがれてい る状況。	—	不明	—	—	有り(墓口上部の崩落により詳し て記載ができないもの詳細は不 明)	不明	不明	—	—
12	12-12	X 23461.021 Y 10.594	廻込塀	無し	—	墓口上部の石灰岩が崩落。ほぼふきがれてい る状況。	—	不明	—	不明	—	不明	不明	不明	—
13	12-13	X 23458.318 Y 9.818	廻込塀	無し	—	—	土砂が流入。 磯根の城が破 壊。	幅 163 奥行き 140 高さ 112	不明	—	平坦	破片散乱	不明	—	—
14	12-14	X 23458.821 Y 8.348	廻込塀	無し	—	—	土砂が流入。	幅 112 奥行き 65 高さ 28	—	—	平坦	無し	無し	—	—
15	12-15	X 23457.760 Y 7.999	廻込塀	(成段の石垣構造によって構 築。一部残存)。	現行 330	—	幅 51 奥行き 280 高さ 49	有り。 磯根の城の片 等が残る。	幅 477 奥行き 280 高さ 123 奥行き 250 高さ 123	無石を利 用した。 右側に土砂 が流入。	有り。 無石を利 用した。 左側に土砂 が流入。	磯根破片 散乱	無し	6号墓、18号墓と接続。	—
16	12-16	X 23458.243 Y 10.599	廻込塀	無し	—	—	土砂が流入。	幅 100 奥行き 70 高さ 65	無し	—	平坦	御子塚墓(磯根)	不明	15号墓、19号墓と接続。	—
17	12-17	X 23458.342 Y 5.699	廻込塀	不明確	—	石灰岩の断面構みによって構築。右側は削調 整口。	幅 100 奥行き 70 高さ 65	方型。 奥行き 100 高さ 45	—	—	平坦	御子塚墓(磯根)	—	—	—
18	12-18	X 23461.795 Y 7.643	廻込塀	石灰岩を窓状に隙間を分ける。コ ンクリートブロックを三種合と して使用。	現行 360	正方形は石灰岩とセメントによって構築。セメ ントによる隙間に必要な縫合となる。	幅 40 奥行き 32 高さ 32	不明	—	不明	—	不明	不明	15号墓、16号墓と接続。	—

表V-2 古墓一覽 - 2

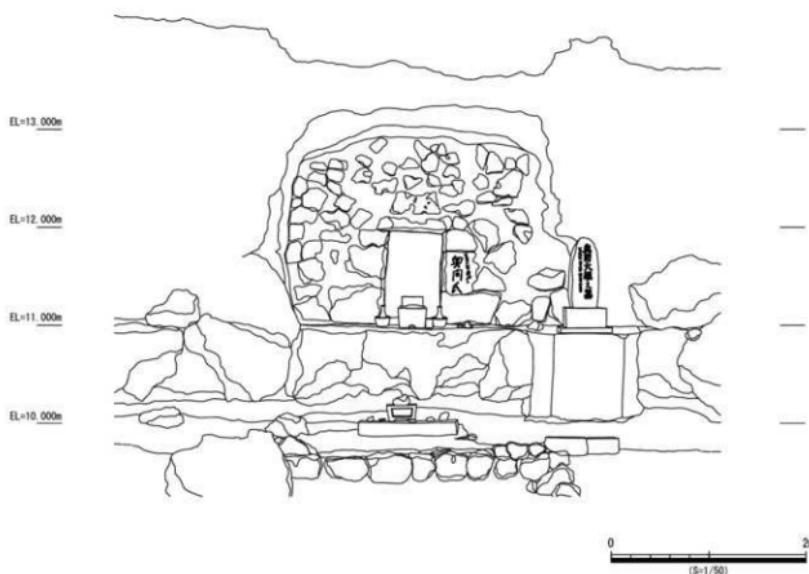
表V-3 古墓一覽 - 3

表V-4 古墓一覽 - 4

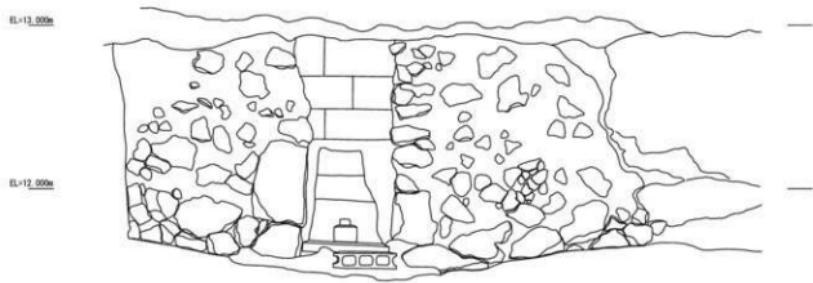


0  
2m  
(S=1/60)

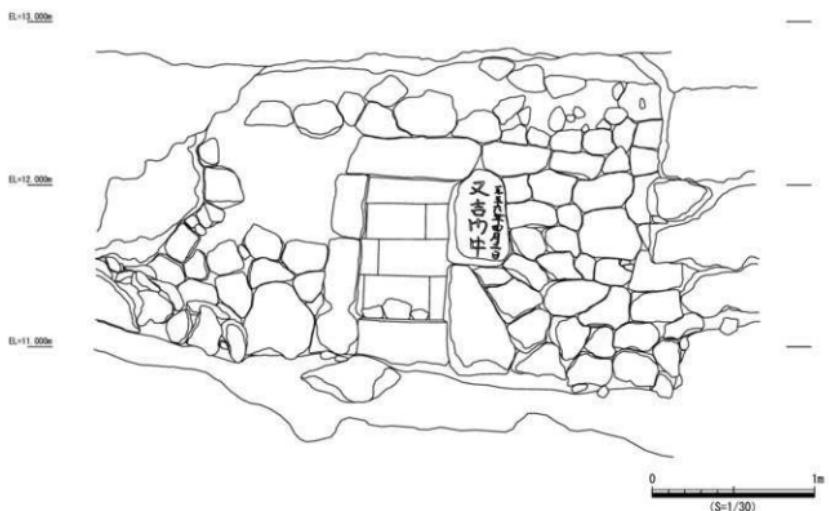
第V-5図 12-22号墓 石階段平面図



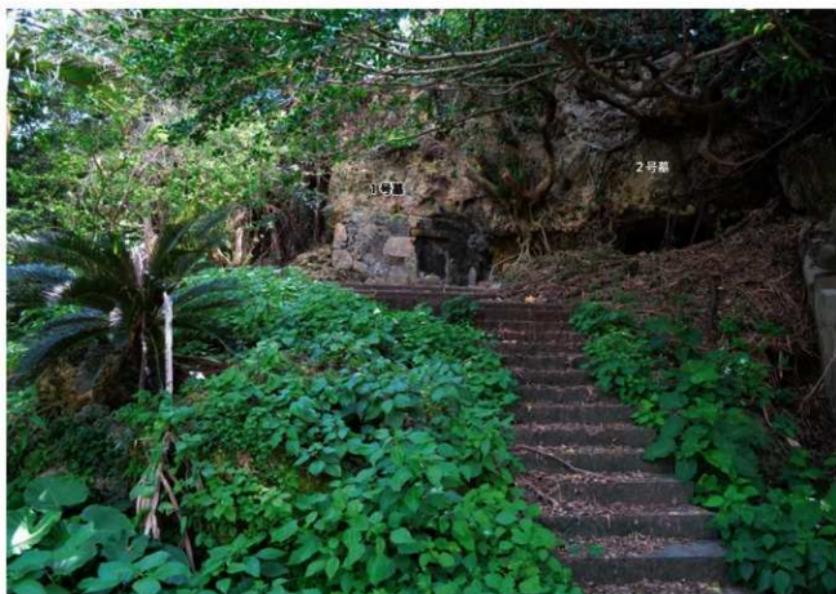
第V - 6図 12-22号墓 墓口正面図



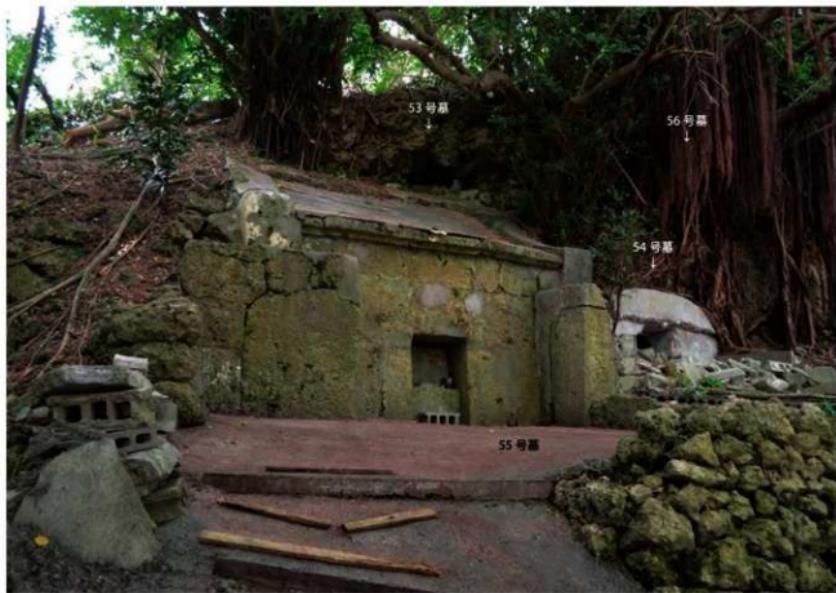
第V - 7図 12 - 28号墓 墓口正面図



第V-8図 12-29号墓 墓口正面図



图版V-4 1号墓·2号墓



图版V-5 53号墓·54号墓·55号墓·56号墓

## 第VII章 真志喜グスクヌハナ古墓群第11-1号墓の調査成果

### 第1節 調査経過

平成23年8月13日に真志喜グスクヌハナ丘陵古墓群に所在する墓を修繕するとの連絡があり、翌日の8月14日に現地へ確認に向かった。一帯には亀甲墓が数基並んでおり、その中でも当該古墓は比較的古い亀甲墓であったため、8月17日から調査を開始することになった。スタッフやコンペックス等を用いて各部位の簡易的な計測を行いつつ写真撮影を進めていき、8月19日には調査を終了した。

### 第2節 遺構

当該古墓は宜野湾消防署真志喜出張所訓練塔の向かい側に位置する。前章で報告した分布調査の範囲外であり、真志喜グスクヌハナ古墓群の中でも亀甲墓が並ぶ東側の地域にあたる。当該古墓は石灰岩製の亀甲墓で、鏡石や袖石などにはかなり大きな石を使用している。また、白や眉などには所々モルタルで修復されている様子が見受けられる。

今回は墓口を開けずに外観の記録調査のみを行ったため、扇子彫等を含む墓室内の様子は不明である。

#### (1) ポージ

幅が6.94m、奥行きが約6mを測る。ポージの周縁には石灰岩の切石が2列に並べられており、平面で見るとU字に近い前方後円の形を成す。ただし、外側の列は隣接地に一部切られているため途切れたり状態になっている。ポージの周りにも切石を並べて造られた袖回りがあるが、こちらも一部を残すのみになっている。現在は土が露呈している状況だが、ポージ内に一部漆喰が残存していることから、以前は石を配し、目地を漆喰で埋めていたか、塗布していたと思われる。

#### (2) 墓庭

墓庭は幅5.9m、奥行き4.9mを測る。門などではなく、北東側に大小2基の仮墓が設置されている。墓庭の南西、三味台付近には50×20cm程度の浅い掘り込みがあり、カジアンジとして使用したのかもしれない。墓口の前には幅2.63m、奥行き約90cm、高さ26cmの一枚岩でできた三味台がある。さらにその前にも幅5.95m、奥行き84cm、高さ18cmの三味台があり、こちらは切石を並べ、区画を分ける。

右側の庭積みは面取りされた石灰岩の相方積みで造られ、高さ約1.5m、幅約2.3mを測る。そこから野面積みされた高さ約1.2mの庭回いが約3.5m続くが、墓庭にある仮墓手前で途切れている。

左側も右側と同じような造りではあるが、庭積みの途中から庭回いにかけて崩れており、残存しているのは庭積みが上約1.6m、下約2.3mである。庭回いは部分的に石積みを残す程度であり、比較的残りが良い墓庭入口側約2.2mはブロックや切石が混ざっているため、積みなおされたものと思われる。

また、庭回いには左右とも1枚ずつシャコガイが混じっていた。

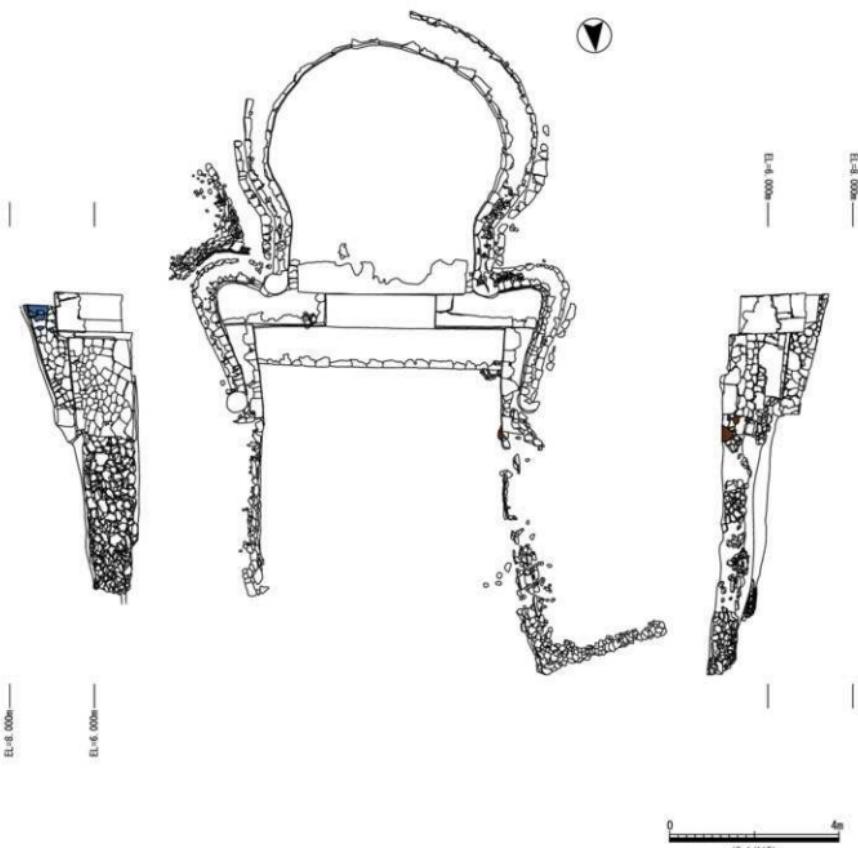
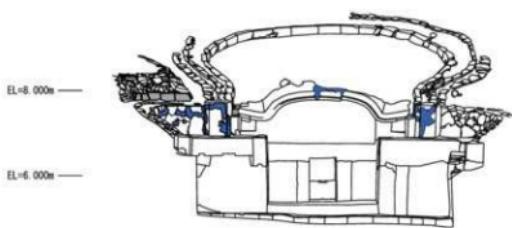


第VI-1図 真志喜グスクヌハナ古墓群  
第11-1号墓の位置図

(3-1/5000)

100m

0



第VI-2図 正面図・平面図・断面見通し図



全景-1



右側 庭園い



全景-2

図版VI - 1 真志喜グスクヌハナ古墓群第 11-1 号墓



右側 袖石



左側 袖石



シャコガイ（右側 底面）



白



覆板 石列



眉

図版VI - 2 真志喜グスクヌハナ古墓群第11-1号墓

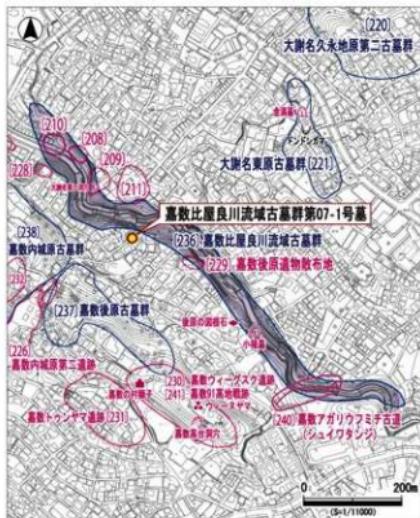
## 第VII章 嘉数比屋良川流域古墓群第07-1号墓の調査成果

### 第1節 はじめに

#### 1. 位置と環境

宜野湾市嘉数は、宜野湾市の南西部に位置しており、周囲は北に大謝名、東に真栄原、西に浦添市牧港、南に浦添市当山に囲まれた宜野湾市内でも南西端に位置している地区である。

比屋良川流域古墓群は、『土に埋もれた宜野湾』や『宜野湾市文化財情報図』〔平成25年度版〕等で報告がなされている「周知の遺跡」である。当古墓群は、嘉数地区と大謝名・真栄原地区を南東から北西に向けて貫流する比屋良川流域沿いに形成されている。



第VII-1図  
嘉数比屋良川流域古墓群第07-1号墓の位置図



第VII-2図 嘉数比屋良川流域古墓群第07-1号墓の位置と周辺の文化財

## 2. 立地と調査に至る経緯

嘉数比屋良川流域古墓群は、宜野湾市嘉数と大謝名・真栄原の間を南東から北西に向けて流れる比屋良川流域沿いに形成されている。当該古墓群が所在する地域において、比屋良川公園整備に伴う工事で、平成19年12月13日に重機による掘削中に地面の一部が陥没。陥没した場所が墓室の天井部であったことから、不時発見文化財緊急発掘調査の依頼を受けて、本市教育委員会が平成19年12月13日～16日の期間で発掘調査を実施した。調査対象は、墓群の中域の南岸に位置している墓1基（第07-1号墓）で、調査面積は墓室の5.96 m<sup>2</sup>である。

## 3. 古墓群の概要

比屋良川流域の南北崖面には、三段の崖葬墓や掘り込み墓が形成されており、下流域の大謝名橋付近に至るまで連続として分布している。古墓の数は200を超えると推測されている（宜野湾市教育委員会編1989）。

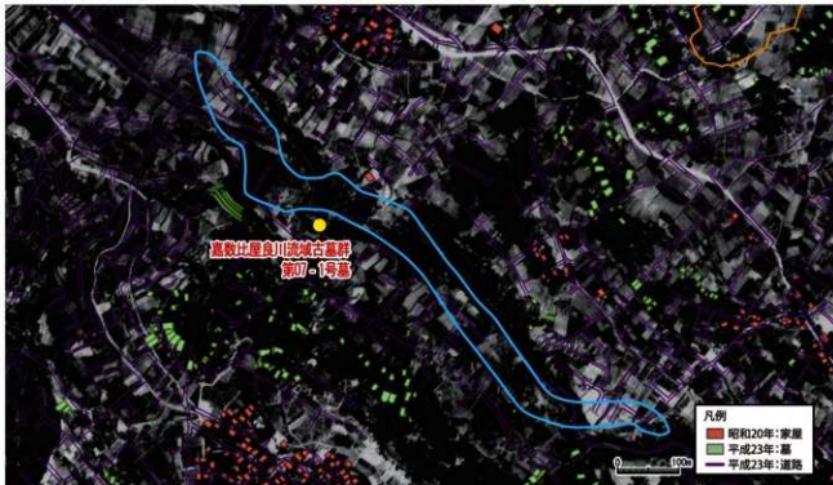
本流域一帯の古墓の形態は、川沿いの崖面に露頭する石灰岩基盤を掘り込み、羨道を残して墓口を野面積みや稚拙な切石で密閉したものが大半である。

その代表的な古墓である小禄墓（県指定有形文化財〔建造物〕）は、川縁の南崖の中腹を横幅8.5m、高さ2.4mの大きさで掘り込み、開口部を稚拙な切石の相方積みによって密閉したものである。

小禄墓の特異な点として、墓室内が窓える覗き孔が羨道の右側に設置され、その羨道の周縁の石積み部分が必要に応じて取り外せるように、1.7mの幅をもって縦方向の目地が造られていることが挙げられる。

また、墓室内には「弘治七年おろく大やくもい 六月吉日」と浮き彫りされた沖縄最古級（尚真18年、1494）の平仮名銘文を残す中国産閃緑岩製の石厨子（県指定有形文化財〔彫刻〕）が先の覗き孔の前方に安置されている。他にも数多くの蔵骨器が納墓されているが、いまだその詳細は不明である。

墓口前にも、墓室内に安置されている中国産閃緑岩製の石厨子と同じ石材を使用して造られている石彫香炉（市指定有形文化財〔彫刻〕）や、石彫獅子（市指定文化財〔彫刻〕）がある。



第VII-3図 昭和20年航空写真と地形図

#### 4. 調査経過

調査は、平成 19 年 12 月 13 日に墓の内部の状況を確認するために、墓室内に流入した土砂や礫を取り除く作業から始めた。その後は、墓室内の棚に安置されていた蔵骨器等を外に運び出す作業に伴って写真撮影や図面の作成を行い記録保存とした。墓の座標位置や図面作成については、㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した。なお、調査に係る全ての作業は同年 12 月 16 日に終了した。

確認された蔵骨器のうち、蔵骨器に転用したと推定される土器壺と、その上に配されていた蓋が本市教育委員会に収蔵されている。

※本文以降に記述する墓の各部名称については、凡例 1 を参考照されたい。

### 第 2 節 古墓の概要

嘉数比屋良川流域古墓群は、宜野湾市嘉数と大謝名・真米原の間を流れる比屋良川流域沿いの両側急斜面地に形成されている。そのなかでも本古墓は、当該古墓群中域の南側斜面地に位置しており、琉球石灰岩を基盤とする崖斜面に横穴を掘り込んで造られた墓である。

しかしながら、墓口より外側は埋められていたことから、調査が行なえたのは墓室のみであり、墓の全形を確認することはできなかった。

### 第 3 節 遺構

#### 1. 墓の構造

墓全体が地中に埋まっているため、外観的な特徴については不明である。そのため、墓室内の調査によって得られた情報と、その情報から推測されることについて報告する。墓室内は、琉球石灰岩を掘削して造られており、高さは最大 1.46 m、奥行き最大 3 m、幅最大 3.48 m で、断面形状はドーム状、平面形状は不定形となっている。また、棚は 1 段あり、「U」字状を呈している。

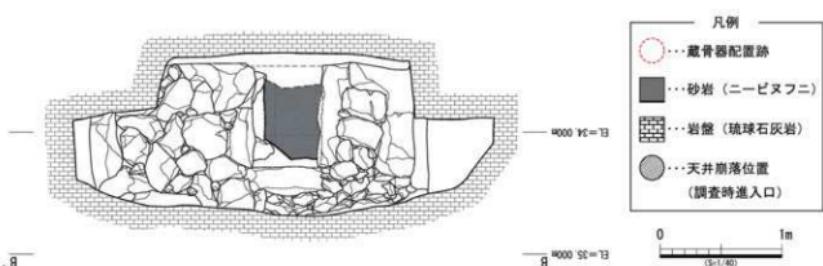
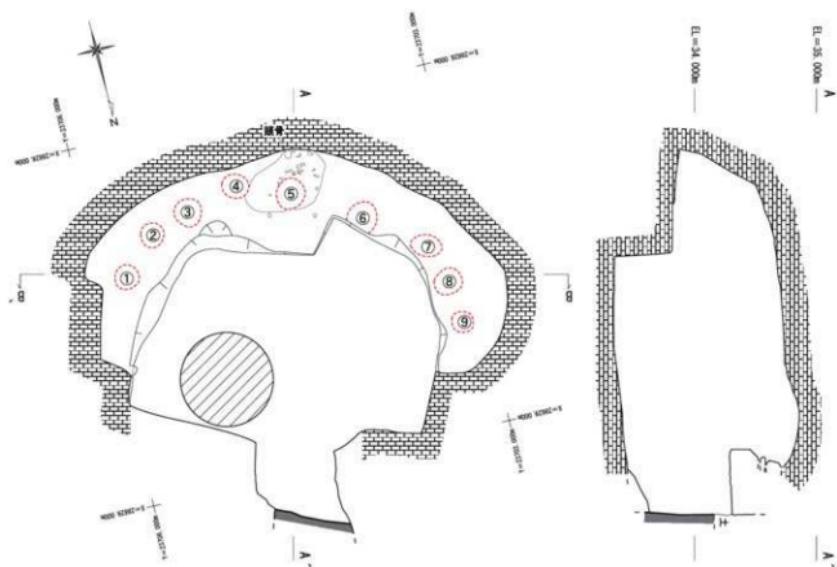
棚は岩盤を削って造られており、シルヒラシから約 50 cm の高さに位置する。また、シルヒラシは、幅約 2.4 m、奥行き約 1.6 m となっている。ちなみに、墓室内には「イケ」に相当するような集骨場所は確認されなかった。墓口は、高さが約 0.9 m、幅が約 0.6 m で、北北東を向いて開口している。墓室内から墓口側を窺うと、羨道周辺は琉球石灰岩の野面積みが確認できる。

また、羨道の上部には門冠（ジョウカブイ）と推定される琉球石灰岩製の一枚岩が配されており、羨道の両側面にも琉球石灰岩製一枚岩が立て掛けられている。

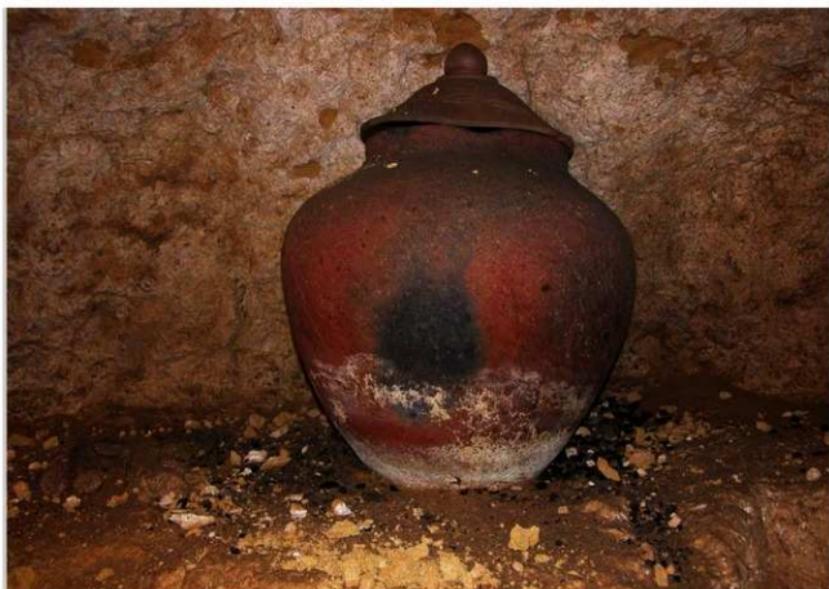
なお、羨道の奥（墓口外側）に見られる砂岩質の一枚岩は、墓口を閉じる門石（ジョウイシ）であった可能性がある。



図版VII-1 作業風景



第VII-4図 墓室内（平面図・断面図・墓口断面見通し図）



藏骨器（土器壺）検出状況



藏骨器検出状況（藏骨器2～5）



藏骨器検出状況（藏骨器6～9）



藏骨器5の内部状況



藏骨器3の内部状況

図版VII-2 上・中：墓室内藏骨器検出状況、下：藏骨器内部状況



墓口側正面（南より）



墓口側西部（南より）



墓口側東部（南より）



天井部（北より）



奥壁側（東より）

図版VII-3 墓室内

## 第4節 遺物

### 1. 蔵骨器

本古墓で確認された蔵骨器は全9基で、その内訳はボージャー厨子が5基（No.2・4・6・7・9）マンガン掛け焼締め厨子が2基（No.3・8）、土器壺（宮古式土器）が1基（No.5）、陶製不明厨子が1基（No.1）であった。の中でも、蓋付きの蔵骨器は4基（No.3・5・7・8）であった。ただし、蔵骨器No.2、6においては、蔵骨器内に蓋の破片が確認されたことから、それぞれの蔵骨器とセット関係になる蓋があつたことが推測される。

棚に安置されていた蓋を伴わない2基のボージャー厨子（No.4・9）とシルヒラシで確認された陶製不明厨子（No.1）については、シルヒラシで確認された3基の蓋がセット関係になると思われるが、詳細は不明である。

棚の中央に安置されていた土器壺（No.5）は、容器内部に炭化した人骨が納められていたことから、他の蔵骨器とは異なる様相が窺えた。

2基のマンガン掛け焼締め厨子（No.3・8）は、身の胴部に唐破風形の屋門及び蓮華文が貼付されており、また横帯も空帯の貼り付けが主に見受けられた。また、セット関係にある蓋についても、各々に宝珠台が2段つくられる。

ボージャー厨子（No.2・4・6・7・9）は、窓枠が平葺形と唐破風形の2種が認められたが後者は1基（No.6）のみだった。

蔵骨器No.2、3、7、8、9に納骨されていた人骨は比較的の残存状態がよく、特にNo.3内には少なくとも2人分の人骨が認められており、うち1人分については頭骨が残存していた。

なお、本古墓内より確認された蔵骨器からは銘書は確認されなかった。

第VII-1表 蔵骨器観察一覧 - 1

図版番号	分類	器種	器形・成形など	文様・銘書など	場所
- 1	不明	身	上半部が欠損した蔵骨器で、口縁形態および窓枠あるいは屋門が不明な資料である。	残存部には文様も銘書も見受けられない。	第VII-4図 ①
図版VII-5	2	ボージャー	身	口縁部が焼成時に歪んだ蔵骨器。口縁部下に3本の沈線を施せらせる。窓枠は平葺形であるが屋根を模したつくりにはなっていない。窓枠内中央に方形、その両側に円形の孔を穿つ。	胸部への文様は見られず、銘書も認められない。
					第VII-4図 ②
	3	マンガン	蓋	跨付きのもので、体部上に宝珠台が2段設けられ、その上部に低平の宝珠が付される。また、内面の一部に刷毛目痕（？）が見られ、上部には空気抜きの孔が穿たれる。外側のみマンガン釉が施される。	文様や銘書は確認できない。
			身	横帯1・2を沈線で囲繞し、3・4は粘土帯を貼り付ける。正面には玉飾の付いた唐破風形の屋門が貼付され、屋門内に銘書面を設ける。柱貫の上には方形の窓が3ヶ所に穿たれる。全体的にマンガン釉が掛かるが、銘書面や口唇は露胎する。	肩部や胸下部に觸描きによる波状文が施され、屋門周辺には貼付された蓮華文が見られる。 銘書は認められない。
	4	ボージャー	身	口縁下部に2条の沈線が引かれる。窓枠は平葺形を呈すが、瓦屋根をモチーフとした装飾は施されない。枠内は中央に隅丸形形状の孔があり、両端に円形の孔が認められる。また、窓枠に向かって右側に窓印が確認できる。本蔵骨器の胸部は焼成時の破損が著しい。	文様および銘書は見受けられない。

第VII-2表 藏骨器観察一覧

図版番号	分類	器種	器形・成形など	文様・銘書など	場所
第VII-5・図版VII-4	5	笠形 蓋	いわゆるボージャー厨子に対応するものである。体部上には段の宝珠台を設けて外側から穿孔し、中空の宝珠を乗せる。下端部は厚すらする。器面調整は宝珠および体部下半を指ナゲで行い、宝珠台から体部上半はヘラケズリが施される。	体部外面に3ヵ所の蓮華が施文される。	第VII-4図⑤
		土器壺 (宮古式土器) 身	口縁は「く」の字状に屈曲させ、口唇部は丸く作る。肩部が強ることで最大径となり、底部へ移行しながら徐々に窄まる。底部は難なつりとなり、外底面は丸みを帯びる。器面には口縁部にナゲ調整が認められ、胴部以下は斜位～横位方向のミガキが施される。	文様・銘書は見られない。	第VII-4図⑥
図版VII-5	6	ボージャー 身	口縁部が比較的立ち上がる藏骨器で、口縁部の下方には条の状の彫刻がある。正面の窓枠は唐破風形につくられ、柵内には円形窓の間に方形容が見られる。また、窓枠に向かって左側に廟印が刻まれる。	文様や墨書きなどは確認できない。	第VII-4図⑦
		笠形 蓋	撮みや撮み台などを有しないもの。外面には若干の植蠶痕が残るが、内部は顯著である。	文様や銘書は確認できない。	第VII-4図⑦
7	7	ボージャー 身	本藏骨器の頸部も若干立ち上がるもののようである。口縁部下方には2条の沈線が引かれる。平葺形の窓枠が貼付されるが、やや稚である。柵内の上半部中央に方形の窓が穿孔される。本藏骨器も向かって左側に廟印を有す。	文様および墨書きによる銘書は認められない。	第VII-4図⑦
		鰐付き 蓋	鰐付きの蓋で、体部上に2段の宝珠台が設けられ、その上部に宝珠が付く。内上面には空気抜きの孔が外側から穿孔される。外面にはマンガン釉を塗るが、内部は施釉しない。	文様および銘書は見られない。	第VII-4図⑧
8	8	マンガン 身	横帯以外は粘土帯の貼付で、正面の玉飾や屋門も唐破風形に貼り付ける。屋門内の銘書面は露胎し、それ以外はマンガン釉が塗布される。柱貫の上部に方形の窓を3ヵ所に設ける。	肩部に唐草文が描かれ、胴部には蓮華や法師像などの貼付文が見受けられる。胴下部には波状文が配される。墨書きは確認できない。	第VII-4図⑨
		ボージャー 身	口縁部形態がマンガン釉掛け焼き締め厨子に類似する藏骨器である。口縁部には沈線が2条見られ、肩部上にも浮かし彫りの帶を有す。窓枠は平葺形を呈するが、瓦屋根を模した装飾はない。柵内3ヵ所に方形の窓を穿つ。	本藏骨器には文様や銘書が見受けられない。	第VII-4図⑩
9	9				



第VII-5図 蓋：笠形、身：土器壺

図版VII-4 藏骨器（左：蓋、右：身）



0 20cm  
(S-1/8)

图版VII-5 藏骨器

## 2. 墓室内出土蔵骨器配置

棚に安置されている蔵骨器には、墓室の奥壁に向かって左から時計回りに任意の番号を付した。また、シリヒラシで確認された蔵骨器については、棚に残されていた痕跡から、①(第VII-4図参照)の位置に安置されていたものと推測される。

なお、当該古墓内に安置されていた全ての蔵骨器には人骨が納められていたが、詳細な調査は行なっていない。

## 第5節まとめ

今回調査を行なった嘉数比屋良川流域古墓群第07-1号墓は、比屋良川公園整備工事中に地中より不時発見された墓である。記録保存を行なえた箇所は墓室のみである。琉球石灰岩に横穴を設けて墓室を形成する掘込墓である。しかしながら、墓全体が地中に埋もれていたことから、詳細な墓の形態については言及できない。墓室の床面積は、棚を含めて5.96m<sup>2</sup>となっている。

墓室内部の構造は、奥壁側には棚が一段作られており、墓口側は羨道部に大きな一枚岩を組み合わせて墓室への出入口を設け、その周辺は野面積みで石を敷き詰めて墓室開口部を密閉している。

当該古墓群は、亀甲墓や平葺墓などに見られる上屋が築造されない、より古式の古墓が散在する場所であり、県下でも重要とされる小禄墓を含む古墓群として、今後に保護される意味は計り知れないものがある。

また、嘉数の本流域一帯は、太平洋戦争時の戦場の一つであり、防空壕も分布している。当該古墓群と同様に、一帯の地域史理解のために保護されるべき文化財である。



図版VII-6 嘉数比屋良川流域古墓群（左：遠景 右：近景）

## 第VII章 喜友名前知花家之墓（喜友名後原丘陵古墓群）の調査成果

### 第1節 はじめに

#### 1. 位置と環境

喜友名後原丘陵古墓群は、『土に埋もれた宜野湾』や『宜野湾市文化財情報図』〔平成25年度版〕等で報告がなされている「周知の遺跡」である。当古墓群は、キャンプ瑞慶覧と普天間飛行場に挟まれた標高60～80mの石灰岩丘陵に立地する。第1章で述べたように、本市の地形は大半を台地が占めており、西海岸から内陸に向かって雛壇状を呈す4つの海岸段丘が展開する（第I-2図）。当古墓群は、この段丘の第3面（中位段丘下位面）に位置する。

遺跡が立地する丘陵は、新しい墓の造成工事の他、昨今の市街化によって宅地化が進み、その多くが造成を受ける。戦前、県道30号線付近には、マジムンドーと呼ばれる陥没ドリーネ状の凹地を利用した多数の掘込墓が連なっていたと言われるが、1950年代の土地造成によって埋没したという。



第VII-1図 喜友名前知花家之墓の位置図  
(B=1/5000)



第VII-2図 喜友名前知花家之墓の位置と周辺の文化財  
(B=1/10000)

喜友名後原丘陵古墓群の西側には、喜友名旧集落が隣接する。集落中心部である喜友名原は、現在でも碁盤目集落の名残が残る。また、フーチゲーシ（邪氣反し）である石獅子は県内最多の7体が残り、市の有形民俗文化財に指定されている。旧集落は石灰岩台地に立地しており、台地の麓には湧泉が多い。しかし、湧泉は集落から遠く、集落北側の谷を降りなければならなかったため、生活用水の確保には苦労したという。なお、喜友名の主なカーには、ヤマガーガー、バシガーガー、ミーガー、ヒージャーガー、アカンナーガー、イキガーガー、イナガーガーの7つがあり、「七ヌカー（喜友名ナナヌカー古湧泉群）」と呼ばれる。このうちの、イキガーガーとイナガーガーの2つを合わせて喜友名泉と呼ぶ。

喜友名泉は、沖縄の優れた石造技法を現在に残す貴重な文化財であり、国の有形文化財に指定されている。喜友名泉を降りる石畳の坂道「カービラ」西側には、石切り場があった（喜友名西原石切場跡）。この石切場から運び上げた石灰岩で、墓を造ったと言われる。1枚の石を運ぶのに、50人程の人手が必要だったという（宜野湾市教育委員会編 2012）。



図版VIII - 1 喜友名泉



図版VIII - 2 喜友名西原石切場跡



第VIII - 3図 昭和20年航空写真と地形図



平成 13 年度に調査された喜友名勢頭原丘陵古墓群 2 号墓



平成 24 年度に調査された喜友名原古墓群岩陰墓

図版VIII - 3 喜友名後原丘陵古墓群周辺の古墓



図版VIII - 4 調査経過状況

喜友名後原丘陵古墓群の南側には、喜友名勢頭原丘陵古墓群が隣接する。喜友名勢頭原丘陵古墓群も宅地化により、簡易水道タンク北側に所在したヤチジンガマグワーと呼ばれる岩陰掘込墓などが消失したという。

平成 13 年度には、喜友名勢頭原丘陵古墓群において、個人墓造成に係る緊急調査が行われた。その一方で、調査対象範囲外の工事中に新たな古墓（2 号墓）が不時発見されている（宜野湾市教育委員会編 2007）。

喜友名後原・勢頭原丘陵古墓群周辺は、石灰岩が露頭する状況が各所で見られ、岩陰墓などに利用しやすい地形的な特徴を有している。平成 24 年度には、喜友名後原丘陵古墓群の西側で共同住宅建設が計画された際、岩陰墓が不時発見されたため、調査を行った。当岩陰墓は、近世～近代の蔵骨器や人骨が散在し、その下層からは貝塚時代前期の遺構も確認された。新規発見の遺跡であり、このような石灰岩が露頭する一帯を喜友名原古墓群として周知している（宜野湾市教育委員会編 2014）。

## 2. 調査経過

平成 22 年 9 月初旬頃、墓の新設工事に伴い蔵骨器の引き取りについて打診を受けた。これを受けて、9 月 28 日に現地を確認したところ、取り壊される墓は新しい家形墓であったが、簡易的な測量と撮影による記録をとることとした。作業は翌 9 月 29 日に行い、即日終了した。なお、蔵骨器は第Ⅶ - 6 ～ 8 図（図版VIII - 9 ～ 11）に示した 3 基を引き取り、宜野湾市教育委員会で保管している。



図版VIII - 5 墓の取り壊し状況

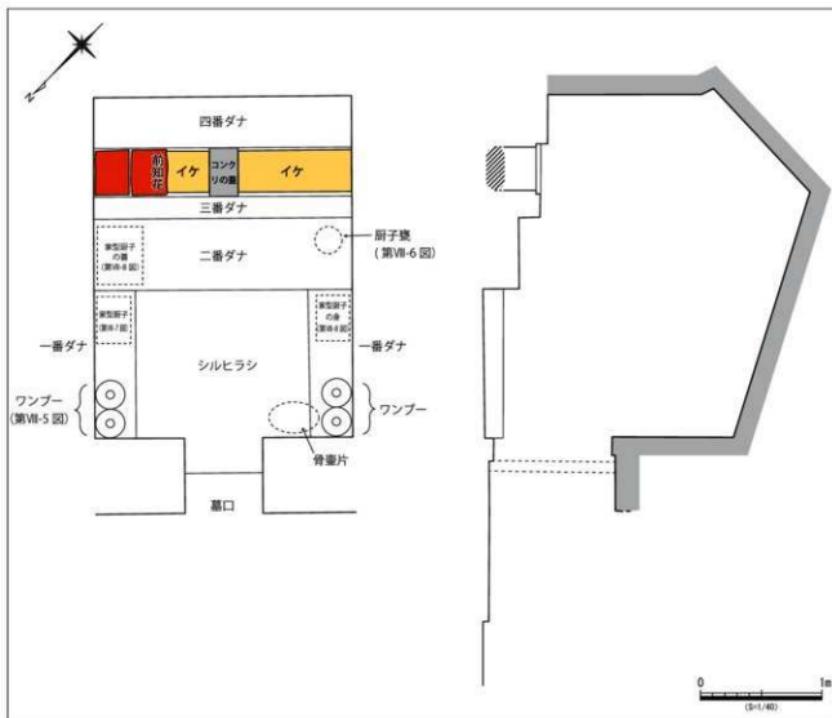
## 第2節 墓の構造

調査対象とした墓は、鉄筋コンクリート製の家形墓である。同型の墓と横並びに連なるもので、兄弟墓とも呼称される。このうち、向かって右側の前知花家之墓の測量調査の成果を以下に報告する。

測量は、墓の軸を通るラインを設定して簡易的に行った。各法量は第VII-1表のとおりである。タナは「コ」の字状を呈し、墓口を入って左右のタナが最も低い（一番ダナ）。この左右の一番ダナは、造墓後に石灰岩の切り石を置いて、モルタルで固めているようである。この右のタナの奥には上焼ツノ型扇子が安置されており、これと対面するように、左のタナには上焼コバルト掛け扇子の身が安置される。二番ダナ右には、これに対応する蓋が置かれており、人骨を引き取る際に動かされたものと思われる。なお、一番ダナ（左右のタナ）の手前には直径約20cmの鉢（ワンブー）が伏せられた状態で置かれている。

二番ダナ左には、マンガン掛け底付き焼き締め扇子が安置される。三番ダナには、イケが設けられており、瓦やコンクリートの蓋が設置される。瓦の蓋は3枚確認したが、このうちの1枚は割れてイケに落ちていた。また、この割れた瓦の蓋と中央の瓦の蓋には「前知花」の銘が残る。

四番ダナの高さは低い。三番ダナと四番ダナにはそれぞれ蔵骨器は安置されていなかった。



第VII-4図 墓室平面図・墓断面図

第VIII-1表 墓計測一覧

計測部位		法量(cm)
墓庭	奥行	356
墓口	幅×奥行	64×60
	高さ	104
墓室全体	幅×奥行	212×280
	高さ(墓口側)	196
	高さ(最高部)	220
	高さ(奥側)	144
シルヒラシ	幅×奥行	144×120
一番ダナ左	幅×奥行	32×120
	高さ	16

計測部位		法量(cm)
一番ダナ右	幅×奥行	32×120
	高さ	16
二番ダナ	幅×奥行	212×59
	高さ	32
三番ダナ	幅×奥行	212×59
(イケ含む)	高さ	18
四番ダナ	幅×奥行	212×42
	高さ	10
イケ	幅×奥行	212×40
	深さ	未計測



図版VIII-6 喜友名前知花家之墓

### 第3節 遺物

#### 1. 蔵骨器

本墓で確認された蔵骨器は、マンガン掛け焼き締め厨子が1基、陶製家型厨子が2基の計3基である。それぞれの特徴は、第VIII-2表に記した。マンガン掛け焼き締め厨子は庇付きのタイプで（第VIII-6図）、二番ダナの左に安置されていた。マンガン掛け庇付き焼き締め厨子は複雑な装飾を施す高価なもので、中流以上の家柄で用いられたという（上江洲 1980）。18世紀終わりから戦前頃まで作られており、本報告資料は蓋内面に咸豐七年（1857年）の銘が入る。

陶製家型厨子の2基は、それぞれ上焼ツノ型厨子（第VIII-7図）と上焼コバルト掛け厨子（第VIII-8図）である。上焼ツノ型厨子は一番ダナ右に、上焼コバルト掛け厨子の身は一番ダナ左にそれぞれ安置されていた。

上焼ツノ型厨子は19世紀前半頃から戦前頃まで作られるが、本報告資料では銘書を確認することはできなかった。蓋の庇部分には、3本一組のツノ状突起を貼付することからこの名称が与えられる。このツノ状突起は、碗などの日常雑器を乗せて一緒に焼くための台で、一回の窯詰でより多くの陶器を焼成炉に入れることができたため、安価という意味で「ソーベー」とも称された（上江洲 1980）。ただ、実際はツノ部分だけでなく屋根の上にも雑器を乗せていました。当該資料では屋根に溶着痕が確認できる。壇屋での聞き取り調査によると、陶製の家型厨子の墓を作る際に粘土に布を被せる工程があるが（倉成 2005）、当該資料においても蓋の裏に布目を確認することができる。

上焼コバルト掛け厨子は、明治以降に輸入されたコバルトを施したもので、19世紀末から戦後まで作られる。ツノではなく、貼り付けなどの装飾が多いため上焼ツノ型厨子より高価だったという。本報告資料の蓋や身には、大正七年（1918年）の銘が記されるが、上焼コバルト掛け厨子は特に大正期に多く作られたという（上江洲 1980）。銘書は、蓋の内面や鷲の側面、身の銘書面や口唇部に施される。

#### 2. その他の遺物

本墓では、蔵骨器の他に沖縄産施釉陶器の鉢（ワンブー）が4点確認された。4点のとも完形の資料であり、大きさや釉調などの特徴は同様で、一番ダナの左右に2点ずつ伏せた状態で置かれていた（第VIII図-4）。うち1点を図化し（第VIII-5図）、その特徴は第VIII-2表に記した。同様のワンブーが左右のタナに2点ずつ計4点置かれていたことから、納棺の際にシルヒラシで利用された可能性も考えられる。その他、一番ダナ左からシルヒラシの左隅に骨壺の破片が集められていた。これらは平成16年のものなど、現代の骨壺である。



図版VIII-7 蔵骨器の安置状況

第VIII-2表 遺物観察一覧

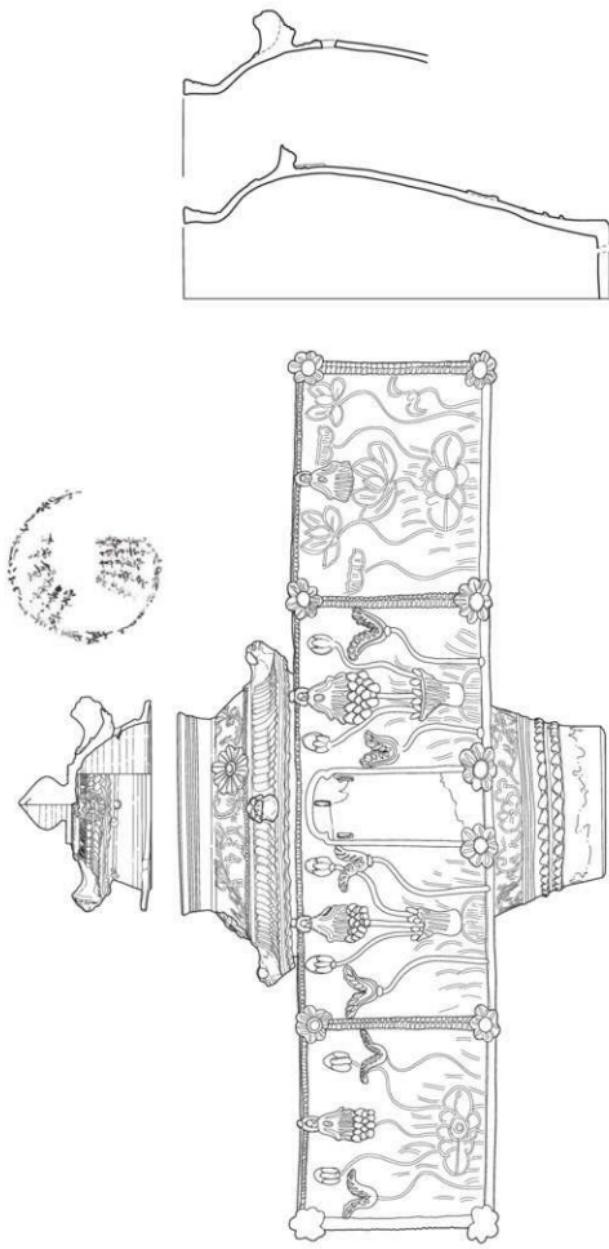
辨図番号 図版番号	遺物 種別	器種	法 cm	所見	銘書	配置場所
第VIII-5図 図版VIII-8	沖縄産施釉陶器	鉢	口径: 21.8 底径: 9.0 器高: 10.7	口縁が鈍緣になる大鉢（ワンブー）。白化粧の上に透明釉を施す。足付は露胎する。内底面は蛇の目状模様が刺さり、露胎部に目跡が溶着する。	—	一番ダナ右
第VIII-6図 図版VIII-9	厨子窯	蓋	上部径: 6.3 下部径: 17.2 器高: 10.9 体部高: 7.0	マンガン掛け底付き焼き締め厨子の蓋。つまみは宝珠形を呈し、つまみ台をつくる。鉢は半分以上を欠損する。降軒に獅子の装飾を貼付する。軒状の装飾直下には波状の貼付文が廻る。この波状貼付文直下に11ヶ所の孔が穿たれる。	内面	二番ダナ左
		身	上部径: 33.0 下部径: 24.8 胴部径: 46.1 器高: 70.0	マンガン掛け底付き焼き締め厨子の身。肩部の文様帯には花の貼付文を4ヶ所に配し、その間を葉文を沈線で施す。降軒には獅子の装飾を貼付する。軒状の装飾直下には波状の貼付文が廻る。肩部文様帯には、法師像や蓮花の貼付文や模彫文を廻る。屋門はアーチ形で、玉筋は施されない。窓は3ヶ所である。胴下部には、葉文の沈線や波状の貼付文が2条廻る。		
第VIII-7図 図版VIII-10	陶製家型厨子	蓋	上部径: 27.5 下部径(幅): 48.5 下部径(奥行): 39.4 器高: 31.8	上焼ツノ型厨子の蓋。入母屋形。棟に鍔を乗せる。外面は、白化粧の上にコバルト釉、鉛釉、緑釉を施す。内面は、鉛釉。鉢裏側は白化粧。ツノ上部は露胎。布目あり。孔: 正面・裏面・両側面それぞれ3ヶ所。	なし	一番ダナ右
		身	上部径(幅): 45.8 上部径(奥行): 37.6 下部径(幅): 37.7 下部径(奥行): 27.8 器高: 42.8	上焼ツノ型厨子の身。法師像や蓮花などを貼付。外面は、白化粧の上にコバルト釉、鉛釉、緑釉を施す。口唇部・底内面は、白化粧。内面は、底の際から口唇近くまで鉛釉を施す。裏面は、白化粧に透明釉を施す。脚底は露胎。孔: 正面1ヶ所、裏面5ヶ所、両側面それぞれ4ヶ所、底面5ヶ所。		
第VIII-8図 図版VIII-11	陶製家型厨子	蓋	上部径: 25.7 下部径(幅): 47.3 下部径(奥行): 37.2 器高: 51.0 体部高: 36.0	上焼コバルト掛け厨子の蓋。棟に鍔を乗せるほか、厨子の装飾を施す。外表面は、白化粧の上にコバルト釉と鉛釉を施す。鉢裏側は白化粧。素地はけやく、赤褐色を呈す。孔: 正面4ヶ所、裏面なし、両側面2ヶ所。	鈍縁 鉢裏 内面	二番ダナ右
		身	上部径(幅): 46.0 上部径(奥行): 36.8 下部径(幅): 37.2 下部径(奥行): 27.4 器高: 46.0	上焼コバルト掛け厨子の身。法師像や蓮花などを貼付。外面は、白化粧の上にコバルト釉と鉛釉を施す。口縁内面は白化粧。外表面は扇門、法師像、花文、丸文等を貼付。孔: 正面・裏面・両側面・底面それぞれ2ヶ所。		

※「法像」の計測位置は、凡例2を参照。



第VIII-5図 沖縄産施釉陶器：鉢（ワングー） 図版VIII-8 沖縄産施釉陶器：鉢（ワングー）

20cm  
0 [cm] (1/10)



第VIII-6図 マンガン掛け庇付き焼き締め扇子：蓋・身



図版VII - 9 マンガン掛け庇付き焼き締め厨子：蓋・身

【銘書】

蓋（内面）

咸豐七年丁巳六月廿七日安里小<sup>ノ</sup>（<sup>ミ</sup>）<sup>：</sup>（被相）洗骨仕立申候

咸豐七年＝一八五七年

御元ノ二男

●安里小ノ

興慶氣登之

同人

妻かま

安里ノ

女子

光緒十三年

十月七日安里小之

妻昌屋空印

妻かまと先

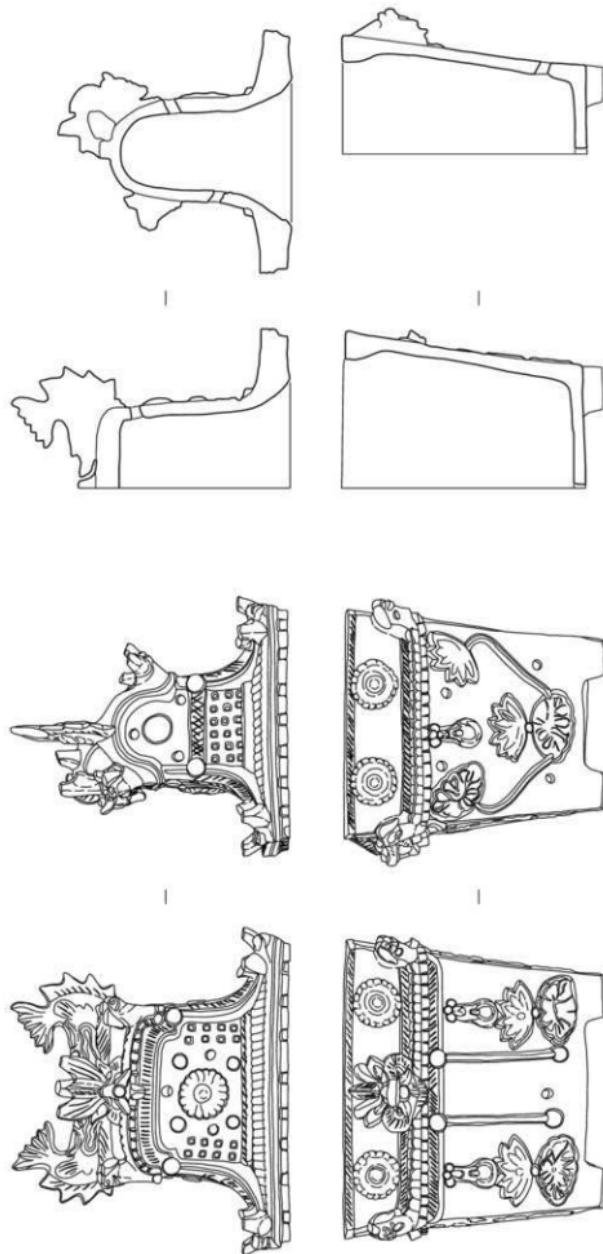
骨仕立□申候

「●」は一文字消されている

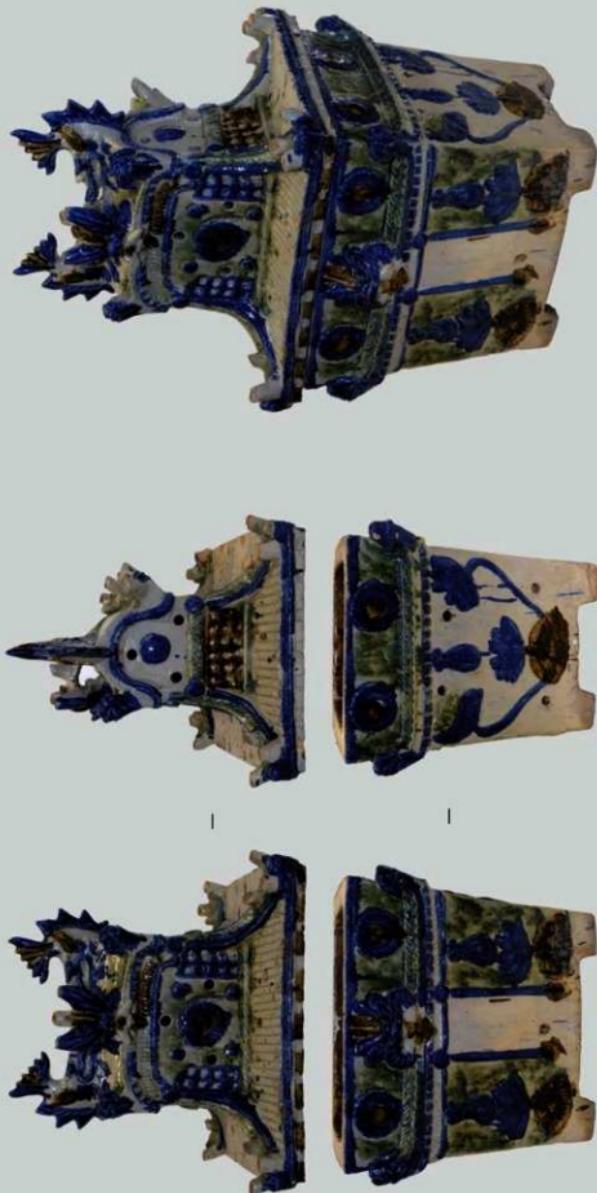
光緒十三年＝一八八七年

第 VIII - 7 図 陶製家型瓶子 - 1 : 蓋・身

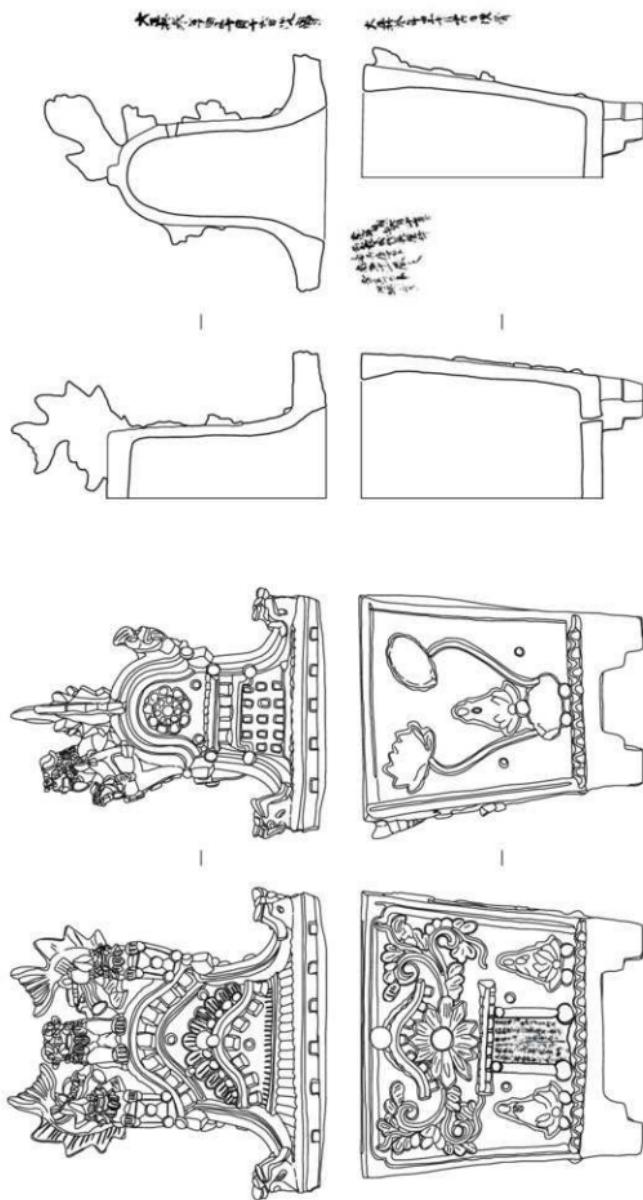
20cm  
（概）



圖版VIII - 10 陶製家型廚子 - 1：蓋・身

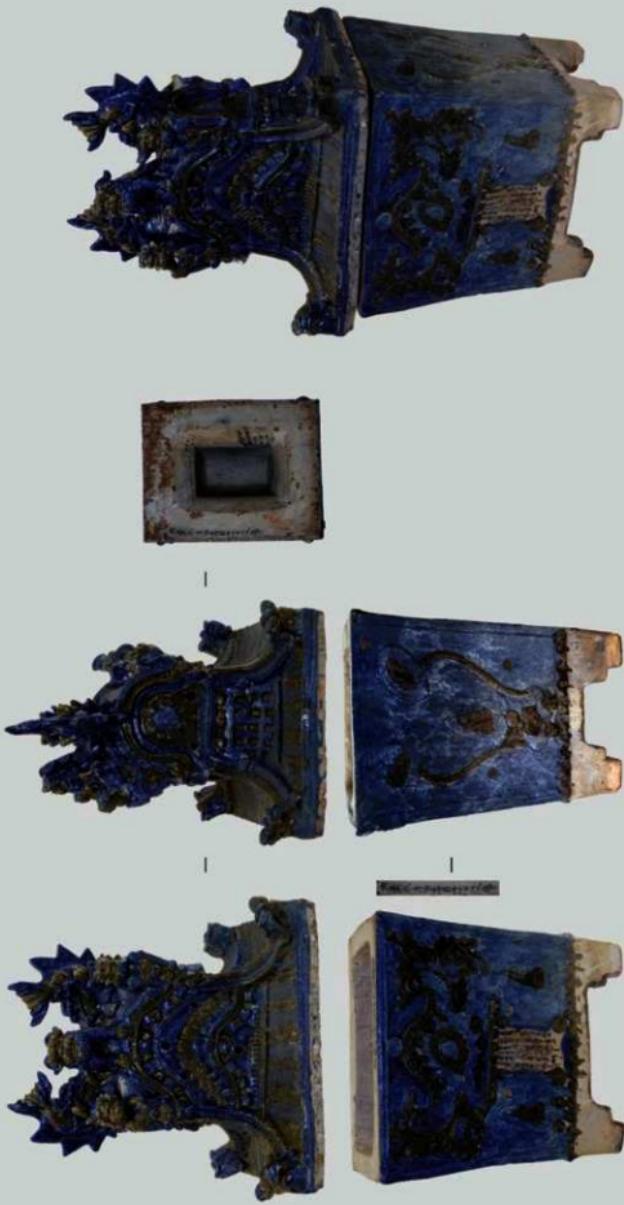


20cm  
5cm



第八圖 陶製家型瓶子 - 2 : 蓋・身

圖版III - 11 陶製家型廚子 - 2 : 蓋・身





蓋(正面)



身(正面)



蓋(側面)



蓋(内面)



身(侧面)

### 【銘書】

蓋(鱗正面)

昭和〇〇〇十〇〇八月〇〇〇洗骨

(鱗裏)

大正拾參年旧子十月十六日洗骨

大正拾參年一九一四年

(内面)

大正七年旧戊午六月十七日死去

大正七年一九一八年

前知花之武代吳屋牛

妻吳屋マカト

歳五十二辰ノ人

童名マカト

泡端ノ女口

身(正面)

大正七年旧戊午六月十七日死去

前知花之武代吳屋牛ノ妻也

吳屋カトマ〇〇〇歲五十一辰ノ女

童名マカト

六十口才牛

西ノ人

前知花一代吳屋牛

大正十〇年〇〇〇十一月〇日死去

(口脣部)

大正拾參年旧子十月十六日洗骨

# 第IX章 大謝名久永地原第一古墓群第13-1号墓の調査成果

## 第1節 はじめに

### 1. 位置と環境

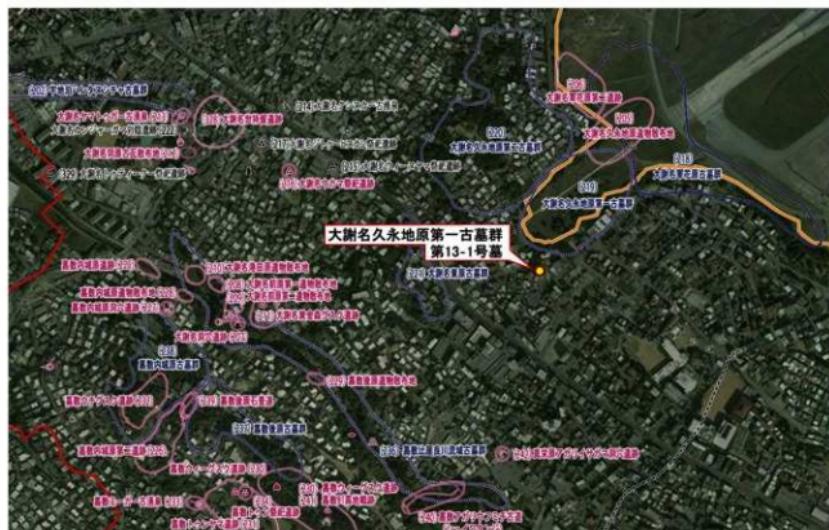
大謝名久永地原第一古墓群は、『宜野湾市文化財情報図』〔平成25年度版〕等で報告がなされている「周知の遺跡」である。当初は、普天間飛行場南西側の丘陵地一帯を「大謝名久永地原・軍花原古墓群」としていたが、当古墓群北西に位置する丘陵に点在する古墓群を「大謝名久永地原第二古墓群」とし、大謝名軍花原古墓群と区別した。

大謝名久永地原第一古墓群は、普天間飛行場の滑走路延長上にあり、全長240m余りの丘陵を中心とする。標高は60~68mで、西海岸から内陸に向かって形成される雛壇状の海岸段丘の第3面(中位段丘下位面)に位置する(第I-2図)。

当該古墓群周囲の丘陵には古墓が散在しており、南西に立地する大謝名東原古墓群には、察度の弟である泰期の墓と言われる金満墓が所在する。



第IX-1図 大謝名久永地原第一古墓群  
第13-1号墓の位置図



第IX-2図 大謝名久永地原第一古墓群第13-1号墓の位置と周辺の文化財



第13-1号墓は、大謝名久永地原第一古墓群の想定される範囲の南方約46.2mに位置するが、昭和20年の航空写真をみると当該古墓群南側の丘陵上に位置する。現在では、第13-1号墓が立地した丘陵の大部分は宅地の開発によって造成され見る影はないが、当該墓周辺は部分的に旧状を残している。

大謝名久永地原第一古墓群は、このような近年の宅地化や普天間飛行場の造成によって姿を消しつつあり、目視で確認できる墓は民間地で20基余り、普天間飛行場内では10基余りに過ぎない（仮墓を除く）。民間地に残る墓の多くは、概ね普天間飛行場のフェンスに沿って、丘陵南東側の裾に並列する。普天間飛行場内には、亀甲墓などの掘り込み式の墓が点在するようだが、民間地の墓の殆どは家形墓で、掘り込み式の墓は破風墓等が3基確認できたのみである。ただし、開発造成が及んでいない丘陵部分については、第13-1号墓のように未確認の古墓が所在する可能性も考えられる。なお、大謝名久永地原第一古墓群と大謝名東原古墓群の間には古墓が点在しており、亀甲墓も数基を確認することができる。



図版IX-1 普天間飛行場内の大謝名久永地原古墓群（左写真：1980年代撮影）



第IX-3図 昭和20年航空写真と地形図

## 2. 調査経過

平成 26 年 2 月 24 日、大謝名二丁目 976-1 番地にて、地権者より樹木の伐採中に古墓が不時発見された旨の連絡を受けて現場を確認。当該地では今後土地の造成を行う予定であるとのことから、記録調査を行うこととなった。

調査は平成 26 年 3 月 13 日から開始し、同月 28 日に終了した。伐採・清掃作業を行った後、24 日～26 日に基準点測量及び 3 次元レーザー測量を行い、現状を記録した。翌日、墓口前に約 100×80 cm のトレーニングを設定し、サンミラーと思われる遺構を確認して調査を終了した。

その後、平成 27 年 6 月 2 日に当該地において保育園建設に係る建築確認申請が提出され、現在工事が行われている。



図版IX - 2 民間地の大謝名久永地原第一古墓群（平成 28 年撮影）



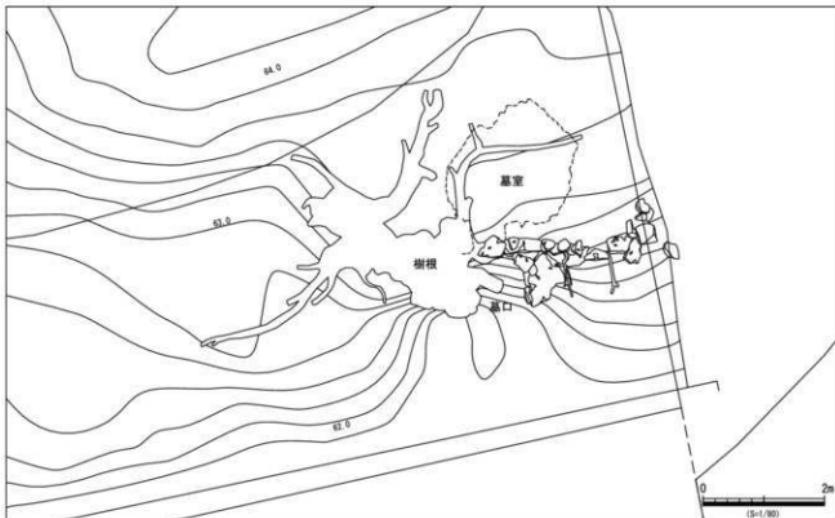
図版IX - 3 調査経過状況

## 第2節 墓の構造

当該墓は掘込墓である。石灰岩丘陵の斜面を利用して構築しており、南向きに墓口を造る。墓口の前面は、やや平坦地を造る。墓口の両側面には切石が積まれ、墓口は幅約60cm、高さ約80cmを測る。墓口の石積みに沿って東側に石列を構築するが、一部は崩れている。

墓口左側の切石より約100×80cmのトレンチを設定して掘削したところ、地表下10cm足らずでサンミマーと思われる切石を検出した（図版IX-4）。これは、地山を掘り下げて10cm程度砂利混じりの盛り土を行った上に構築されており、墓口側面の切石の下に据えられる。

墓室は平面が不定形で、幅・奥行とも約2.0mを測る。天井までの高さは約1.0mである。奥に段差があるが、蔵骨器を置けるほどの広さはない。

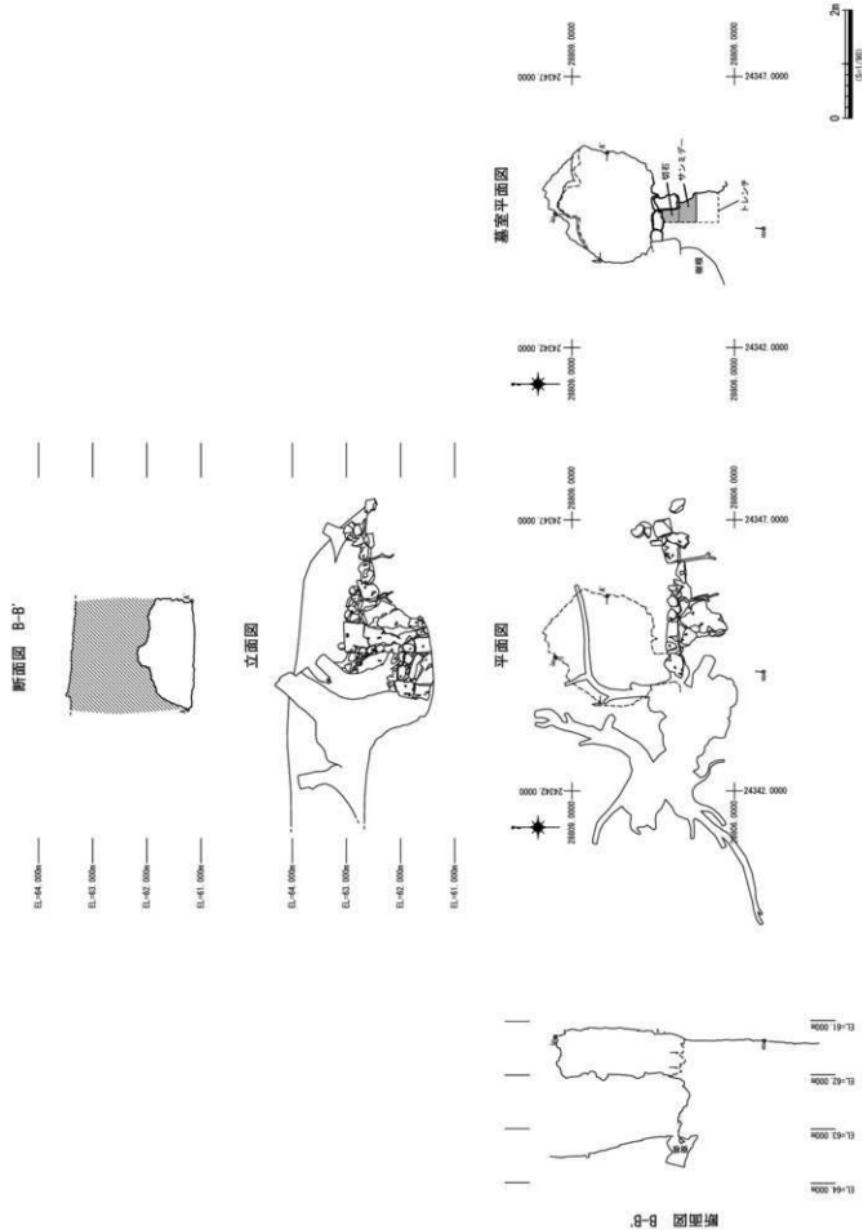


図版IX-4 地形測量図



図版IX-4 サンミマー検出状況

第IX-5図 平面図・幕室平面図・断面図・立面図



### 第3節 遺物

大謝名久永地原第一古墓群第13-1号墓では、合計30点の遺物が得られた。墓室内に蔵骨器などは残されておらず、いずれの遺物も墓室外から採集した。その殆どは表探で、ボージャー厨子や沖縄産無釉陶器など、一部の遺物はサンミーダー検出の際に掘削したトレンチから出土したものであるが、いずれも表土層からの出土である。

蔵骨器は、サンゴ石製石厨子と赤焼御殿型厨子、ボージャー厨子の3種類が得られている。サンゴ石製厨子と赤焼御殿型厨子は蓋と身が得られているが、いずれも破片のため対応関係は不明である。このうち、比較的大形の破片を図化した(第IX-7図)。また、ボージャー厨子は、全形を復元できる蓋が2点得られている(第IX-8図)。なお、これらの蔵骨器から銘書は確認できていない。

サンゴ石製石厨子は、16世紀前半頃から造られているが、民間で使われるのは17世紀後半以降になる。第IX-7図5は、棟に鰐に乗せるタイプだが、これは当該厨子の中では新しく、18世紀半ば頃から多くの傾向にあるという(上江洲1980)。

赤焼御殿型厨子は17世紀後半頃から造られるが、特に18世紀後半頃のものが多いようである。当時、上の階層で使用されていたといふ(上江洲1980)。

ボージャー厨子は17世紀半ば頃から造られ、18世紀後半頃にはマンガン掛けの厨子甕にとって代わるようである。

沖縄産無釉陶器は破片が7点得られており、その殆どが甕または甕と思われる資料である。そのため、蔵骨器として転用されたものの可能性が考えられる。この内、底径を復元できる資料1点を図化した(第IX-6図1)。

蔵骨器以外の遺物には、本土産磁器や金属製品、シャコガイが得られている。このうち、特に残りの良い碗と湯呑を図化した(第IX-6図2・3)。なお、シャコガイは一部を欠損しているが、 $26.0 \times 16.3$  cm程で重量は約1.5 kgである。

第IX-1表 遺物集計一覧

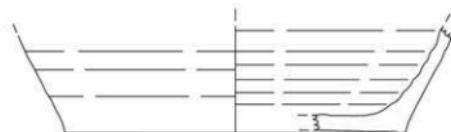
		表土	表探	計
サンゴ石製石厨子	蓋		4	4
	身		4	4
赤焼御殿型厨子	蓋		4	4
	身		1	1
ボージャー厨子	蓋	1	2	3
沖縄産無釉陶器	甕or甕		6	6
	不明	1		1
本土産磁器	碗		1	1
	湯呑		2	2
	皿		2	2
金属製品	不明	1		1
シャコガイ			1	1
	計	3	27	30



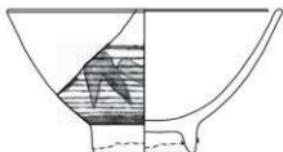
図版IX-5 遺物散布状況

第IX-2表 遺物観察一覧

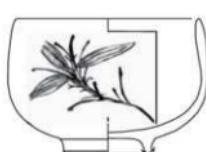
挿図番号 図版番号		遺物種別	器種	法量 (cm)	重量	所見	
第IX-6	図版IX-6	1	沖縄産無釉陶器	壺/甕	底径：14	59.2g	比較的薄手。小型の壺か。
		2	本土産磁器	碗	口径：11.1 底径：4.1 器高：5.9	76.8g	口唇舌状で、口縁は直状に開く。高台は高い。疊付は露胎する。外面に筆を描く。
		3	本土産磁器	湯呑	口径：7.5 底径：3.4 器高：5.5	31.6g	口唇舌状で、口縁は内傾する。腰は張る。高台は低い。 外面に草木を描く。
第IX-7図	図版IX-7	4	家型石厨子	蓋	下部径(幅)：48.6 下部径(奥行)：31.5 器高：18.3	8.0kg	サンゴ石製石厨子の蓋。入母屋形。 軒部分の大半を欠損する。同図6との対応関係不明。
		5	家型石厨子	蓋	器高：31.5 体部高：21.9	9.0kg	サンゴ石製石厨子の蓋。入母屋形。棟に鰐を乗せる。 半分以上を欠損する。同図6との対応関係不明。
		6	家型石厨子	身	下部径(幅)：50.8 下部径(奥行)：43.6	28.3kg	サンゴ石製石厨子の身。同図4・5との対応関係不明。
		7	家型陶製厨子	蓋	器高：16.7	3.1kg	赤焼御殿型厨子の蓋。入母屋形。大半を欠損。同図8との対応関係不明。
		8	家型陶製厨子	身	—	1.7kg	赤焼御殿型厨子の身。口縁の一部から胸部下半まで の小破片。法師像が残る。同図7との対応関係不明。
		9	厨子甕	蓋	上部径：9.3 下部径：32.8 器高：11.2 体部高：8.4	1.3kg	ボージャー厨子の蓋。笠形。つまみは饅頭形を呈し、 つまみ台はヘラによる削り出しによって成形。 体部は比較的の低く、やや内溝する。外面に1条の沈線 による波状文を刻らせる。器面ナデ調整。
		10	厨子甕	蓋	下部径：33.4 器高：13.9	2.5kg	ボージャー厨子の蓋。笠形。つまみは饅頭形を呈す。 つまみ台は作られず、丸味を帯びる。器面ナデ調整。



1



2



3

0 4cm  
(S=1/2)

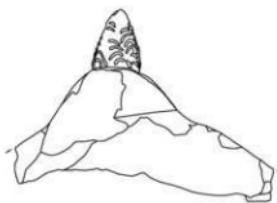
第IX-6図 沖縄産無釉陶器：壺 / 甕 (1)、本土産磁器：碗 (2)・湯呑 (3)



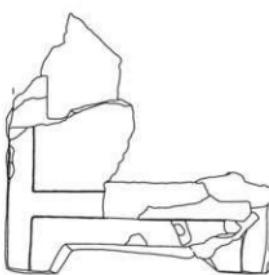
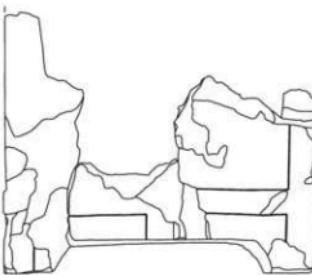
図版IX-6 沖縄産無釉陶器：壺 / 甕 (1)、本土産磁器：碗 (2)・湯呑 (3)



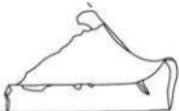
4



5



6



7



8

0 20cm  
(S=1/8)

第IX-7図 家型石厨子：蓋（4・5）、身（6）、家型陶製石厨子：身（7）、蓋（8）



4



5



6

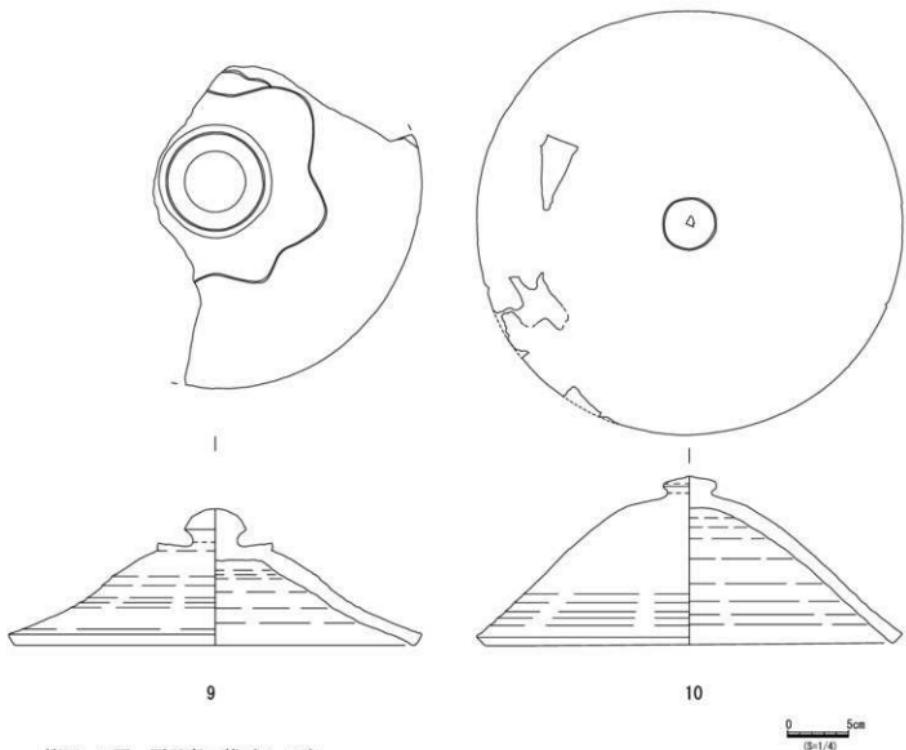


7



8

图版IX - 7 家型石厨子：盖（4·5）、身（6）、家型陶製石厨子：身（7）、盖（8）



第IX-8図 肩子甕：蓋（9・10）



図版IX-8図 肩子甕：蓋（9・10）

## 【参考・引用文献】

- 上江洲均 1980『沖縄の厨子甕』『日本民族文化とその周辺 歴史・民族篇』国分直一博士古希記念論集編纂委員会編 新日本教育図書株式会社
- 河名俊男 1988『琉球列島の地形』沖縄新星図書出版
- 倉成太郎 2005「厨子甕の製作について」『壺屋焼物博物館紀要』第6号 那覇市立壺屋焼物博物館
- 鈴木 尚 1975『沖縄に於ける洪積世人類の発見』『人類学雑誌』83巻2号 日本人類学会
- 瀬戸哲也 2002『グスク時代の土塙墓』(沖縄考古学会定例会資料)
- 瀬戸哲也 2009『沖縄・グスク時代の葬墓制『日本の中世墓』狭川真一編 高志書院
- 高宮廣衛・金武正紀・鈴木正男 1975『那覇山下町洞穴発掘経過報告』『人類学雑誌』83巻2号 日本人類学会
- 高宮廣広 2005『島の先史学 - バラダイスではなかった沖縄諸島の先史時代 - 』ボーダーインク
- 時津裕子 2000『南西諸島における箱式石棺墓の再検討』『琉球・東アジアの人と文化(上巻)』高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会
- 喜元政秀・當眞詞一 1981『考古学上よりみたる南島の葬制について』『南島研究』第22号 南島研究会
- 西銘 章 2004『沖縄における葬墓制の変化 - 近世墓研究ノート - 』『南島考古』第23号 沖縄考古学会
- 平敷令治 1988『沖縄の亀甲墓』『沖縄の宗教と民俗』窟徳忠先生沖縄調査二十年記念論文集刊行委員会
- 前川 要 2003『南西諸島における畿内型中世集落成立の歴史的意義』『南島考古』第22号 沖縄考古学会沖縄県立埋蔵文化財センター編 2001『伊佐前原第一遺跡』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第4集)
- 山崎真治 2015『沖縄先史文化起源論をめぐる近年の動向と課題』『南島考古』第34号 沖縄考古学会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2006『新城下原第二遺跡』(沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第35集)
- 沖縄県立博物館・美術館編 2015『琉球弧の葬墓制 風とサンゴの弔い』
- 宜野湾市史編集委員会編 1985『宜野湾市史』第五巻 資料編四 民俗
- 宜野湾市史編集委員会編 1994『宜野湾市史』第一巻 通史編
- 宜野湾市史編集委員会編 1991『宜野湾市史別冊 写真集「ぎのわん」』
- 宜野湾市史編集委員会編 2000『宜野湾市史』第九巻 資料編八
- 宜野湾市教育委員会編 1989『土に埋もれた宜野湾』(宜野湾市文化財調査報告書第10集)
- 宜野湾市教育委員会編 1994『真志喜森川原遺跡』(宜野湾市文化財調査報告書第18集)
- 宜野湾市教育委員会編 1996『野嵩ウガンヌカタ遺跡』(宜野湾市文化財調査報告書第23集)
- 宜野湾市教育委員会編 1996『東間ノロ墓』(宜野湾市文化財調査報告書第24集)
- 宜野湾市教育委員会編 2007『喜友名後原・勢頭原丘陵古墓群 喜友名前原第一古墓群』(宜野湾市文化財調査報告書第40集)
- 宜野湾市教育委員会編 2007『ぎのわんの文化財』(第七版) (宜野湾市文化財保護資料第67集)
- 宜野湾市教育委員会編 2009『宜野湾市の文化財情報図』(宜野湾市文化財保護資料第68集)
- 宜野湾市教育委員会編 2011『市内埋蔵文化財発掘調査報告書2』(宜野湾市文化財調査報告書第47集)
- 宜野湾市教育委員会編 2012『ぎのわんの地名 - 内陸部編 - 』(市民民俗芸能調査報告書)
- 宜野湾市教育委員会編 2013『平成24年度文化財市民活用事業 企画展示会 宜野湾はじまりや! ~シマ・ムラ、チネー・イエへの歩み~<企画展示会 図録編>』
- 宜野湾市教育委員会編 2014『宜野湾市文化財情報図 [平成25年度版]』(宜野湾市文化財保護資料第72集)
- 北谷町教育委員会編 2003『後兼久原遺跡』(北谷町文化財調査報告書第21集) 北谷町教育委員会
- 那覇市立壺屋焼物博物館 2014『沖縄宗教藝術の精華 厩子・門上秀叡・千恵子コレクション収藏記念報告書』

# 報告書抄録

ふりがな 書籍	しないまいぞうぶんかざいはつくちょうさほうくしょ 市内埋蔵文化財発掘調査報告書3						
副書名	基地内遺跡ほか発掘調査事業 野嵩上後原古墓群 野嵩真境名家古墓 真志喜グスクヌハナ古墓群 真志喜グスクヌハナ古墓群第11-1号墓 嘉数比屋良川流域古墓群第07-1号墓 喜友名前知花家之墓 大謝名久永地原第一古墓群第13-1号墓						
巻次	一						
シリーズ名	宜野湾市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第53集						
編著者名	伊藤圭 長濱健起 仲村綾 来間千明 山田浩久						
発行機関	沖縄県宜野湾市教育委員会						
所在地	郵便番号901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号 TEL098-893-4430						
発行年月日	2017(平成29)年3月30日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
野嵩上後原古墓群	宜野湾市 野 嵩	010	26° 17' 17. 5"	127° 47' 3. 4"	20140701 ~ 20140820	16, 300	野嵩第一公園整備工事に伴う調査。
野嵩真境名家古墓	宜野湾市 野 嵩	010	26° 17' 18. 4"	127° 47' 1. 8"	20100820 ~ 20100824	155	野嵩第一公園整備工事に伴う調査。
真志喜グスクヌハナ古墓群	宜野湾市 真 志 喜	191	26° 16' 31. 1"	127° 43' 57. 4"	20130307 ~ 20130328	7, 700	開発工事に伴う調査。
真志喜グスクヌハナ古墓群 第11-1号墓	宜野湾市 真 志 喜	191	26° 16' 33. 7"	127° 44' 5. 2"	20110817 ~ 20110819	155	墓の修繕に伴う調査。
嘉数比屋良川流域古墓群 第07-1号墓	宜野湾市 嘉 数	236	26° 15' 43. 9"	127° 44' 7. 3"	20071213 ~ 20071216	6	比屋良川公園造成工事による不時発見に伴う調査。
喜友名前知花家之墓	宜野湾市 喜 友 名	085	26° 17' 16. 0"	127° 45' 52. 7"	20100928 ~ 20100929	6	墓の改装に伴う調査。
大謝名久永地原第一古墓群 第13-1号墓	宜野湾市 大 謝 名	219	26° 15' 49. 6"	127° 44' 30. 8"	20140224 ~ 20140320	15	土地造成による不時発見に伴う調査。
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
野嵩上後原古墓群	墓 (掘込墓)	近世～近代	シルヒラシ、 タナ 等	蔵骨器、 沖縄産陶器 等			
野嵩真境名家古墓	墓 (亀甲墓)	近世～近代	シルヒラシ、 タナ 等	蔵骨器			
真志喜グスクヌハナ古墓群 第11-1号墓	墓	近世～近代	—	—			
嘉数比屋良川流域古墓群 第07-1号墓	墓 (掘込墓)	近世～近代	—	—			
喜友名前知花家之墓	墓 (家形墓)	近世～現代	シルヒラシ、 タナ、 イケ	蔵骨器、 沖縄産施釉陶器			
大謝名久永地原第一古墓群 第13-1号墓	墓 (掘込墓)	近世～近代	サンミデー、 シルヒラシ	蔵骨器、本土産磁器			
要約	野嵩上後原古墓群では、平成26年度公園整備に伴う分布調査及び地形測量を行った。本報告書所収の真境名家古墓は野嵩上後原古墓群に所在し、平成22年度野嵩第一公園整備事業に伴う記録調査を行った。真志喜グスクヌハナ古墓群では、平成23年度園発工事に先立つ地形測量を行った。また、真志喜グスクヌハナ古墓群第11-1号墓では、平成23年度に墓の修繕に伴う記録調査を行った。嘉数比屋良川流域古墓群第07-1号墓は、比屋良川公園造成工事の際に不時発見され、記録調査を行った。本報告書所収の前知花家古墓は、喜友名前知花家之墓に所在し、平成22年度に墓の建て替えに伴う記録調査を行った。大謝名久永地原第一古墓群第13-1号墓は、平成25年度に土地造成に伴う樹木の伐採作業で不時発見され記録調査を行った。						

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権(発行者)の承諾なく、この報告書を複製して利用できます。なお、利用にあたっては、出典を明記してください。

宜野湾市文化財調査報告書 第53集

## 市内埋蔵文化財発掘調査報告書 3

平成19・22~26年度  
基地内遺跡ほか発掘調査業務

野嵩上後原古墓群  
野嵩真境名家古墓  
真志喜グスクヌハナ古墓群  
真志喜グスクヌハナ古墓群第11-1号墓  
嘉数比屋良川流域古墓群第07-1号墓  
喜友名前知花家之墓  
大謝名久永地原第一古墓群第13-1号墓

発行年 2017(平成29)年3月30日

編集発行 沖縄県宜野湾市教育委員会

住所 〒901-2203  
沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号  
TEL 098-893-4430

印刷 株式会社 沖産業  
TEL 098-898-2191